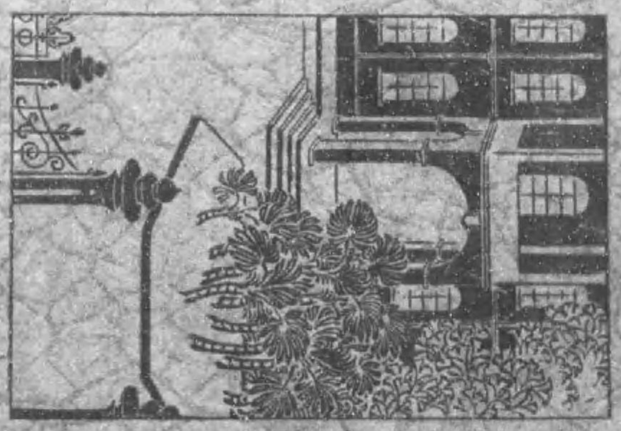
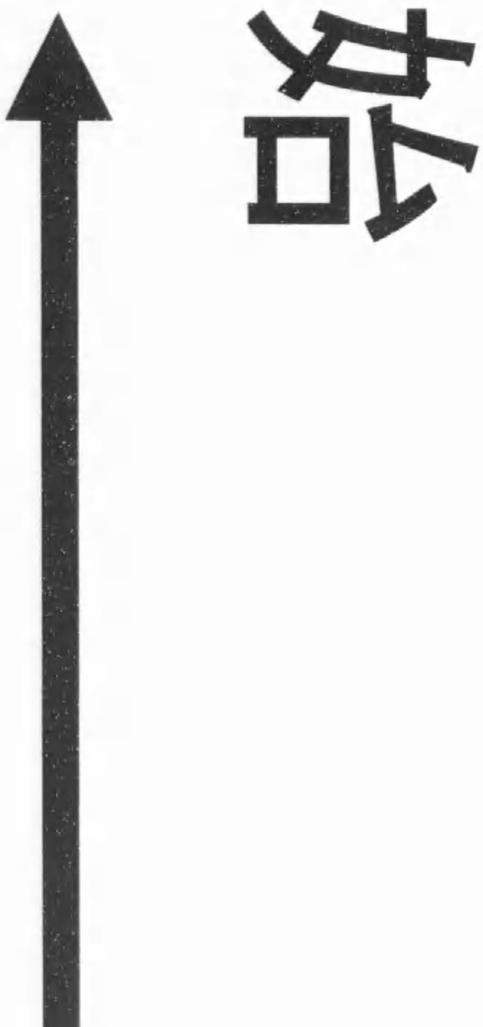


616
217


前

# 贈呈

前田
是山

兩和上古稀記念會

特 216
938

# 昌山和上小部集

# 是山和上小部集目次


一　本願成就文略解……一
二　六字釋講錄……二五
三　往生禮讃前序講錄……四四
四　執持鈔講話……九一
五　一乘眞實の利益……一五七
六　眞俗二諦……一七一
七　淨土眞宗……一七九
八　佛法力の不思議……一八九
九　如實修行……一九六
一〇　眞宗の敎行信證……二〇四
一一　親鸞聖人の御持言……二一八
一二　至純なる信仰……二三〇


目次終

# 一　本願成就文略解

本願成就文言諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念至心回向願生彼國卽得往生住不退轉唯除五逆誹謗正法

謹で按ずるに、今文は彌陀發願の正意、釋迦出世の本懷にして、十方の諸佛同く之を讃じ、三國の高僧共に之を傳ふ、宗祖開宗の根基、凡聖通入の妙門なり。『信文類』に歎じて「一實圓滿之眞敎眞宗」と云ひ、『改邪鈔』には斷じて大經の至極といへり。嗚呼、僅に四十言、宗要盡矣、眞宗を學ぶ者細心に研覈せずして可ならんや。然り而して義旨多含、且く一意に依て先づ大旨を示さば、十句ある中、前の八句は正く攝化の正意を述べ後の二句は別して所被の分齊を示す。前八句の中、初の一句は機、後の七句は法。法の中、聞其等の三句は受法、願生等の三句は得益、至心回向の句は他力、卽ち成上起下なり。圖示せば如左

されば、無善造惡の凡夫が、彌陀の名義を聞信する一念に、他力回向によりて佛德が凡夫の有となり、佛因爰に滿じて不退轉に住し、捨命已後淨土に往生して大涅槃を證す、是れ横超難思の妙益、卽ち願成就一實圓滿の眞敎眞宗なり。大旨如此。

次に文句を釋せば

「諸有衆生」。『信文類』『三經往生文類』に今文を引て並に諸有をあらゆると訓じ、又「諸聞阿彌陀德號」の文を引て諸の字をあらゆると訓じ、『證文』に「諸有衆生といふは十方のよろづの衆生とまうすこゝろなり」と云ひ、『三經往生文類』康元本に今文を引て所有に作るは『如來會』に「所有衆生」と釋せるに同く、是れ通じて九界の凡聖を攝することを示しだまふなり。『和讃』の「十方諸有の衆生は」の左訓に「しようは二十五有の衆生といふ、我等二十五有にゆきむまるゝといふこゝろなり」とあるは是れ別して五道の凡夫を攝することを明したまふなり。二釋ある中後釋を字釋とす。後釋を以て願文を照すに、彼は大智の普及を明し、此は大悲の周急を示す、其實は互顯、前釋ある所以なり。抑、十方諸有の衆生根性同じからず品秩千萬、次下には分て三輩とし、更に觀經に至て開て九品となす、若は三、若は九、品秩を分つもの、是れ爲凡にして而も極劣の者を以て其正機となすことを示す。下輩の文及下々品の中に、願意を顯すこと最詳なるもの正に此が爲なり。已に極劣を正機となす、則ち諸機の受法みな則を此に取る、既に此に則るときは、九品迹を泯じ、通じて一機となる。所云、無有出離之緣なるもの是なり。唯此機のみあり願力に托することを得る。故に凡夫を以て淨敎所被の機となし、信機信法以て安心の方軌を定む。界外の三乘亦此より入る、大經會中に補處の大士下て痛燒に列するもの此が爲なり。於是乎萬機は一機となる、斯を十方のよろづの衆生と云なり。

「聞其名號信心歡喜乃至一念」。『改邪鈔』に云く「大經のなかには第十八の願をもて本とす、十八の願にとりてはまた願成就をもて至極とす、信心歡喜乃至一念をもて他力の安心とおほしめさるゝゆへなり」と。又云く「それ本願の三信心といふは至心信樂欲生これなり、まさしく願成就したまふには聞其名號信心歡喜乃至一念とらとけり、乃至、祖師聖人御相承弘通の一流の肝要これにあり、これをしらざるをもて他門とし、これをしれるをもて御門弟のしるしとす」と。一章の至要なること見るべし。今釋義の便に從ひ五節とす。

一に「其名號」。これ所聞の體を擧て以て能聞の信能く報土の眞因を成ずることを示す。其とは物を指定するの辭、卽ち諸佛讃嘆の名號にして所聞所信の法を指定するなり。若能讃に約すれば眞實敎若所讃に約すれば眞實行、此れ之の敎行は相卽不二終南の所云二尊の勅命なり。故に行を全じて是れ敎、『敎文類』に所云、本願爲宗名號爲體なり。敎を全じて是れ行、『唯信文意』に云く「この如來の尊號は不可稱不可說不可思議にましますゆへに一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめたまふ大慈大悲のちかひのみなり乃至十方微塵世界にあまねくひろまりて佛敎をすゝめ行ぜしめたまふなり」と、是なり。『行文類』に終南の六字釋を引證し、次に自釋を加へて三義みな佛上に約し、以て衆生は毫末も自功を負まず、唯其修成を領するのみなることを顯し、後に「聞願力」と云、願力

とは他力なり、『信文類』には「聞佛願生起本末」と云ひ、「御鈔」には「信受本願」と云ひ、『證文』には「本願の名號をきく」と云ふ、是れ『觀念法門』に「名願力」と云ふに本く、卽ち本願招喚の勅命なり。

二に「聞」。若通途に依れば聞の體は是れ耳識にして聞の果は是れ慧なり、『攝論』と云。今は卽ち之に異なり、諸佛の讃嘆を聞て其名義に達し心に開明を得る之を聞と云。故に此聞相を開て信心歡喜と說けり。知るべし信喜は卽ち聞相なることを。『信文類』に云く「言聞者衆生聞佛願生起本末無有疑心是曰聞也」と。佛願の生起本末とは所聞の其名號の體義を開示し以て能聞の相を詳にす、無有疑心とは聞の如實を示して聞信一致を知らしむ。佛願生起本末とは古來多說あり。今謂く、佛願とは『行文類』には願力と云、『證文』には本願と云、本願卽名號なるが故に『末燈鈔』に云く「誓願をはなれたる名號も候はず、名號をはなれたる誓願も候はず候」、『執持鈔』に云く「本願や名號々々や本願」と、名號卽ち第十八願なり。生起とは佛願の起る所由なり、『信文類』至心釋に云く「一切群生海自從無始已來乃至今日至今時穢惡汚染無淸淨心虛假諂僞無眞實心等と、三心みな然り、是れ佛願の由て起る所以なり。本末とは修因を本となし果成を末となす、同至心釋に云く「不可思議兆載永劫行菩薩行時三業所修乃至一念一刹那無不淸淨無不眞心」と、これ卽ち修因なり、又云く「成就圓融無碍不可思議不可稱不可說至德」と、是れ其果成なり、三心みな爾り、之を本末となす。或云、本末は具足全義を謂ふ、『信文類』に引く所の涅槃經に「雨行卽爲說其本末」と云が如し、何をか全義となす、唯佛の他力攝受にして衆生自力の作を取らざるが故に、然れば、佛願生起の所由は卽是れ劣機の不淨不實、これ機實にして、佛願の本末は本佛の淸淨眞實、これ法實なり、佛願この機の爲に起り修行成滿して能く此劣機を攝す、之を佛願生起本末とす、衆生之を聞て如實に信受す、卽ち佛願の生起を甘受す、これ信機、佛願の本末を仰信す、これ信法、信機自力を捨て、信法他力に托す、決定して疑心あるなし、之を聞て疑ふ心なしと云、これ弘願別途の聞なり、第二十願に聞我名號と說くが如き聞は不如實にして信と別なり、今は彼不如實に簡ぶ、故に名號を顯すに願力を以てし、聞くまゝにこれ之を信ずる如實の聞なることを示したまふなり。『證文』に云く「きくといふは本願をきゝてうたがふこゝろなきを聞といふなり、またきくといふは信心をあらはすみのりなり」と。二釋ある中、初は信を以て聞を顯し不如實の聞に簡ぶ、後は聞を以て信を顯し信の他力なることを示すなり。『最要鈔』に今文を釋して後に、其佛本願力の文、其有得聞の文、彌陀智願海の文、佛願生起本末の文を列擧して、結釋してのたまはく「經釋すでに聞をもて詮要とせられたり、よくきくこころにて往生の心行を獲得する條顯然なり、しるべし」と。『金剛錍』云「今家殊に聞をもて詮要としたまふに四意あり、一には他力回向を顯すが故に、二には自力の私計を遮するが故に、三には速疾の妙益を示すが故に、四には信心の體相を彰すが故に」と、說得て好矣。『信文類』に『涅槃經』聞不具足を明す文を引く、意は不如實の聞に簡で如實の聞を反顯したまふなり。文に三節あり。初節の意は諸佛の所說は如來の因願果德を讃歎す、之を謂て卽願力名號と云、若方便の人は止名號を稱念して往生すと信じて願力往生せしむることを信ぜざるが故に。第二節の中受持六とは次上の信ぜざる所の者、不能等とは、『禮讃』に云ふ「樂近雜

緣自障々他往生正行故」なるものなり。第三節は此人亦他の爲に解說する等のことあるも中實に信順の心なきもの、『禮讃』に云ふ「心生輕慢雖作業行常與名利相應故人我自覆不親近同行善知識故」なるものなり。此後二節は初節不具足の過を示すものなり。問、『信文類』信樂釋下に『涅槃經』を引て云「從聞生不從思生爲信不具足」と、今の聞は卽信なりとせば彼文を如何せん。答、かの聞は第廿願の聞に同く聞不如實なり、佛名を聞くといへども如實の思なく自力心をもて本願力を願求す、是を「從聞生信」と云、故に信不具足なり、思とは聞て疑はず往生を決了す、是を「從思生信」とす、今は聞思具足の聞なり、『文類』總序に云く「聞思莫遲慮」と、『淨土見聞集』に云く「聞よりおこる信心思よりおこる信心といふはきゝてうたがはずたもちてうしなはざるをいふ、思といふは信なり、きくも他力よりきゝ、おもひさだむるも願力によりておもひさだむるなればともにもて自力のはからひちりばかりもよりつかざるなり」と。可知。

三に「信心」。上の聞相を開示す、卽ち名號を聞き得たる心相を信心と云、所云「無有疑心」是なり。『信文類』に云く「言信心者本願力回向之信心也」と。信心の相は上の聞を釋する處に已に顯る、故に其體に約して本願力回向といふ、已に聞名卽ち信心なり、聞名の外に信體あるとなし、唯名義の衆生心中に印現せるのみ、毫も衆生の發起する所に非ず。次上に其佛本願力等の經文を引く、聞名、欲生、唯是願力、故に本願力回向之信心と云なり。信心の名を釋するに相承に二義あり。一にたのむこゝろ、まことにいたるこゝろ、是れ信疑對なり。『經』に不了佛智に對して明信と說き、南天は信疑相對して華の開不を論じ、乃至吉水は信疑對判して迷悟の差を辨ず。『信文類』に云く「眞知疑蓋無間雜故是名信樂」と、『化文類』に云く「如來誓願疑蓋無雜故言信也」と、『證文』云く「信心は如來の御ちかひをきゝてうたがふこゝろのなきなり」と、『文意』に云く「信はうたがふこゝろなく乃至本願他力をたのみて自力をはなれたるこれを唯信といふ」と、『和讃』云く「佛智の不思議をたのむべし」と、『寶章』諸處みな然り。意謂く、不虛作の佛德攝受衆生の願力を聞て自力淨盡し他力に乘托して毫も疑ふこゝろなくたのもしきこゝろなり。二にまことのこゝろ、是れ實虛對眞僞對なり。『經』に明信佛智と說き、『信文類』に「眞實誠滿之心」、又は「以利他回向之至心爲信樂體也」と釋し、『和讃』に「信心の智慧」といひ、『口傳鈔』に「一念無上の佛智」といひ、『最要鈔』に「この信心をまことのこゝろとよむうへは凡夫の迷心にあらずまたく佛心なり」と云ひ、『寶章』に「信心といへる二字をばまことのこゝろとよめるなり」等と云ふ。意謂く、此信は凡夫自發の心にあらず、體卽ち佛心なることを顯すなり。『信文類』至心釋の下に、『涅槃經』を引て言く「言眞實者卽是如來乃至佛性卽是眞實」と、宗祖亦云く「大信心者則是眞如一實之信海也」と、此は所施の信體に就て眞實と名くるなり。當に知るべし、前義は信相に約し、後義は信體に就く、體は是れ相の體にして、相は其體が相なれば體相無碍以て眞實報土の正因を成ずるなり。問、若然らば衆生には全く眞實の心相なきや。答、或云、必しも眞實心相なきにあらず、謂くこの無疑心中に表裏なき相あり、亦逢緣に逢ふと雖も移轉せざる相あり、如是堅固の相は卽眞實の心相と云べきかと、須く思擇すべし。

四に「歡喜」。信心の義相を顯す。『信文類』に云く「形身心悅豫之貌也」と、『證文』に云く「歡喜といふは、歡はみをよろこばしむるなり、喜はこゝろをよろこばしむるなり、うべきことをえてんずとかねてさきよりよろこぶこゝろなり」と、共に是れ喜相を形容するものにして、所謂廣大難思の慶心なり。

然るに今家歡喜を釋するに其二途あり、一には初起に約す、二には後續に約す。第三十五願に言く「聞我名字歡喜信樂」と、三輩中に言く「若聞深法歡喜信樂」と、流通分に言く「聞是經法歡喜信樂」と、『觀經』に言く「心歡喜故得無生忍」と、『讃阿彌陀佛偈』に今文を述して曰く「諸聞阿彌陀德號、信心歡喜慶所聞」と、『序分義』に云く「因茲喜故卽得無生之忍」と、『行文類偈』に云く「能發一念喜愛心」と、又云く「慶喜一念相應後」と、『信文類』に云く「一念者斯顯信樂開發時尅之極促彰廣大難思慶心也」と、同く唐譯を引て云く「能發一念淨信歡喜愛樂」と、同欲生釋下に「歡喜愛樂所有善根回向」の文を引く、同信樂釋下に、『華嚴經』を引て言く「聞此法歡喜信心無疑者速成無上道」と、『御鈔』に云く「慶言印可之言也、獲得之言也」と、『和讃』に云く「一念歡喜するひとをかならず滅度にいたらしむ」と、『銘文』に云く「一念喜愛の眞實信よく發すればかならず本願の實報土にむまるとしるべし」と、『末灯鈔』に云く「眞實の信心をたまはりてよろこぶこゝろのさだまるとき攝取してすてられまいらせざる等」と、『願々鈔』に今文を釋して云く「きゝうるにつきて歡喜の一念治定す、このときにあたりて住不退轉す」と、『最要鈔』に云く「金剛の志をおこすといふはいまの願成就の信心歡喜のこゝろなり」と、『本願鈔』に云く「一念歡喜のおもひおこるにつきて往生たちどころにさだまるを正定聚のくらゐに住すともいひ」等と、『眞要鈔』に今文を釋して云く「よろこびおもふこゝろの一念おこるとき往生はさだまるなり」と、如是等の文みな初起に約す。『信文類』に云く「心多歡喜益」と、『文意』に云く「慶はうべきことをえてのちによろこぶこゝろなり、信心をえてのちによろこぶなり、喜はこゝろのうちにつねによろこぶこゝろたへずして憶念つねなるなり」と、『御消息集』に云く「慶喜とまふしさふらふは他力の信心をえて往生を一定してむずとよろこぶこゝろをまふすなり」と、『見聞集』に云く「往生のさだまるしるしには慶喜の心おこるなり、慶喜心おこるしるしには報恩謝德のおもひあり」と、『寶章』に云く「信心歡喜といふはすなはち信心さだまりぬれば淨土の往生はうたがひなくおもふてよろこぶこゝろなり」と、如是の文はみな後續に約す。今謂く、二途ありと雖も體別なるにあらず、初起の歡喜が一形相續し後續に至るに及んで喜相愈顯るゝなり。問、初起の歡喜其相如何。答、歸命の一心佛願に安住し大果を決定す、卽ち墮獄の疑懼心を離れて定生の安堵心を生ず、所聞を愛樂し往生を慶喜す、之を歡喜と名く。若し夫れ定散自力の機は己が修業をもて淨土に生ぜんことを願ふ、懈怠の凡夫自策して生業を修成せんこと甚以難し、是を以て一期慶喜心なし、是れ信の不如實なるが致す所なり。宗祖之を慨歎して、眞知專修而雜心者不獲大慶喜心、故宗師云、無念報彼佛恩等と云へり。宜矣方便の兩願には信樂の言なく第十八願獨り此言あり。第三十五願には歡喜信樂と說き、宗祖は「信樂卽是欲願愛悅之心歡喜賀慶之心」とのたまひ、以て他力廻向の眞實信心なることを示したまふ。已に自力の信と異なり、況や江東に火ありと聞て疑はざる無面無目の頑信と一般ならんや、是歡喜の言よく之を簡示

せるなり。問、今文の歡喜初後通局如何。答、今文は信受本願の一念に卽得往生する時尅を辨定す、歡喜豈別なるべけんや、故に『願々鈔』に「きゝうるにつきて歡喜の一念治定す、このときにあたりて住不退轉す」といへり。上に引く諸文みな之に准じて見るべし。其之を後續に約するものは初起の如實なることを明了にするが爲にして敢て初起を遮するにはあらず。或が三義を設く、一には眞因の體德を示さんが爲の故に、二には信者の得益を示さんが爲の故に、三には行者の失意を遮せんが爲の故に、と。

五に「乃至一念」。此句は上の信心歡喜に屬して信樂の一念とし、下の卽得往生に接して一念業成を立つ、卽ち受法得益同時にして前後あるなき橫超速疾の妙益を顯したまふなり。先づ乃至を解さば、『行文類』に云く「經言乃至釋曰下至乃下其言雖異其意惟一也」と、『略文類』に云く「經言乃至者衆」上下略中之言」と、これは文字を釋したまふなり。『行文類』に云く「復乃至者一多包容之言」と、『信文類』に云く「攝多少之言也」と、『證文』に云く「乃至はおほきをもすくなきをも(多少相對)ひさしきをもちかきをも(久近相對)さきをものちをも(前後相對)みなかねおさむることばなり」と、これは說意に約して一定せざることを示したまふなり。『銘文』に云く「名號をとなへんことをすゝめたまふに遍數のさだまりなきほどをあらはし時節をさだめざることを衆生にしらせんとおほしめして乃至のみことを十念のみなにそへてちかひたまへり」と、『證文』に云く、乃至は稱名の遍數のさだまりなきことをあらはす」と、謂く心も願力、行も願力、多少みな收め亦渾て亡するが故なり。於中、『行文類』は付屬の釋なれば稱名の行に約するなり、『信文類』及『證文』は今文の釋なれば、多少とは猶し若干と云が如く、時節の延促と心行の初後と並含むべし、久近は時節に約し、前後は心行に約す、意は多少と同じ、或可、多少は一多と同く稱名に約す、已に一念に別して但其說意を示が故なり。次に一念を解さば、『信文類』に二釋あり。文に云く「一念者斯顯信樂開發時尅之極促彰廣大難思慶心也」と、此は時尅に約す、謂く時尅を示さんと欲して先其法を擧ぐ、故に信樂と云ふ、前の閉塞に異なり故に開發と云、一發已後終に止息するなし、所云此一念臨終まで〻ほりて往生するもの、總じて經る所を擧ぐ、故に時尅と云、受法の初際にして爾前あることなし、故に極促と云、則ち一は二三等に對す、念は卽ち時の義、多時の中に初一をとる、故に一念といふなり。問、一念の量云何。答、宗藏に明判なし、なきものは蓋し其要なければなり、謂く衆生の名義を聞くや至心信樂己を忘れて無行不成の願海に歸す、何ぞ時尅の量を問ことを爲んたゞこれ煩惱心中に佛因を發起する時を名て一念と說き以て卽得往生の益を得ることを光闡したまふなり。『口傳鈔』に云く「涅槃の眞因たる信心の根芽わづかにきざすとき報土得生の定聚の位に住す」と、『眞要鈔』に云く「一念といふは信心を獲得する時節の極促をあらはすと判したまへり乃至涅槃畢竟の眞因はじめてきざすこころをさすなり」と、見るべし。「彰廣大難思慶心也」とは、上は正く一念の釋をなし、此れは其一念時中の法を示す、廣大等とは信樂の美稱、謂く廣大難思は所信の境德なり、經文には「無量壽佛威神功德不可思議」と說く、卽ち盡十方無碍光佛の功德能く雜染堪忍の群萌をして必ず滅度に至り其自證に冥せしむ、恒沙諸佛の絕へて無き所、眞に

難思の至りなり、其難思の所信の境徳全じて信樂となり、無始已來六道輪回の妄業全く滅して惶怖斯に盡き、安然として大悲海中に住して自の得生を知り、大涅槃を期す、是を慶心と云。縱令芥爾の慶心なるも其心は實に廣大にして物として比すべきなし、故に廣大難思と云。『金剛錍』に云く「初聞の信念を一念と呼顯すは何故ぞと云ふに、次に其所由を示して彰廣大難思慶心とのたまふ、此は卽ち信心歡喜なれども、此名にて稱するに二義あり、一には全領法體、二には眞因決定なり、聞信の一念如來廻施の至德を全領し報土眞因卽時に決定して大安穩を得るを廣大難思の慶心と云なり」と、此言誠に好し。一念の言自ら兩向ありて、上に向へば聞其名號の時を顯す、卽ち法體を全領する時なり、下に向へば卽得往生の時を指す、卽ち眞因決定なり。法體全領と眞因決定と受法得益同時にして異時にあらず、是を一念と云。其法を示して廣大難思慶心とのたまふなり。又云く「言一念者信心無二心故曰一念是名一心一心則清淨報土眞因也」と、此は信相に約す。時無別體依法而立なれば、今は前釋時尅に依るの法を擧るなり。謂く、信心とは念の字の意、無二とは一の字の意、二心とは疑を謂ふ、心が兩端に跨り猶豫して定らざるが故なり。或云く二は貳と同じ、『爾雅』釋詁に云く「貳は疑也」と。疑蓋無雜卽ち無二心なり、然れば一念と云が卽ち一心信樂の異名なり、唯他力廻施を領するなれば卽ち佛智にして、必ず報土の眞因となるなり。『寶章』に云ふ「なにのやふもなく彌陀をよく信ずるこゝろだにも一つにさだまればやすく淨土へはまいるべきなり」とは此釋意を述せるなり。『金剛錍』に云く「法義のすぢでは往生治定の時尅をさだむるために時尅の極促に約して一念と云ひ、機邊の功をからざる速疾の妙益を顯すといへども、其時尅を機邊に於てこれほどと執へ何時と記せよといふにはあらず、機受の安心はたゞ所聞の法義のまゝに信む一念往生治定と彌陀をよく信ずるこゝろだにも一つに定れば此卽ち一念なり、何ぞ別に煩き計らひをなすべきや、故に初は文に順じて時尅極促の釋をなし、其法義を詳にし、後は義に約して專一の義をもて一多の一を奪ひ、信心二心なきを一念とすと釋成して機受を詳かにしたまふ、大悲深切なるものと謂ふべし」と、佳矣。

問、宗祖一念の二釋並に信心に約す、然るに吉水之を稱名に約するもの如何。答、『一渧錄』に云く「斯は法義の施設に由る、其意致卽ち別なし、謂く眞宗の法義相對廢立あり、吉水之に依る、的說立宗あり、宗祖之に由る」云々、學者考へよ。問、今文と付屬と同く一念と說く、信行通局如何ぞや。答、據實通論すれば各信行に通ず、據勝別論すれば彼れは是れ行にして此は卽ち信なり、善通院云く「此は往生の眞因を說き機受安心を示が故に聞信卽生と說く、其意信を主となす、彼は釋尊が當來の導師に對して此妙法を付屬するが故に其所顯は正く法義に在り、故に行を主となす、一念大利無上功德と說き以て法體の利益を顯す、若大信に非んば領受の相狀を顯すに由なし、若大行に非んば法德の最勝を顯すに由なし」云々（對問記に委曲せり）、佳矣。問、今の乃至は何物なりや。答、乃至の法は其出る所をもて知るべし、佛智乃至勝智といへば乃至は不思議智等の三智なることを知る、一日乃至七日と云へば乃至する所は二日より六日までなることを知る、此一念を行とすれば乃至する所は稱名なり、一念を時とすれば乃至する所は時尅なり。一念に兩釋あるも信相に約するものは二三に對する

一にあらざれば乃至一念の字釋にあらず、止時尅に依るの法を示すのみ、其時尅に約するものを今文の當釋とす、卽ち一念が時尅の促なれば乃至する所は時尅の延なり。然るに其時尅に依るの法、初起の一念は信なり、後續の多念は行なり、謂、初起の一心命のぶるに隨ひ緣に觸れて三業に發動す、盡形の起行其體一心なり、『口傳鈔』に今文と付屬の文と及付屬の釋とを引て後に云く「一念をもては往生治定の時尅とさだめていのちのぶれば自然と多念におよぶ道理をあかせり、されば平生のとき一念往生治定のうへの佛恩報謝の多念の稱名とならふところ文證道理顯然なり」と、是は證文の意を禀るもの、『御一代聞書』に云く「一念の信をえてのちの相續といふはさらに別のことにあらず、はじめ發起する所の安心を相續せられてたふとくなる一念のこゝろのとほるを憶念の心つねにとも佛恩報謝ともいふなり」と、この一念のこゝろとほるとは、初起の一念が自然に三業に流動し相續するを謂ふ、故に結して佛恩報謝ともいふなりとのたまふなり。或が云、相承に一多を論ずるに二途あり、一に信行相望、これは前に述るが如し、二に自類相望、行信に各一多を論ず、云々、可考。

「至心廻向」。相承に約本約末の二釋あり。先、約本の釋意を解さば、『信文類』本末に今文を引て至心に廻向したまへりと點聲し、唐譯成就の文を引て所有善根廻向したまへるを愛樂して等と點聲せり、『信文類』に別釋なし。或が云、信心を釋して本願力廻向之信心と云へり、此釋兼て至心廻向を顯す、至心廻向は卽本願力の廻向なるが故に、と。『證文』に云く「至心廻向といふは至心は眞實といふことばなり、眞實は阿彌陀如來の御こゝろなり、廻向は本願の名號をもて十方の衆生にあたへたまふみのりなり」と、『願々鈔』に云く「至心廻向の四字は成上起下とならふなり、成上といふはかみの信心歡喜を引起すること法藏因中の至心より生ず、起下といふはしもの住不退轉の前途を達することまた至心に廻向したまへる如來大悲の無緣の慈悲より成ぜらるゝものなり」と。今謂く、ならふなりとは、蓋是三代傳持の口授ならん。『經』に言く「其佛本願力聞名欲往生皆悉到彼國自致不退轉」と、聞名欲生と到彼國住不退とみなこれ本願力の所使なり。今則因果の中間に此句を說て信喜と得益と併せて大悲廻向なることを顯す、故に成上起下といふなり。『和讃』に此意を述べて「若不生者のちかひゆへ」等とのたまふ。『讃阿彌陀偈』の「至心者廻向」の句に換ふるに「若不生者」と云、然れば若不生者は至心廻向なり、「信樂まことにときいたり一念慶喜するひと」とは卽ち成上の義、「往生かならずさだまる」とは其起下の義。

抑約本三心の義相は。如來因中所修の大行一として淸淨眞心ならざるなく以て圓融無碍の至德を成就す、之を至心と云。至心は不二中の實智、欲生は大悲、悲智相成し二利圓滿して、此法能く此機を攝し此機必ず此法に憑ること願心の本際より未來際を盡して畢竟差はず、故に一毫の疑心あることなし、所謂「不虛作住持功德」之を信樂となす。衆生をして我國に生しめんと欲ふ大悲心あり、故に廻向を行ず、回向を行ずるをもての故に大悲心を成就す、所謂「令諸衆生功德成就」なり、其相は全體施名にして卽ち本願招喚の勅命也、之を欲生となす。換言すれば欲生の大悲より至心の大智大行を成じ、信樂不虛作の妙體を成じて還た之を名號となし、衆生に廻向して欲生大悲の本意を遂げ

たまふ。之を六字釋に配すれば、欲生の大悲大願は歸命なり、發願廻向なり、至心の大智大行は卽是其行なり、如是自證の願行を全じて利他の願行とし、二利圓滿畢竟不差にして以斯義故必得往生といへる金剛心成就が佛の信樂なり、この信樂は必ず招喚の勅命となりて機に向ふ、故に機の之を受る亦必ず聞信なり。今文に述べたまふ所は、至心の卽是其行が欲生の勅命となりて廻向せらるゝゆへ、必ずや衆生心中に聞へて信喜となる、この信喜は全く名義の印現せるものなるをもて、本願の名號をもて十方衆生に與へたまふみのりなりと釋し給ひたるものなり。是れ成上の義なり。其信喜は全く名義の印現せる者にして卽ち是れ報土正定の因なれば、起下の義亦成ずるなり。

次に約末の釋意を解さば、『三經往生文類』に唐譯本願の文を引て「心々廻向して」と點聲し、其成就の文を引て「所有善根廻向して」と點聲せり、『銘文』に云く「亦是發願廻向之義といふは二尊のめしにしたがふて安樂淨土にむまれんとねがふこゝろなりとのたまへるなり」と、『執持鈔』に云く「そもそも南無は歸命、々々のこゝろは往生のためなればまたこれ發願なり、このこゝろあまねく萬行萬善をして淨土の業因となせばまた廻向の義あり」と。みなこれ廻向を機邊に約す、機邊に約すといへども、衆生自ら事理の大願を發し所修の萬行を廻向するにあらず、唯是聞信中に有する所の德義なり、その心相はたゞ往生治定の外なし。故に『銘文』には「二尊のめしにしたがふ」と云ひ、『執持鈔』には「歸命のこゝろ卽發願なり廻向なり」と顯せり、『散善義』に至誠心を釋して「須眞實心中作」と云ひ、廻向發願心を釋して「須決定眞實心中廻向願」と云ふ、須の字用ると讀む、受用することにして卽ち深信することなり。深信する處に至誠廻願の二心自ら具するなり。『御一代聞書』に云く「歸命のこゝろやがて發願廻向のこゝろを感ずるなり」と。『山科連署記』には感を含に作る、蓋し歸命心中に回願を包含するの義なるべし。『信文類』『三經往生文類』に唐譯本願の文を引て「心々廻向せしむ」と助聲したまふもの蓋し亦同意なり。抑約末三心の義相自ら二門あるべし。一には具德に就て名を立つ、謂く信樂一心廣大無碍にして果佛の三心を全領せる故に初發心より最後心までの一切願行此中に圓具せずといふことなし、故に能具の一心を呼で三心と稱す。是は信が威德を顯すなり、此義に依れば本願に三心と說くは、信樂中に至欲の德義を具す、故に報土の眞因を成ずることを示さんが爲なり。今文亦然り、先づ機受の心相を示して聞名信喜と說き、次に信中所具の德義を開て至心廻願と說き、此信能く報土の眞因を成ずる所以を示して後の得益に接し、以て一念中に此德義あり、故に必ず往生することを得ると顯し給ふなり。今文を願文に配すれば、聞名信喜は是れ信樂なり、至心は文の如し、廻願は卽ち欲生なり、『信文類』に今文を分引し給ふ（至心は文便に隨ひ欲生に屬す）ものは見るべし。然るに今文の說相は三心正因の願意を述成するものにして、各別に之を述成せんとにはあらず、但信中の德義を示す所に自ら其義別を見るのみ。二には當體の異名に就く、此義は下に至りて之を述べん。二釋ある中前後の大體は約本の意に依りて解釋をなす、故に成上起下とし、受法得益みな他力なりと顯すこゝろなり。

「願生彼國卽得往生住不退轉。」此三句は得益を說くなり。中に於て願生彼國の句は得益を明ん

と欲して先づ上の信喜を提出せるものにして、卽得等の二句正く其得益を明したまふなり。

先づ「願生彼國」を解さん。本願は招喚に約して、欲生我國と說き、以て若不生者に對し、今文は發遣に約して、願生彼國と述べ、以て卽得往生に應ず、卽ち、此土入聖の聖道門に對して、捨此往彼の淨土門を標し、以て橫超の別意を顯したまふなり。『銘文』に云く「欲生我國といふは他力の至心信樂をもて安樂淨土に生れんとおもへとなり」と、『證文』に云く「願生彼國といふは願生はよろづの衆生本願の報土へむまれんとねがへとなり、彼國はかのくにといふ安樂國をおしへたまへるなり」と。謂く、名義に對しては聞信と說き、淨土に對しては願生と言ふ、名をかへて重ねて上の信因を牒し、之を往生に接して以て此因卽ち彼果を得ることを示す。故に『信文類』に「獲得金剛眞心者橫超五趣八難道」必獲現生十種益」等と云ひ、諸處に卽得往生を聞信一念の益と判じたまへるなり。信を願といふは願は是れ信中の義具なればなり。信樂を訓釋して「欲願愛悅之心」と云、欲生を訓釋して「願樂覺知之心」と云ふ、正に斯謂にして、前に三心は當體の異名に就くと云へるは卽是れなり。『金剛錍』に云く「信心全く是れ其名號なり、故に至心の名を施す(此は直に所聞の法體に從へて名く)所聞の法に於て深忍疑なき故に信樂の名を立つ(此は所聞の名號に望めて名く)當果決定せるを歡喜愛樂する信心なる故に欲生の名を與ふ(此は所得の往生に望めて名く)唯一の信心が義に隨て名を異にす、卽ち體と相と義用との三名なり」と。然れば願に別相なし、唯信の義具のみ。故に『散善義』には「作得生想此心深信由若金剛」と釋し、『御鈔』には淸淨願往生心を釋して「如來回向之信樂なり」と云ひ、『銘文』には「至心信樂をもて安樂淨土にむまれんとおもへ」と云ひ、『願々鈔』には「欲往生の深信」といへり、見るべし。問、願は希求の義ならん、如何ぞ信中に此義あるべき。答、凡そ願に決定と不定の二あり。謂く世人の壽福を佛神に祈願するが如きは、是不定願なり、未だ可得と不可得とを知らずして漫りに希望するが故なり。八地已上の菩薩の願心任運に妙覺に進むが如き、是決定願なり、未得の境に於て已に可得を決して欲求するが故に、是たゞ因に在て果を期するを名て願と爲すなり。今の願は此第二に准じて、卽ち決定無疑心中に當果を愛樂要期する義あり、名て願生と云なり。然るに『信文類』に此句を釋せざるものは云何と云に、或が云、一念を釋して「一心則淸淨報土眞因」と云へり、此釋兼て願生彼國を顯す、彼國は卽ち淸淨報土にして、願生卽ち一心、是れ報土の眞因なるが故に、と。

次に「卽得往生住不退轉」を解さん。『願』に「若不生者」と誓ひ、今「卽得往生」と述ぶ、これ現當に通ず、當來は難思議往生卽ち「捨此穢身卽證法性」なり、現生は聞信業成、卽ち迷心命終住正定聚なり。宗祖は一因一果の法義に依り凡夫入報の眞宗を開く、故に往生不退共に現生に約せり。『易行品』に云く「人能念是佛無量力功德卽時入必定」と、『智論』に二種卽を說く中これ其同時にして異時ならず。『行文類』に云く『經言卽得釋云必定卽言由聞願力光闡報土眞因決定時尅之極促也』と、經釋を合して現益を示す。『論註』に眷屬功德を釋して「遠通夫四海之內皆爲兄弟也」と云ひ、『玄義分』に聖衆莊嚴を釋して「現在彼衆及十方法界同生者是」と云ひ、『御鈔』に「信受本願前念命終卽入正定聚之數卽得往生後念卽生卽時入必定又名必定菩薩也」と云ひ、『證文』に「卽得往生といふは、卽はすなはちといふ、ときをへず日をへだてぬなり、ま

た卽はつくといふ、そのくらゐにさだまりつくといふことばなり、得はうべきことをゑたりといふ、眞實信心をうればすなはち無碍光佛の御こゝろのうちに攝取してすてたまはざるなり、乃至、正定聚のくらゐにつきさだまるを往生をうとはのたまへるなり」と云ふ。『文意』に亦此句を釋して云々、『口傳鈔』に體失(諸行往生)不體失(念佛往生)の往生を辨じ、『最要鈔』に身心命終を分別し給ふ等、みな現生に約して聞信一念必定往生の義を示し、以て平生業成の妙益を明し給ふなり。　問、現生に約して解さば得往生とは云何なることぞや。　答、『御鈔』『口傳鈔』『最要鈔』の意に依れば自力迷心のつきて正定聚の數に入るを云なり、『證文』『文意』の釋及び『末燈鈔』に「信心さだまるとき往生またさだまるなり」と云ひ、『眞要鈔』に「卽得往生といふは時をへだてず日をへだてず念をへだてざる義なり、されば一念歸命の解了たつとき往生やがてさだまるなり、得るといふはさだまるこゝろなり」と云ふに依れば、往生は當生にして現生に治定するを得といふこゝろなり、二義ともに存すべし。

「住不退轉」とは無上菩提を退轉せざるをいふ。　上の句は轉域に約し、此句は住位に約す。　第四十七願に言く「聞我名字不卽得至不退轉者不取正覺」と、『大經』流通分に言く「若有衆生聞此經者於無上道終不退轉」と、『小經』に言く「欲生阿彌陀佛國者是諸人等皆得不退轉」と、此等みな現生に約す。　通途に位行念處の四不退を辨ず。　別途の所談は心不退の義なり。　謹で案ずるに、宗祖の所明や、聞信一念をもて清淨報土の眞因とし、此因所得の淨土の證果を大涅槃とす、故に『信文類』に云く「大願清淨報土不」云品位階次一念須臾頃速疾超證無上正眞道故曰橫超也」と、是に於てや卽得往生住不退轉を以て斷じて現生の益と定め給ふなり。　此中不思議事無量なれば種々異說せり、必定、歡喜地、正定聚、無生忍、成等覺、便同彌勒等是なり、此の彼々の名に寄せて妙益を顯示す、是れ別途橫超の法門、本願圓頓一乘極速の妙益なり。『信文類』に此二句の牒釋なし、蓋し聞信一念をもて報土の眞因と決し、次に之を承て「獲得金剛眞心者」等と云て現生十益を明すもの此句意を開き給ふなり。　若夫れ正定不退をもて當來に約するものは是れ廣門相の所談にして所顯今と異なり、然れどもよく廣略不二の妙趣を解せば一因一果の所談と何の別あることなし。　上來正く攝化の正意を述し畢る。

「唯除五逆誹謗正法」。　此二句は特に諸有衆生の分齊を述るものにして亦自ら抑止の意を含むなり。　相承に此文を釋述する三あり、曰く玄忠と終南と宗祖となり。　初に玄忠に依れば、『論註』上卷の終り八番問答ある中第二三四五の四番正くこの義を辨ず。　於中、第一は單複に就て以て生否を解す、單複は卽ち謗法の具缺に由る、是れ前に「下品凡夫但令不誹謗正法信佛因緣皆得往生」と云へる易行の實義を顯示し給ふなり。　謂く不信の故に誹謗す、故に誹謗の往生せざるは不信の往生せざるなり。『口傳鈔』に云く「謗法罪はまた佛法を信ずるこゝろのなきよりおこるものなればもとよりそのうつはものにあらず」と、見るべし。　第二は謗法不生の所由を示す、所由二あり、一には罪極重なるをもての故に、此は罪體に就く、乃ち抑止の意に據る(五逆を抑止するの意は前に下々品の文を引く下に註釋して之を示す)二には願生心なきをもての故に、此を正意となす、口業功德の釋の如きの故に、乃ち攝取の意に據る。　第三は謗法罪の相を示す　第四は逆は謗より生ずることを示す。　然

れば單造五逆のものなかるべし、謂く、義寂『大經疏』云「造五逆者有其二種一造逆事而不壞信不謗正法二造逆事亦壞於信誹謗正法後者加行意樂俱壞前者行壞意樂不壞二俱壞者業不可轉意不壞者業猶可轉觀經就信不壞者說」と、『觀經』は單造の人に就く、第一問答すなはち此義を示す、『大經』は具造の人に就く、第四問答乃ち此義を示す。　從上四番の要旨は、逆謗の人は佛法を信ずる心なきものなり。即ち佛故らに之を除くにあらず、彼れ自ら大悲に逆ひて自除を招くなり、故に唯除逆謗とは、罪體の重きが爲に之を除くにはあらず、唯不信の人を簡び還て信ずる者悉皆往生すると云ふ釋意なり。二に終南に依れば、『散善義』下々品の釋に云く「問曰四十八願中乃至就抑止門解已」と。抑止をもて標結し、釋中に攝抑を云もの已に抑止と云、實除にあらざることを表す、即ち抑止の處、攝取自ら含むことを知る、則ち已造の故に大悲之を攝す、未造の者は抑止して之を除く。本願は彌陀が未造者を抑止す、觀經は釋迦が其願意を宣述す、序分の現事は但是法義を實現せん爲の化事のみ、能く攝取すと雖も抑止を大體とす、華内の三障を說く所以なり。　古來此疏文を解するに要弘通局の論あり。今は弘願意に依る。　問、抑止の所爲云何。　答。僧叡師云澆季の下流を防護すと、善通院云入信の階梯を成じ亦信後の行儀を護ると、勞謙院四義あり、一には深悔を生ぜしめん爲の故に、二には聞法の機を成ぜん爲の故に、三には已信の機を保ん爲の故に、四には一乘の法を護ん爲の故に、云々、今謂く、疏釋に未造を抑止し已造は攝取すといふは未信に對する言なり、華内の三障を說くは已信に就くの意なり、從上攝抑の要旨は、抑止するは未造者をして此二過を犯さゞらしめんが爲めなり、攝取するは已造の後廻心願生する故なり、則ち未造者は犯さず、已造者は速に廻心願生すべしといふ釋意なり。三に宗祖に依れば『銘文』に云く「唯除五逆誹謗正法といふは、唯除はたゞのぞくといふことばなり、五逆のつみびとをきらひ謗法のおもきとがをしらせんとなり、このふたつのつみのおもきことをしめして十方一切の衆生みなもれず往生すべしとしらせんとなり」と、つみびとをきらふとは佛意に約す、不信のものは攝化する能はざればなり、おもきとがをしらすとは衆生に約す、重罪を知りて廻心せしめんとなり、五逆と云ひ謗法といふは是れ互顯のみ、一切衆生みな往生すとは、唯除等と說くは萬機普益を示すとなり、謂く逆謗は佛法を信ぜざるもの、不信のものを除く言下に、信ずるもの皆な往生するを得ると知らしむるなり。　或可、衆生此佛說に依り自ら重過を知るときは、未造者は犯さず、已造者は廻心願生す、即ち佛能く之を攝取することを得る、重罪已に攝す、何ぞ脫漏の機あらん、是れ一切衆生皆得往生の願意を顯はすなり。　要之、逆謗を除くと說くは罪體の極重なるが故にあらず、自ら大悲に逆ひ佛法を信ぜざるが爲なり、信ぜざるものを除く處、信ずるものみな往生するを得ると知らしむると云の釋意なり。　上來三處の釋述、玄忠は所被の機相に就き信不信以て除取を辨じ、終南は攝化の方便に就き未造已造以て攝抑を分つ、釋相別なりと雖廻心皆往の義旨即ち同じ、宗祖は玄忠の意を承け萬機普益の佛意を開顯す、所被の分齊此に於て顯然たり。　然るに『信文類』に別に文句を釋せず。『涅槃經』に據て佛願正所被の機を明し、以て大信の德用を示し、後に『論註』『散善義』『法事讃』並に淄州の釋を連引して釋疑料簡し給ふもの、亦所被の機の分齊を示す、而して今と稍

や其趣を異にす、學者子細に之を究めよ。問願文の唯除等は彌陀說なりや釋迦說なりや。答當具說之の願文なれば彌陀の自說なり、釋迦之を承て復唯除等と述成す、末佛の攝化みな願海より出づ、豈願海は未盡にして末佛之を補ふの理あらんや。問『口傳鈔』に云く「抑止は釋尊の方便なり、眞宗の落居は彌陀の本願にきはまる」とは如何。答攝抑を以て二尊を分つは法義の分齊、其所職自ら異なればなり、利他を全じて自證とし、自證を全じて利他する隨自意法を攝取と云なれば、攝取をもて招喚の彌陀の所職とすべし。抑止に眞假あり、五善五惡の勸誡は是れ眞なり、要眞二門若くは八萬の道敎は其假なり。或云、『口傳鈔』に抑止をもて釋迦に屬するは卽ち假の抑止なりと、今謂く、假の抑止は勿論、眞實の抑止も亦發遣の釋迦に屬すべきなり、同く願海より出づと雖も止惡作善以て濁世の機を護して攝取の法を飾るは、此土敎主の任なればなり。問抑止する所唯逆謗二罪のみなりや。答濁世の凡夫沿々みなこれ十惡の人なり、之をしも猶除くとせば、佛願の所被は賢聖に限るこゝなる、攝化の正意何によりてか之を示さん、故に逆謗を除く外以て所被と定めたり、然れども能く此逆謗抑止の佛意を體せば微少の止作豈捨てゝ顧みざるべき、釋尊已に斯意を擴充して五善五惡の勸誡をなし、宗祖の御消息に苦ろに止作をすゝめ、歷代宗主勉て俗諦法度を敎へ給ふ、みなこの意なり。

惠覺、才疏學薄、述る所ろ未だ意を盡さゞるもの多し、慚愧何ぞ堪ん、覽者是正を吝まずば幸甚。

（明治三十七年七月）

# 二六字釋講錄

今此觀經中十聲稱佛卽有十願十行具足云何具足言南無者卽是歸命亦是發願廻向之義言阿彌陀佛者卽是其行以斯義故必得往生

此文は出て『觀經玄義分』大門第六和會經論相違中の第五會通別時意章に在り、以て外は通攝論家の謬解を破し、內は弘願眞宗の要義を顯したまへり。

別時意とは、別時は卽時に對す、如來が小因を以て大果を得と說き、以て一類懈怠の者を誘引したまふ、是れ其得果は、語は則ち近きに似て、而して意は遠く別時に在り、故に別時といふ、卽ち是れ如來の密意方便にして、不了義敎なり。

無着菩薩が『攝大乘論』を造り、『阿毘達摩經』の攝大乘品を釋せられ、世親無性の二菩薩、各無着菩薩の論を釋したまひて、本末總じて四譯あり。圖示せん

本論　三本三譯

- 後魏　佛陀扇多　譯　二卷
- 陳　眞諦　譯　三卷
- 唐　玄奘　譯　三卷

釋論　四本三譯

- 無性釋　唐　玄奘　譯　十卷
- 世親釋
  - 陳　眞諦　譯　十五卷
  - 隋　達摩笈多　譯　十卷
  - 唐　玄奘　譯　十卷

右論釋中に、佛の說法に四あることを明す、陳譯には四意と云ひ、魏唐には四意趣と云ふ、終南大師は、陳譯に據りたまふ。則ち本論中ハ釋論七十三に出たり。其四意とは、一に平等意、二に別時意、三に別義意、四に衆生樂欲意なり。別時意の論文に、二節ありて、成佛と往生とを別辯せり。中に於て、成佛別時意は、今宗に關せず。其往生別時意は、彼『論』に「如由唯發願於安樂佛土得往彼受生」と說くを、通論家の徒、誤て觀經の十念念佛を以て彼に擬せしめ、只是れ遠生の結緣にして、順次生に淨土に往生するに非ず、卽ち別時意の說なりとなす。『群疑論』二に云く「自攝論至此百有餘年諸德咸見此論文不修西方淨業」と、蓋し淨土の法門、幾んど閉塞せんとす。乃ち大師の斯釋あり、往生の大道、豁然として復開け、二尊の正意大に通暢することを得せしめたり。爾れば、此釋は他の謬解を破するに起る。然りと雖、自ら別意あり、『玄義分』和會門中、機法因果を示す中、此は其因を明し以て弘願眞宗他力廻向の奧義を顯すものなり。

故に源空聖人は、『選擇集』に引て不廻向の義を證し、宗祖聖人は、『文類』『銘文』に引用して、約佛約



生の釋を施したまひ、覺如宗主は、『執持鈔』に祖述し、蓮如上人は、屢『勸章』に布演して願行具足機法一體の深旨を釋成せらる、嗚呼、法門の根底、他力の深義、釋して斯文に在り。鑽仰せざるべけんや。

**○玄義分の釋意**

成佛の法は、萬行圓備して、方に乃ち尅成すべし、而に念佛一行にして、卽證菩提と說く、之を成佛別時意となす、此は萬行一行相對なり。往生の法は、願行具足すれば、必得往生なり、而に唯願無行にして、得生淨土と說く、之を往生別時意となす、此は願行具缺の差別なり。通論家の謬解、其要二あり、一には聖淨二門の別あることを知らず、往生成佛を混同せるなり、二には觀經所說の法義を知らず、唯願不生を以て輙く相混同せるなり。一行卽證は、成佛の別時意にして、唯願得生が、往生の別時意なるに、觀經の稱名往生を以て輙く彼に相混して、以て別時意となすこと、謬解亦甚し。是に於て二の別時意を分別し、其往生別時意を釋するに、初に他の謬解を破し、後に正意を辨立す、辨意の中に、亦初に經論を判釋し、後に難易を對辨して必生を決判す、經論を判釋する中に、先づ論意を判じ後に經宗を明す、今は其經宗を明すの下の文なり。

乃ち觀經の十聲稱名には、十願十行ありて具足する、故に必得往生なりと示す。然に、標には稱名に願行を具足すると云て、釋には名號に願行を具足することを明す、此は衆生の稱名は、如來の所成を領受するが故に願行具足の德あり、能く淨土に往生するなりと示す、換言すれば、衆生が口業に稱して方に願行具足するに非ず、法體名號固り願行を具足す、故に衆生は之を聞信する一念の處に、如

來所成の願行を全領し圓滿す、而して信體を全ふじて口業に發動するの稱名なれば、聲々に願行具足す、『擇集』に所云「一念一無上功德十念十無上功德」にして、卽ち口稱が法體を動ぜず、聲々願力なるがゆゑなり、其願行に十の字を添ふるものは、聲の十に隨ふが故にして、願行その物に、一十の別あるには非ざるなり。

西鎭諸家の釋義は、今評するに違なし。今家の意は、歸命と廻願と行との三義は皆是れ名號所具の義にして且く南無の二字に二義を出し、阿彌陀佛の四字に一義を舉ぐ、其實は六字に三義を具するなり。然に別時意を會通する邊に於ては、但願行具足を辨ずれば則ち足る、而に歸命を言ふものは、發願廻向は南無の的釋に非る故なり、故に先づ的釋たる歸命を出して、その歸命よりして發願の義を開出せるなり。則ち卽是は的釋なることを示し、亦是之義は義釋なることを示す。或云く、南無歸命は、梵漢相對なり、故に卽是といふと、或云く、發願廻向は義翻なり、故に亦是といふと、今謂く、梵漢相對の意ならば、四字は何故に然らざるや、又四字は相對ならざるに、何故に卽是といふや、又回願を以て南無の翻名となすこと、古來未見なり、故に此等の說並に非なり。其行の其の字は、上の歸命の機を指す、歸命の爲の行といふ意なり、又上の廻向を指す、衆生に回施する物體は阿彌陀佛是なりといふ意なり。

爾らば、『玄義分』當面の示す所は、發願は往生を願求するの心なり、廻向は挾善趣求の心なり、之を能廻向の心とし、行は萬善萬行にして、是れ其所廻向の體なり、並に是名號所具の德にして、十聲の稱名は、斯の名德を具す、故に必得往生なりといふ意なり。然に宗祖の引文は、言南無者よりして、其標文を略せり、蓋し歸命に願行を具足す、故に信ずるもの必ず往生を得ると示したまふなり、此は『散善義』に、初に三心を標科して「辨定三心以爲正因」と云ひ、後に結成して「三心既具無行不成願行既成若不生者無有是處也」といふに基くものなり、開顯の妙釋、須く仰信すべし。

抑、『行文類』は、歸命と發願廻向と卽是其行と必得往生とを牒釋し、『銘文』は、歸命と發願と卽是其行と以斯義故必得往生とを牒釋し廻向のみは牒ありて釋なし、『執持鈔』は、發願と廻向と卽是其行とを釋し、『勸章』は、歸命と發願廻向と卽是其行とを釋せらる。而して約佛約生の二途ありて、『行文類』は、三義共に佛に約し、以て他力回施の妙行なることを示し、必得往生に就て、其機受得益を辨す、『銘文』は歸命發願廻向は衆生に約し、其行を佛に約す、『執持鈔』は、歸命發願を衆生に約することを全く銘文に同じ、廻向は具德に約して、仍歸命に屬し、唯卽是其行のみ佛に約す、『勸章』は、歸命を衆生に約することは、諸文皆同じ、願を衆生に約することは、唯第二帖の第十五章の一文のみ、その餘は回願其行皆佛に約せり。要之、歸命を佛に約するは唯『行文類』のみ、發願を行者に約するは、『銘文』『執持鈔』及び『勸章』第二帖第十五章なり、廻向を衆生に約するものは、文としては唯『執持鈔』のみ、然れども仍是れ歸命の具德にして、心相釋には非ず、卽是其行は、諸文通じて約佛釋なり。

然して、諸文の意を案ずるに、自ら二の法相あり、謂く願行門と機法門となり、中に於て、願行門は法の具德を顯し、機法門は機の領受を詳にす。外通論家に對するときは、歸命を回願に屬し、願行具足

を以て稱名の必生を示し、內機受を詳にするときは、回願を歸命に屬して、以て機法の分齊を詳にす。『玄義』は外難を防ぐを主となす、故に標して十聲稱佛に十願十行あることを言ふ、釋には歸命を主として願行を具足することを言ふ、內宗義を辨ずるが故なり、破顯俱時に成立することは、蓋し斯謂ならん。

外難既に潰ゆ、復强ひて之を言ふの要なし、要は宗意を恢弘するに在り、故に以て願力廻向の深旨を開顯し、以て機受領解の心相を詳にす、斯を『行文類』已下の釋功とするなり。

**○行文類の釋意**

爾者南無之言歸命歸言至也又歸說也說字悅音又歸說也說字稅音悅稅二音告也述也宣遇人意也命言梁也招引也使也敎也是以歸命者本願招喚之勅命也言發願廻向者如來已發願回施衆生行之心也言卽是其行者卽選擇本願是也言必得往生者彰獲至不退位也經言卽得釋言必定卽言由聞願力光闡報土眞因決定時尅之極促也必言審也然也分極也金剛心成就之貞也

行文類中、終南の釋に就て十文を引用す、中に於て、前半は、『諸經禮懺儀』に據て『禮讚』を出す、此中第一の禮讚前序の文を正意とし、後四は之を助顯するなり、後半は『玄義分』『觀念法門』『般舟讚』の諸文を拾ひ出す、此中前二の『玄義分』の二文を正意とし、後三文は之を助顯するなり。終南の撰、五部九卷の中、本願義を明すことの詳なるもの『禮讚』前序に過るなし、故に先づ出し、後に之を經疏の弘願釋に合し、次に六字釋を引て弘願の體を示す。所引の釋文、之を要するに、願力得生を示すに在り、今は其を承け來て、六字は是れ弘願力なりと釋するなり。「爾者」の言當に如是觀るべし。而して、此釋は二河譬に原く、彼は衆生が本願力に乘じて安樂國に往生するの相にして、彼勅命はこれ彌陀の願意、願意は是れ名號の義なるが故なり。

「南無之言」等。『對問記』に云く、此中二段あり、初に六字の三義を釋して他力廻施の妙行を顯し、後に必得往生を釋して衆生の機受得益を明す、初の中、歸命は是れ廻向の相、願廻は是れ能廻の心、卽是其行は是れ所廻の行、能廻所廻、廻相皆是れ名號、亦是れ願力、今は願力を以て名義を解釋して、他力不思議の妙行を彰す、衆生は唯此の大行を聞信する處に、願力圓具し、往因成辨す、故に「由聞願力」等といふ、と。　好矣。

「歸言至也」等。　先擧訓、後に「是以」より下は釋成なり。　訓を擧る中。　或人は「歸言至也又歸說也又歸說也」の十二字は、宜く本行となし、其餘は皆子註となし、又命字の訓は、皆宜く本行となすべし、爾らざる者は、恐くは後人傳寫の誤ならんか、と云へり。　今謂く、『御眞本』の寫を拜見するに、亦今文の如し、又「歸說也」の左訓に「よりたのむなり」（歸說也の左訓は今本に同じ）とあり、又「さい」の音を「せい」とせり。「至也」、『述文贊』に、『經』の「會當歸之」を釋して云く、「會當者必也歸之者至也」と、『穀梁傳』隱公二年に云く、「婦人謂嫁云歸反曰來歸」と、註に云く、「反曰來歸言自外至也」と、『漢書』孝文帝紀曰く、「至邸」と、師古云く、「郡國朝宿之舍京師者率名邸邸至也言所歸至也」と、『史記』項羽本紀に曰く、「抵櫟陽」と、註に云く、「抵歸也」と、韋昭云く、「抵至也」と、劉伯莊云く、「抵相憑託也」と、此等に依て思ふに、至とは來至を

謂ふ、譬喩の文に「一心正念直來」といふの意義にして、卽ちいたりつき憑託することなり。「歸說也說字悅音」、『漢書』孝帝紀に曰く「群臣說服」と、『詩經』に曰く「卒土歸說」と、說は『集韻』『韻會』に「欲雪切與悅同」と、『類篇』に「喜也樂也服也」とある、歸投し悅服することで、所云「不畏墮水火之難」の意義なり。「歸說也說字稅音」、『詩經』に曰く「於我歸說」と、箋云く「音稅說猶舍息也」と、此詩は蜉蝣崛閟と相對して、悅の音により說の字を用ひたれども、義は稅音のやどるに取りしなり、前二章に「於我歸處」「於我歸息」といふに映ずるに、『詩』召南に「召伯所說」と云ひ、『左傳』宣公十二年に「日中而說」と云ふと同意なり、願力に依託し、舍息するの意にして、歸悅と意同じ。　穩叡二公が、遊說の義、人を諭して己に從はしむるの意にして、次の命に接したるものとするは、よりかゝるの左訓に違ふ。　遠公が、稱名相續の意を顯すと解するは、祖意を誤ること甚し、此の「宣述人意」も亦衆生の稱名となす、亦非なり、是れ機受を指示する勅命なることを了知せざるより起る錯解なり。　御家柔遠と稱して、僧鎔師門下の宗乘達人と崇拜せらるゝ斯人にして、尙斯謬解あり、奎運未だ啓けざるものか、將研究の未だ足らざりしものか、同門下に他部道穩の稱ある穩公が、歸すべしの命なりと看破せる講解一び出て、空華の末徒亦此一段の祖意に通ずることを得たるは、奇現象ならずや。　末學須く細心に窺ふべし。「告也述也」、告は『廣韻』に出で、述は『釋名』に出づ。　二訓は本刷の音に屬す、今は說字の本音に歸し取て、次の命に接したるものなり。「人意」、人とは彌陀にして、意は所云「我能護汝」なり、『御鈔』に「護言顯阿彌陀如來果上之正意也亦形攝取不捨之良也」とある、卽ち如來の御意を宣述したまふなり、意は法なり、法に對して如來を人といふなり。「命言業也」等。子註は當に本文の如くし伺ふべし。　八訓の中、初二訓は憬興の『述文贊』に據り、後六訓は俗典に出づ、卽ち使は『玉篇』に、敎等の五は『廣韻』に出づるなり。訓の所顯は、大願業力を以て衆生を招引するが故に、衆生をして信行せ使るが故に、口業を以て敎令するが故に、自然の大道の故に、信ありて違逆せず虛僞ならざるが故に、如來の御計ひの故に、衆生を召すが故なり。　上に論註の歸命釋を引く下に、亦六訓を出すもの、今の後六訓なり。「是以」とは、承上の辭、「本願招喚之勅命也」とは、上に擧ぐる所は、如來が衆生に歸せよと命じたまふ、これ如來の願意なりと示したまふなり。　然に、招喚に「一心正念直來」と云ひ、「不畏墮水火之難」と云ふは、是れ南無の義にして、「我能護汝」は、是れ阿彌陀佛の義なり、而して今之を總じて歸命とすれば、卽ち知る歸命は六字を該攝することを。

問、『銘文』に、歸命を釋して衆生が如來の命にしたがふことゝせり、今と相違するものは、何ぞや。

答、機受は但二尊の勅命に歸順するのみ、毫も衆生の思量を藉らず、所云「信順二尊之意不顧水火二河」なるものなり、『銘文』の釋此に在り、之を歸命の當釋となす、已に佛勅に順ずるのみ、私計を容れず、則ち我能護汝の外に、信相あるなし、能歸全く所歸なり、所信の外に能信することなきが故に、中間の白道を、一びは「淸淨願往生心」とし、一びは「願力之道」となす、正に斯旨を示すなり。　當に知べし、法が全じて機となり、機が卽ち法なることを、故に今能歸を所歸に歸して、歸命を招喚の勅命となしたまふ、此れ大信は是れ大行の所成にして、大行の外に大信なきことを示す行文類の部旨に順ずるなり。　禮

讃前序、及び二河譬に示す所の他力廻向の深旨、此に於て分明なり。

尋るに夫れ、歸命亦是れ法體の德義にして、衆生の構造して方に成ずるものならず。西鎭諸家は、法體成就の疏釋に達せず、曾に疏釋をして通論家の來難を破するに足らざらしむるのみならず、『擇集』の引て不廻向の義を證したまふに違し、大に願力廻向の弘願義を害す、獨り今家あり、斯妙釋を作したまふ、疏釋大に揚る、遺弟豈感戴せざるべけんや。

「言發願廻向者」等。　回願は名號の所具にして、衆生の所得、其本を尋れば、法藏の所成、故に如來等と いふ。　已發願とは因願、廻施とは果成、卽ち願力なり。　衆生行とは、次の卽是其行なり。　心とは大悲心をいふ。『二門偈』に云く、「廻向爲首得成就大悲心、故施功德」と、『和讃』に云く、「彌陀の作願をたづぬれば苦惱の有情をすてずして廻向を主としたまひて大悲心をば成就せり」と。　此大悲心が、口業に發動せるを、招喚とし、其願心より命ずる所、唯是れ一心なり、故に「歸言至也、說也」といふ。　其一心を命ずるが、卽ち衆生行を廻施する相なり、是を以て、衆生は惟命のまゝに之れ聞く、卽ち如來の廻施を領受し、往益頓に決す、必得往生を釋して「由聞願力等」といふもの是なり。　或が、心とは猶意と云んが如し、卽ち解釋の辭なり、と云もの、非なり、終南には「亦是之義」の言あれども、今は彼と別なり、歸命を直に廻願となす、故に但此處にのみ解釋の言を安ずる理なきが故に。

「言卽是其行等」『對問記』に云く、「上に二字を標す、今何ぞ四字を標せざるや、曰く、標すると標せざると、其義互顯なり、謂く、標するは二四配釋の意を顯し、標せざるは各六字に通ずることを示すなり、或は自然の略と云ふべきなり」と。「選擇本願是也」とは、『銘文』云々、其意大に同じ。　卽ち第十八願の乃至十念を指す、十念は是れ稱名なりと雖、乃至の言を添るものは、稱を名に歸するの願意なり、『銘文』に、「乃至のみことを十念のみなにそへてちかひたまへるなり」とのたまふもの是なり。『擇集』には勝易の二義をもて辨ず、勝は法德の圓成を言ひ、易は機受の無作を言ふ。　宗祖之を承け、分て行信とし、而して大行を第十七願に送り、大信一法、以て第十八願となし、名て選擇本願といふ、卽ち易の至極は、信に在る旨を示す、其勝卽ち法體なるを大行とし、亦選擇本願と稱す。　然り、行信同く選擇本願と稱すといへども、第十七八願の通目には非ず、之を第十七八兩願に分つは、これ內に德義を開くものにして、同く第十八願義とし、名て選擇本願と稱し、以て外諸行非本願なるに對して、弘願眞宗を立るなり。　卽ち元祖の所云選擇本願は口稱を須て方て大行を成ずるに非ず、法體名號これ衆生往生の行なることを示すものなり、と開顯するが今文の意なり。　或云く、乃至十念は、衆生の稱名なり、是れ能所不二なりと雖、稱に非る名ならず、故に知る、「選擇本願是也」とは乃至十念を指すに非ずと。　今謂く、第十八願に於て、乃至十念の外に、何れの處に行を求ん、五願開示の時、その行を第十七願に開示するは、第十八願中の乃至十念なればなり、其彼は稱に非る名ならずと云ふが如きは、乃至の意義を詳にせざるに由る、卽ち勝易の二義を體得せざるなり。　或云く、卽是其行は是れ稱名行なり、於中今文は、聞信の一念に領得する稱名の法體を云ひ、『銘文』は正く衆生の口稱に就て辨ずと。　今謂く、甚い哉謬れること、此は行とさへ云へば卽ち稱名なりと僻執せるに由る、聞信する一念の處に、佛因を領

受す、佛因は是れ願ミ行ミにして、而して願は行に攝す、卽ち是れ一の行なり、之を廣にすれば六度萬行、之を中にすれば五念二利、略攝すれば一句の尊號、卽ち萬行五念はこれ一句の南無阿彌陀佛、尊號豈稱名に局んや、流れて稱名ミなるも、初發起一念所領の佛因たる大行、決して是れ一箇の稱名行には非るなり。『銘文』は歸命ミ廻願ミは約生釋なれども、卽是其行は今ミ同く約佛釋なり、爾れば信じ行じて後必得往生ミ明せるものに非れば、彼亦流發の稱名には非るなり、且つ彼れ發願廻向の釋は、歸命の義を示すミなせるものにして、文に別に廻向の義を見ざれども、『執持鈔』の釋に準ずれば、蓋し歸命の具德ミなすなるべし、約佛具德の廻向ミせば、其所廻向の體は、これ所領の行なるべければ、同く一念の處に存するの義なるこミ分明なり。　彼れ又『銘文』を釋し、歸命釋は、二河譬に順ず、卽ち「一心正念直來」の勅命に歸するなり、卽是其行釋は、就行立信に順ず、卽ち一心專念に修する意なり、則ち後釋よりせば一心專念の相にして、前釋よりせば一心正念の相なりミ云ふ。　今謂く、辨釋は則ち巧なれども、祖意は爾らず、今文に必得往生を明して、聞信一念の極促に佛因成滿すミあるを以て、往て『銘文』を視に、彼亦同意なるべし、則ち知る流發の行に非ずして、初起所領の行なるこミを。

右六字の三義を『信文類』の約佛三心釋に對照するに、廻願は卽ち欲生にして、其行は是れ至心なり、至欲二心の成する所は、卽ち是れ決定攝取の信樂これ今の歸命なり、衆生の之を受るや、必ず歸命よりす、故に後に「聞願力」ミいふ、聞は是れ信樂にして、信樂の一心卽三心なれば、至心欲生の二心は、自ら此中に在り、之を名號爲體の信心ミいふ、卽ち願行爲體の心なるなり。

「言必得往生」等。　衆生の機受得益を明す、於中有二、初は正釋、後の經言の下は會合なり。　初文は、願力得生の往生は、往生卽成佛なるが故に、必生は卽不退なり、是れ現益に約するなり。後文は、「經」は卽ち本願成就にして、「釋」は是れ『十住論』なり。謂く、『疏』に「必得往生」ミいふは、卽ち『論』の「必定」にして、『論』の「必定」は是れ『經』の「卽得」なるが故なり。　會釋する意は、聞信一念に佛因圓滿するこミを顯す、換言すれば、佛因たる願行は、次上に釋する如く、如來の所成にして、全じて招喚ミなる、衆生は惟之を聞く處に、全領し滿足す、之を「必得往生」ミ說くぞミ示すなり。　他流の衆生の上に拘々願行を求るに異なるこミ、知べし。「卽言」等ミは、『智論』に同時異時の二種卽を明す中、今は其同時卽なり。『證文』に釋あり、披くべし。「聞願力」ミは、次上の勅命に應ず、上の文中に、「本願招喚」ミ云ひ、「如來發願」ミ云ひ、「選擇本願」ミ云ふ、名號の三義、皆是れ願力、願力は卽ち是れ他力、下の文に云く、「言他力者如來本願力也」ミ、『經』に「聞其名號」ミ說く、名號を今「願力」ミいふ、他力を示す故なり。『觀念法門』には「名願力」ミ云へり。「光闡」ミは、釋迦に屬し、其大にひらきたまへるを云ふ、この二字は由字の上に置て看る意。「報土眞因」ミは佛因なり、下文には「一心則清淨報土眞因也」ミいふ、卽ち上の「願力」にして、その體これ名號なり。「決定」等ミは如來已に衆生の願行を成じ、全じて招喚ミなる、衆生能く之を聞信す、願行全じて衆生の有ミなる、之を決定ミいふ、決定此より先なるものあるなし、故に時尅極促ミいふ、卽ち下に言ふ信一念なり。　促は延に對する言、延ミは相續を言ふ、則ち得益の初を促ミいふ。『經』に「一念」ミ說くは、受法得益同時を顯し、以て橫超の妙益を示す、『御鈔』に、信受本願ミ卽得往生ミ前後を分つミいへども、彼

は法門の建立を示すものにして、其實は同時なれば、其を示して前後同じく卽入等の子註をなしたまへり。今文は得益の極促を示して卽の言を釋す、卽ち聞信の處は是れ得益の時なることを示す極めて之を云へば、受法の外に得益なるものあるなし、決定の法を受る、受る處卽ち是れ決定なるが故に、卽の言受法得益同時を示して以て現生不退を成ずること如此。亦自力念佛臨終業成を期するに簡んで、弘願速疾の妙益を明し、以て平生業成を示すの意を含む、卽ち極促の言自ら極速の意あるなり。『願々鈔』に釋あり、見べし。爾れば稱名に卽せずして、聞名に卽して必定に入るもの、願力廻向唯信得生の弘願眞宗、是に於て分明なり。「必言」等とは、審等の三訓當に本文として看べし。審訓は『字彙』に出づ、往生の義理審明なるを謂ふ。然訓は『玉篇』に出づ、法德自然にして私の計を須ひざるを謂ふ。分極は『說文』に出づ、疆界を謂ふ、迷心斯に盡て定聚に入が故なり。三訓皆得益の相なり。或人は心相に約して解す、亦好し。「金剛心成就之貞也」とは、三訓に示す所の法を出すなり、『御鈔』に、卽得往生を釋して、「他力金剛心也」といふ、今と全く同じ、『改邪鈔』に金剛心成就を釋して云々せり。

已上の解釋、六字の三義は、佛に約し、必得往生は機に約す、卽ち相須て行信の分齊を辨ぜらるゝなり、是に於て、『行文類』に於て六字名義を解釋し給ふ祖意が伺はるゝなり。

**○銘文の釋意**

言南無者といふは南無はすなはち歸命とまふすことなり、歸命はすなはち釋迦彌陀の二尊の勅命にしたがひめしにかなふとまふすことはなり、このゆへに卽是歸命とのたまへり。亦是發願廻向之義といふは二尊のめしにしたがふて安樂淨土にむまれんとねがふこゝろなりとのたまへるなり。言阿彌陀佛者といふは卽是其行とのたまへり。卽是其行はこれすなはち法藏菩薩の選擇の本願なり、安養淨土の正定の業因なりとのたまへるこゝろなり。以斯義故といふはこの義をもてのゆへにといへるこゝろなり、必得往生といふはかならず往生をえしむといふなり、必はかならずといふ、かならずといふは自然のこゝろをあらはす、自然ははじめてはからはずとなり。

六字の三義を以て機法行信として、機受を辨じ、必得往生を釋して、その得益となす、六字三義の中、歸を以て願に屬して、願行具足とせば、以て外は妨難を斥すべく、內は法德を顯すべし。願を歸に屬して、信行相望せば、機法の分齊を明にして、以て趣入の要を知るべし。今は南無の二字を機とし、阿彌陀佛の四字を法とし、以て機法行信の分齊を辨釋せらるゝなり。

「歸命は」等。歸命とは古に多義あり。『起信義記』上に二義を出す、一云歸是趣向義命謂己身性命二云歸是敬順義命謂諸佛教命」と、『同註疏』上一に云く、「歸命是還源義」と。淨土門中、他流は多く賢首の初義を用ゆ、今家は稍彼後義に同ず、然れども彼はたゞ馬鳴菩薩の歸敬を釋す、今と意別なり。今の歸命は正く安心に約す。思ふに、名號は本願の所成にして、其本願を喩顯するを二河譬となす、彼を以て此を釋す、固り其處なり。然に、『文類』と今文と『勸章』との引釋中に於て、今文を二字の當釋となす。『文類』の如きは、衆生の能歸は、本是れ如來の廻向にして、衆生の構造し發起する所に非ること

を顯し、卽ち歸せよと命ずる佛勅となす、跨節釋なり。『勸章』の如きは、二字並に能歸に屬す、分別すれば則ち今文の如くなるも、唯意義を示して「衆生の阿彌陀佛を一心一向にたのみたてまつりて後生たすけたまへとおもひて餘念なきこゝろを歸命とはまふすなり」(第三帖第五章)とのたまふ。漢籍にも亦此例あり、『治安策』賈誼に曰く「歸命天子」と、『通鑑』唐紀五十五に曰く「田興歸命聖朝」と、俗間に奉公と云ふが如き亦同例なり。以て佛勅となすときは、命を主とし、歸は其の命ずる事を示す、卽ち我に歸せよと命ずるなり。以て機受となすときは、歸を主とし、命は其の歸する境を示す、卽ち如來の勅命に歸するなり。今文『勸章』等に機受に約して釋せらるゝもの、所云「信順二尊之意」の文意に本くものなり。

「亦是發願」等。廻願は、機に約すれば、歸命の義別なり、故に先づ歸命をのべて「二尊のめしにしたがふて」と云ひ、正く廻願の義を示して「安樂淨土にむまれんとねがふこゝろなり」と云ふ。佛勅に信順する心中に、義として當果に向て樂欲する意あり、之を廻願といふ。欲生は信樂を體となすといふ、正に斯謂なり。廻向の別釋なきは、蓋し自力の廻向に濫せんことを恐れてなり。廻思向道の意は『散善義』の如く、挾善趣求の意は『執持鈔』の如く、此中義としては並存して可なるべし。

「卽是其行」等。此釋は歸命所領の行體とも云べく、又所信の法とも見るべし。

爾れば、三義の中、南無の二義を機とし阿彌陀佛の一義を法として、機法行信の義を明したまふ。又二字は機受の心相にして、四字は所具の行德を示し給ふなり。

「以斯義故必得往生」の釋は、『行文類』に同じ。

**○執持鈔の釋意**

南無は歸命、歸命のこゝろは往生のためなればまたこれ發願なり。このこゝろあまねく萬行萬善をして淨土の業因となせばまた廻向の義あり。この能歸の心所歸の佛智に相應するとき、かの佛の因位の萬行果地の萬德ことゞくに名號のなかに攝在して十方衆生の往生の行體となれば阿彌陀佛卽是其行と釋したまへり。

平生業成の宗義を成立するに於て、六字釋を引釋したまふ。卽ち歸命の一念に、他力の願行を具足して、必得往生の益を得る、豈平生業成に非ずして何ぞや、と示す意なり。文中、發願と廻向と卽是其行とを別釋せり。

「南無は歸命」等。二字を釋す。「歸命のこゝろ」等。佛勅に歸するの信を當來の果に望れば願の義あり。信に卽せざる欲願は、假門自力の欲生にして、本願成就の名號義の發願には非るなり。『論註』に「願生安樂國」を釋して、「天親菩薩歸命之意也」といふに同じ。

「このこゝろ」等。此に二說あり。一には、歸命の心に具する所の發願には、如來より萬善萬行をあたへて、其をして往生淨土の業因となさしめたまへば、他力廻向の義ありとなり。「なせば」とは「なさしめたまへば」の意、此は法に約して解するなり。二には、歸命する處に、淨土に往生せんとねがふこゝろあるは、これ發願なり、この發願は、物持たずの頑心ならず、歸命の一念に如來より萬善萬行の功

德を廻施したまふゆへ、衆生は如來廻向のその行を己が物として、淨土にむまれんとねがふ理なれば、發願のこころに廻向の義ありとなり。此は機に約し、歸命の具德として解するなり。今謂く、今宗義に於ては、二說何ぞ擇ん、而して先人多く後說に從ふ。『蓮如上人御一代聞書』に云く「歸命のこゝろやがて發願廻向のこゝろを感ずるなり」と、『山科連署記』には、感字を含字に作る、若くは感若くは含、衆生に在ては、惟是れ義具なるのみ。

「この能歸の心」等。四字を釋す。初に先づ歸命をいふ。後に因位より下は正く卽是其行の義を示す。謂く、衆生が信ずる一念頭に佛の因果の德の攝在せる名號が、衆生の有となり、往生の行法を成ずる、これを卽是其行といふと釋せらるゝなり。

如是歸命の一念に願行具足す、故に必得往生の益あり、豈平生業成に非ずやと示す意なり。

言南無者已下の文を引釋して、專ら唯信得生を辯ずること、宗祖を祖述せらるゝものなり。

已上、二字釋は主として『銘文』を承け、四字釋は『文類』『銘文』を並び承くるなり。

**○勸章の釋意**

五帖八十章中、今の釋文を引くに、特に善導のいはくと標するもの五處、曰く、第三帖第六章、第四帖第八章、同第十四章、第五帖第十一章、同第十三章なり、其標なくして釋意を述成するもの、牧擧すべからず。於中、歸命を衆生に約するは、諸文一揆なり、且く一文を出さは、第四帖の第十四章に云く「歸命といふは衆生の阿彌陀佛後生たすけたまへとたのみたてまつるこゝろなり」と、又云く「南無の二字は衆生の彌陀をたのむ機のかたなり」と、餘は皆之に同じ。願を衆生に約するは、唯第二帖第十五章に「南無といふ二字はすなはち極樂に往生せんとねがひて彌陀をふかくたのみたてまつるこゝろなり」とある、この一文のみ、其餘は、發願廻向は卽是其行と同く、皆佛に約せり。乃ち知る、歸命を衆生に約するは、『銘文』を承け、廻願と其行とを如來に約するは、『文類』を承けらるゝことを、若し夫れ希に願を衆生に屬するは、『銘文』『執持鈔』を承けらるゝなり。

該して之を言へば、歸命は機受に約し、廻願と其行とは法德に約して、以て機法一體の義を示したまふ。於中、歸命の釋は知り易し。其廻願と行とに於て、釋に二途あり、一に光明攝取、二に功德廻施なり。その光明攝取とは、第三帖第五章に云く「つぎに阿彌陀佛といふ四の字は南無とたのむ衆生を阿彌陀佛のもらさずすくひたまふこゝろなり、このこゝろを攝取不捨とはまふすなり」と、同第六章に云く「遍照の光明をはなちて行者を攝取したまふなり、このこゝろすなはち阿彌陀佛の四字のこゝろなり、又發願廻向のこゝろなり」と、第四帖第十四章に云く「また發願廻向といふは、たのむこころの衆生を攝取してすくひたまふこゝろなり、これすなはちやがて阿彌陀佛の四字のこゝろなりと、此外類文甚だ多し。此は『禮讃』の「攝取不捨故名阿彌陀」の義意を六字釋に會合したまふ釋なり其功德廻施とは第四帖第八章に云く「南無と衆生が彌陀に歸命すれば、阿彌陀佛のその衆生をよくしろしめして萬善萬行恒沙の功德をさづけたまふなり、このこゝろすなはち阿彌陀佛卽是其行といふこゝろなり」と、第五帖第十三章に云く「されば一念に彌陀をたのむ衆生に無上大利の功德をあ

たへたまふを發願廻向ことはまふすなり」こ、此外類文亦多し。此は『行文類』の釋に本かせらるゝなり。斯の二途、本是れ不二、衆生の彌陀如來にたすけらるゝこいふは、如來所成の功德を廻施せらるゝの謂にして、亦是れ衆生が如來攝生の大悲心中に安住して、其護持を蒙るの謂なれば、入我我入、要はたすくる法の方を示すに在り、されば唯趣向の別のみ、其意は則ち一なり。拙著に『安心決定鈔講話』なる別行本あり、中に機法一體の辯あり、亦右二義を擧ぐ、併せ披かるゝならば光榮なり。

右六字名號の釋意匆々略解し訖る。南無阿彌陀佛〳〵〳〵

（大正三年七月）

# 三　往生禮讃偈前序講錄

今回第五教團安居講習會の本講の尊命を蒙り、『往生禮讃』前序を講ず。惠覺、菲才淺學、恐くは任に堪へざるを。唯一片佛恩に報ふるの念あり勉めて講說に從ひ、敢て大衆の淸聽を汚さん、少にても學者を益するあらば、幸々甚々。

先づ造由を辯じ、後に文に入て釋せん。造由を言はゞ、此に二あり、一に廣大の佛恩を報謝せん爲の故に、二に日課の行儀を示さん爲の故に、是なり。初を云はゞ、凡そ淨土門に於ては、一たび生因の決定せし上は、隨時の稱名、定時の禮誦、著作や、講說や、三業の所作、苟も佛意に稱ひ、弘傳に資するものは、一こして報恩の經營に非るなし。而して報恩を言ふここの、其文の顯著なるは讃主に過るなし、先づ今讃初夜偈に「自信敎人信止眞成報佛恩」こ云ひ、又雜修十三失を擧る中に「不相續念報彼佛恩」こ云ふて、專修の得を反顯し、其他『定善義』『法事讃』『般舟讃』等諸處に出たり。此義は今典に局らず、讃主の諸書に通じ、亦相承諸祖の著作に通ず、故に通由こなす。後を云はゞ、具書四部、通じて行儀を示す、中に於て、『觀念法門』は觀行の規則、『法事』『般舟』の二讃は別時法事の行軌にして、今讃は日課の行事なり、是に於て尋常別時の行儀周足す。西河の傳に云く「綽般舟方等歲序常弘、九品十觀分時紹務」こ、蓋し西河の時二門の行儀未だ分別せず、讃主に迨るに及んで方に淨門の行軌を定む。樸師歎じて云く「西方の一門修法據あり、依修の者をして異徑に假らず、讃詠の者をして常に正典を奉ぜしむ」こ。日課の行儀を示すここ局て今讃に在り、之を別由こなす。上來の二由は、今讃一部の大體に於て立つ。若し夫れ別して前序に就かば、更に所以あり、其は文に入て辯ぜん、請ふ且く後を待て。因に東方の流傳、及び行用の故實を叙すべきなるが、其は予が『淨土法事讃講錄』に出しぬれば、彼に讓つて今は略す。

後入文釋、中二、一題號、二正文、題號中三、一略題、二撰號、三具題、今初。

「往生禮讃偈一卷」

此書二名あり、一に「往生禮讃偈」首尾の題の如し、二に「勸一切衆生願生西方極樂世界阿彌陀佛國六

時禮讃偈」次に別示するが如し。此は具略のみ。異譯の大經、華嚴法界觀門、に亦此例あり　又次の標列には「禮讃偈」或は「願往生禮讃偈」と云ふ、『往生要集』には「六時禮讃」と稱し、宗祖所引の智昇『禮懺儀』には「禮懺儀」と名け、世には亦「往生禮讃」と云へり。「往生禮讃偈」とは、往生は禮讃が爲の所期の果なり、次の具題に照すに、願の字を冠せて見るべき乎、則ち願往生は安心、禮讃は起行、信行並舉て、以て題號となせるなり。「往生」は所云「難思議往生」を謂ふ「長時永劫受無爲法樂」と云ふが故に。若し夫れ安心起行作業に、方便義あり、又雜業の行者に一二三五の往生を許すありと雖も、歸趣は廢立義に在り、今題唯是れ所立の專修の往生なり。「禮讃」とは、身口二業の行事で、卽ち五念中の初二門なり、義は自ら後三念門を攝す、後三念は是れ意業の行、弘願行は是れ三業相應の故に。然るに特に禮讃を以て呼ぶものは、今の主とする所に就く故なり。南無至心等とは、是れ禮拜偈頌は其讃嘆なり。日中禮の後に出す五悔の如きは、唯是れ禮讃を保助するもの、故に亦此中に攝するなり。「偈」とは具さには偈陀といふ、梵語にして、翻じて頌といふ。正說中、初夜後夜、晨朝は是れ五言偈にして、中夜、日中は、卽ち七言偈なり。日沒は散文にして偈に非れども、多分に隨へて偈と名く、又前後の序は、禮讃の用意と利益とを示す、故に正說に屬し、一部を名けて偈とするに妨なし。「一卷」とは、『經疏』の四卷、『事讃』の二卷なるに揀ぶ。離釋如此。合釋せば、兩重の能所依主あり、思ふて知るべし。

二撰號

「沙門善導集記」

『經疏』及び『事讃』は今と同じ、『舟讃』には「比丘僧善導撰」と云ひ、『觀念法門』には「比丘善導集記」と云ふ。「沙門」とは、『琳音』二十一に云く「沙門、正云沙迦滿囊、此云止息、謂止一切諸不善法、又曰劬勞、謂修一切劬勞苦行」と、知るべし。「善導」。道蹟は『漢語燈』九に諸傳を引くが如し、長安臨淄二傳の同異、『勸說』『文軌』等に會するが如し。「集記」とは、諸文を合集して錄して一書を成すをいふ、亦是れ謙辭なり。然るに撰號を安ずるに二の不同あり、一は作者の自安、謙して濫を恐るゝが故に、二は後人の追安、尊重を致ふるが故に、今は是れ自安なり。願ふに、讃主の初て西河を訪給ふは、唐貞觀年中なり、則ち五部の著作は、決して其後年なり、而して入寂は唐高宗永隆二年(三月二十七日)なれば、是れ我天武帝白鳳十年にして、今茲明治四十五年より一千二百三十年前なり。吾人は、萬里の天涯に生れ、一千二百餘年の後に親く遺典を繙き、謹で解釋に從ふ、何ぞ宿緣の深きことや、豈感泣せざるべけんや。

三具題

「勸一切衆生止六時禮讃偈」

「勸一切衆生」とは、化他をいふ、本意に約する故に、經疏の初に「先勸大衆」と云ひ、終りに「本心爲物不爲己心」と云ふが如し。然るに他に勸むるは自行ありてのことなれば、次に「唯欲相續助成往益」と云ふ。爾れば願の字の下に共の字のある意なり、正說に「願共諸衆生」といふ、見べし。「一切衆生」とは、在世より滅後に通ず「遠沾退代」と云ひ、「余比日自見聞諸方道俗」といふもの、是なり。「願生」とは、信心の異名、『淨土論』に願生といふに同じ、『觀念法門』本願引釋の文に「願生我國」をもて三信に代るも全く今

と同じ、『散善義』第三心釋に「回向發願願生者止此心深信由若金剛」といふ、深信堅固の義をもて、願生心を釋す、されば此願生卽ち深心にして、眞實決定の願心なれば、不定希求の願とは異なるなり。下の三心釋は、眞假の二に通ずれども、今は眞實に約す、至宗を標するが故に。　正說に「願共諸衆生」といふ、亦自ら此義なり。「西方」等とは、「西方」は方處を指定して九方に揀ぶ、「極樂世界」は、國名を標して餘國に揀ぶ、「阿彌陀佛國」は主を標して邊地に揀ぶ、則ち寬より狹に之くなり。『大經』に「往詣無量壽佛處」といふ、決して是れ眞報土なり、以て推に、『觀經』の「樂生極樂世界阿彌陀佛處」といふも、亦是れ眞報土なり、『序分義』の釋蓋し斯意なるべし。「六時禮讚」とは、正說分を指す。「偈」とは上の如し。　離釋如此。　合釋せば、上の「勸一」等の二十二字は、所詮にして別下の「偈」の一字は、能詮にして通なり、餘の分別は考へてしるべし。　此題名によりて、上の題名を明にす、具略の別分明なり、見るべし。

二正文、中三、一序述宗要、二正說禮讚三結示勸信、初中二、一略申禮讚意、二廣明願生要、略申中二、一總明造意、二別辯六時、初中亦二、一先標集成、二正明造意、今初。

「謹依大經止分作六時」

「大經及龍樹」等とは、經論釋の次第。「及」の字は說者の因果を別にするなり。「此土」は經及び論の彼土所造に對す、卽ち彦琮をいふ。「等」の字は、龍天二大士を貫く、亦讚主自身を等す。「謹依」の言は多分に從ふ、故に妨なし。　本は散じて各所に在り、今は集めて一部に編む、故に「集在一處」といふ。　中に六時を分つ、故に「分作六時」といふ。

二正明造意

「唯欲相續止沾退代耳」

正く造意を明す。　中に於て、前半は「爲相續」、後半は「爲未聞」、といふ、古來此に二義あり、一には自利々他の別と、二には已入未入の別と、今謂く後說が文の當意で、中に自ら前意を含む、具題に「勸一切」等と云ひ、廣說に「欲勸人」等と云ふ、共に利他として解すること、善く彼等の文に合ふ、然れども化他は自行の如くなすものなれば、讚主自行の意は、兼含すといふべし。「相續係心」とは、廣說中に雜修の失を明して「係念不相續、憶想間斷」と云ふ、反して知る、相續係念は是れ專修の得なるを、心に佛恩を念ずるは、是れ係心で、口に無間なるは、其の相續なり。「助成往益」とは、往益は三心を謂ふ、果を以て因に名くる故に、助成とは「五門相續助三因」と云ふに同じ、若しは五念、若しは禮讚、すべて三心を助成するなり。助成とは增長するの謂なり、『顯名鈔』に云く「本願を信ずる心まことなれば稱名もをこたらず、稱名をこたらざれば信心いよ〳〵增長す」と是れなり。「曉悟未聞」等とは、未聞は『甄解』に云く「當時及び後世に通ず、或可、初は現在に約し、後は未來に約す」と、今謂く或可の說も未聞の言は仍り退代にも及ぶなり。

二別辯六時

「何者第一止當午時禮」

上の「分作六時」を承けて徵して「何者」といふ。「第一」等とは此中に依文の次第と六時の列次とあり、

依文の次第には、西土此土と、佛菩薩人師、卽ち經論釋と、出世前後の次第あり。六時の中で日沒を先にするは、觀經の日想觀に依り、以て指方立相の教義を顯すものなり。

二廣明願生要、二、一問、二答、今初。

「問曰今欲止彼國土也」

上の具題及び造意の文を承けて、下の文を起し、序を畢るに至るなり。「安心」とは、心を彌陀願力に安置して動かざるを謂ふ、卽ち是れ三心なり。所云「樹心弘誓佛地」と云ふに同じ、『勸章』に「やすきこゝろとよむ」とあるは蓋し是れ轉釋なり。「起行」とは、安心より發起する所の行なるをいふ、卽ち五念なり。此行を三業に營作するに就て、憍慢せず、雜修せず、懈怠せず、中止せざるを、「作業」といふ。則ち所修の行法是れ起行で、能修の相狀が其作業なり。定めて往生を得るには、如何に安心し起行作業をなすべきぞと問ふなり。

二答、中二、一示安心行業、二判專雜得失、初中亦二、一約開總擧、二約合別辯、約開中三、一安心、二起行、三作業、安心中三、一總標、二別釋、三結示、今初。

「答曰必欲止必得往生」

淨土門內諸家異說す。鎭西は心行業の三は淨土の宗要往生の正因といふ『纂釋』、是れ三門相具して方に生因を成ずといふ意なり。西山は安心に三心を用ひ助業の起行を勵ます『祕鈔』といふ、此は正助に約して生因を談ずるなり。

今家の意は、『改邪鈔』に釋せらるゝがごとし。文に云く「それ淨土の一門について、光明寺の和尙の御こゝろをうかゞふに、安心起行作業の三ありとみへたり、そのうち起行作業の篇をばなを方便のかたとさしをいて、往生淨土の正因は安心をもて定得すべきよしを釋成せらるゝ條顯然なり、しかるにわが大師聖人このゆへをもて他力の安心をさきとしまします。それについて三經の安心ありそのなかに大經をもて眞實とせらる、大經のなかには第十八の願をもて本とす、十八の願にとりてはまた願成就をもて至極とす、信心歡喜乃至一念をもて他力の安心とおほしめさるゝゆへなり、この一念を他力より發得しぬるのちは、生死の苦海をうしろになして、涅槃の彼岸にいたりぬる條、勿論なり、この機のうへは、他力の安心よりもよほされて、佛恩報謝の起行作業はせらるべきによりて、行住坐臥を論ぜず、長時不退に到彼岸の謂あり」と。此に二節あり、初は此に眞假の二義あるを謂ふ「しかるにわが大師」より後は眞實の分齊を謂ふ。卽ち生因報恩に約して解するなり。則ち三門並具して生因を成ずといふものは、是れ方便義にして、弘願意に非ず、安心ありと雖も、至心回向の起行の心なれば、起行作業を方便となす處に屬するなり。安心で生因が決するときは、起行作業は其相續で、是れ報恩の行業なれば、安心をもて定得すといふなり。されば三門共に生因に擬するは、『觀經』の要門義にして、「雜修無念報」と貶するもの是なり。生因は是れ安心で、行業は其相續報恩となすは、『大經』の弘願義で、專修と歎じ、諸得を擧ぐるもの、是なり。『觀經』に依て安心を明したまふに、前後の二心は要門に約し、中間の深心を弘願に約す、此は是れ影略互顯で、三心に要弘ありと示すも

のなれば、隨て起行作業も自ら眞假に通ずることゝなる。故に三種の眞假に就て分別し、其眞實は大經に居し、大經の中では、本願を本とし、本願に取ては、成就を至極として、唯信生因の義を成立し、以て『觀經』に依るときは此と異なる旨を示されたり。此義は『本典』に此の三心を『行信兩卷』及び『化卷』に分別せらるゝと、及び『口傳鈔』の一念多念分別の意とに合するなり。此が今の一段と及び下の專雜得失を判ずる讃主の意を承けたるものにて今家の常教たる信心正因稱名報恩の所據なり。學者の須く最も研竅すべき要處たり。抑『觀經』の說、隱顯ありて、三心が要弘に通ず、故に『經疏』には三心の一一に自利々他の兩釋を施せり、今は前後の二心を自利に約し、中間の深心を利他に約し、影略互顯して要弘二門に各三心あることを知らしむ。其れ然り經疏と今文と釋に具略ありて體製且く異なりと雖も、三心に眞假の別ありて混視すべからざるを示すは則ち一なり。文に「具三心者必得往生」といふは要弘を通釋す、故に其往生も隨て卽便二種に通ずるなり。後に文殊般若を引いて、一行三昧を明して明かに自利各別の三心を廢して、利他通入の一心を立す、以て今の一段を顧るときは、此の三心往生といふが、利他の一心に依て、報土の往生をうることゝなる、此は是れ讃主の衆生を勸めらるゝ實義なり。「說者」の者字、『化卷』所引の『禮懺儀』には、先の字に作れり、『擇集』所引は今と同じ。

二別釋、中二、一徵起、二正釋、今初。

「何等爲三」

『經疏』には經文の此句に就て佛の密意を彰す、今は但徵起するのみ。

二正釋、釋中自三、一至誠心、二深心、三回向發願心、今初。

「一者至誠止名至誠心」

三心各標釋結あり、見るべし。「所謂」とは『淨土論』に所謂といふ意。下に『淨土論』を引いて、論の五念をもて起行を示し、後に云く、「一一門與上三心合」と。此處は彼五念を引いて釋するなり、爾ればの三心も五念も同く是れ生因で、眞實心中に五念を修して淨土に回向するの謂なり。『改邪鈔』に「方便のかたとさしをけ」といふもの、此意なり。「身業禮拜」等とは、五念門中の三念を出して、三業行を知らしめ、作願回向の二門は、今の第三回向發願心となすなり。或が云く、作願回向の二門は、觀察門中に攝す、同く是れ意業なるが故に、而して第三心中に、一切善根と云ふは、至誠心中所修の五念行を云ふと。今謂く、此義亦聞ゆ、然れども下に出す作願回向の二門、今の第三心と其別あるを見ざれば、五念門を前後の二心に分配せるものと見べし。『經疏』自利眞實釋中に二節ありて、『御鈔』には之を聖道淨土に分ちしが、『六要』には之を總別とせり、文は是れ六要の說の如くなれども、宗祖は別意を此に寄示せらるゝなり。別意とは何ぞ、謂く、淨土要門は是れ聖道の轉向にして、淨土の本色に非ざることを示すなり、されば忻求眞實は別して三業に於ける淨土行を出すと雖も、此處に正雜一切行を攝するものと見るべし。今讃も唯三業に於ける正行のみを出すと雖も、此處に正雜一切行を攝むる意なり。「凡起三業」の言、應に如是看るべし。故に『經疏』の二節、皆此中に存す、下の第三心が卽ち至

誠心中の所修行を承けて「一切行」といふ。『經疏』の回願心の自利釋、全く今と同意。或が至誠心は但正行を擧ぐ、故に眞門位なり、回願心は一切行を擧ぐ、故に要門位なり、といふもの、今の意に非ざるなり。其れ爾り、前後の二心は、一切諸行に約し、中間の一心は、唯念佛行に約す、宗祖が『化卷』に前後の二心を引いて自利各別の心を證し、中間の一心を沒したまふもの、及び『和讃』に述べて云々したまふもの、實に讃意を道破せられたるものと謂ふべし。然るに下得失を判ずる文に至りて「如上念々相續」といふ、『要集』の意に依れば、彼に五念行相續といふ義が存する、是れ『改邪鈔』に所云、佛恩報謝の起行作業といふ義趣なれば、一心相應の稱名は、卽ち三業五念行ありて相應する、吉水の所云「源空の目には三心も五念も四修もみな南無阿彌陀佛なり」とは是なり。故に五念必しも方便ならず、眞假の相分かるゝは、機の用心に在て、要は一心の具不に依て決するなり。『甄解』に云く、若取經隱邊則有弘願義、と。今謂く、今讃前後の二心は、應に是れ方便義なるべし、宗祖が一處として之を弘願となしたまふを見ざるが故に、何を以て然るとならば、『經疏』は衆生の外に眞實心を成ずる人あるをいふ、今は衆生三業の策修をもて、直に眞實心を成ずとなすが故に。須の字、今も亦もちゆるゝと訓じてあるも、已に自利眞實の義とせばべしと訓ずる亦同じ。

二深心

二者深心止故名深心」

標釋結あり、見るべし、釋中、「眞實信心」とは出體で、信知の下は其相を示す。『經疏』は三心各々、自利々他に通じて、廣く具さに解釋す、今は前後の二心は自利に約し、中間の一心は利他に約す、要弘各三心あることを互顯すると同時に、自利の心は利他の一心を少ぎたること、利他の一心には二心自ら具することを知らしむ。『化卷』に云く「觀經說深心對諸機淺心故云深也」と、此は是れ今の讃意を體得して、弘願は是れ深心より入て三心自ら具するの意義を知しめたまふなり。『經疏』には「深心者深信之心也」といふ、今は「眞實信心」といふ、卽ち『觀經』所說の深心は、『大經』本願の信樂にして、成就の信心なりと知らしむ。第十九願開說の『觀經』、其三心を說く中に、第十八願の信樂を說き加へたるが釋尊の善巧、是れ自利淺心の機を引いて他力回向の信心に歸入せしめんとなり。『化卷』に「濁世能化釋迦善逝宣說至心信樂之願心報土眞因信樂爲正故也」と云へり。佛意如此、本願成就の信心をもて、『觀經』所說の深心の體を定むるもの、其旨豈深からずや。甘露院慧海云く、眞實信心とは、願成就の信心歡喜なり、『改邪鈔』に和尙の御釋をうかゞふにといふて、その安心を辯ずるに、それについて三經の安心あり、そのなかに大經をもて眞實とせらる、大經のなかには、第十八の願をもて本とす、十八の願にとりては、また願成就をもて至極とすといふ、如此の言義は、今讃に見がたきに似れり、熟視するに、是れ大に今讃の幽意を開顯せるものなり、謂く前後の二心は是れ要門で、中間の深心は卽ち弘願なり、「言弘願者如大經說」で、弘願の安心は、三經の中では『大經』『大經』の中では第十八の本弘誓願、第十八の願にとりては、成就の信心を至極とす、「深心卽是眞實信心」といふ是なり、此三心釋の一段は、要弘各三心ありと視せしめて、後に一行三昧を明すに及で、前後二心に出す所の自力三業の心行は

捨てゝ取らず、唯本願念佛の一行を立つる、而して三番の問答を設けて、最後に別願の因緣を言ふ、然ればこの本願力光明名號の攝取にて、衆生は但信念するのみで往生するといへば、前の「本弘誓願及稱名號」といふ稱名は三業相應の五念の行を通じて、報佛恩の經營といふことを明白なり、『改邪鈔』の成就を至極となすこの給ひ、この機のうへは安心よりもよほされて佛恩報謝の起行作業はせらるべしこのたまふもの、符を合して有り難ひ、云々、實に看破せるの言なる哉。「信知自身」とは、具さに信相を明す。中に於て、初に機法を分釋し、後に「乃至一念無有疑心」と、一念に結成するなり。初の中、『經疏』には「有二種」といふ、一者二者の言を安ず、今は一二の言なし、言はなけれども二の信知の言あり、機法を分て示すの意なることゝ、疑議すべきなし。一深心に二を分つもの如何、謂く之を辯ずるに、『溫故錄』は五義を擧げ、『模象記』は六義を出し、『仰高記』は更に十義とし、『義疏』は縮めて四義とし、『寶章綱要』は簡非顯是の二義として、更に簡非に二義を開いて、一には聖道大乘に簡び、二には自力要門に簡ぶとし、顯是に三義を開いて、全く『義疏』の後三義を取れり。『義疏』の四義とは、一に淨門自爾故、二に本願爲然故、三に三經佛意故、四に相承心印故、と是なり。諸說皆好。『綱要』は旨を得たり、從ふべし。淨影云く「深心者信樂懇至」と、天台云く「佛果深高以心往求」と、又云く「從深理生」と、所揀粗知るべし。『六要』に云く「聖道諸敎盛談生佛一如之理、今敎依知自力無功、偏歸佛力」と、又云く「明不論有善無善、不假自功、出離偏在他力」と。則ち二の信知は機法の二實を知ることにて、機實を知りたるは、卽ち自力無功となりたるなり、法實を知りたるは、是れ佛力たのむべしとなりたるなり、所云佛願の生起本末が、衆生心中に印現したるにて、唯是れ他力回向の信心なり。されば二種は一具にして別相あることなし。故に『御鈔』に歎じて「今斯深心者他力至極金剛心一乘無上眞實信海也」とのたまへり。「信知」とは、知をもて信を釋す、『論註』の「不知二身」の釋に依りたまふ。『化卷』には「觀知本願成就盡十方無礙光如來」といふ。『一多證文』には淨土論の觀に同じ觀と信知とを合釋せられたり。「自身」等とは、次の彌陀に對し、生佛相望し、機法を分別す。卽ち讃主自指の辭、『歸三寶偈』には「我等愚癡身」と云ひ、『經疏』には「我身」と云へり、是れ自身に約して、一切凡夫の信機を示す。此に「自身」と云ひ、次に「今」と云ふ、並に是れ的切に勸導して、有緣をして汎聞徒稱せざらしめん爲なり。深心は是れ出離の極要なるが故なり。「是」とは體を指定する辭、『疏』には「現是」と云ふ、彼は三世に通じて具さに機相を示す、故に現とは現在を云ふ、今は文體を異にして、過去未來を言はず、只現在に就て出離の緣なき相を示す。「具足煩惱凡夫」とは、『論註』の淸淨功德の釋に「凡夫人煩惱成就」といふに依る、具足と云ひ、成就と云ふ、伏斷の人に揀ぶ、無量の煩惱一毫未斷の凡夫なるをいふ。「善根薄少」とは、『六要』に天台の釋を引て云く「衆生無始恒居三道、於中誰無一毫種類、已上而雖有善未絕輪廻、是則煩惱賊害故也、是故今釋示有善根而顯自力薄少善根不截生死、疏釋正約不出生死之邊、亦就諸善不成之義、直云無有出離之緣」と、たとひ少善を有するも、煩惱賊の爲に害せられて、到底生死を出づることゝ不可能なり、故に「無有出離之緣」なり、『疏』と對望するに、只言に緩急あるのみ、至竟同じく「無有出離之緣」なるものなり。「三界火宅」とは、法喩並出す、『法華』云く「三界無安猶如火宅」と、語を彼に取る。信機の文、粗如此。信法を示すの文、

『經疏』に對照するに、稱名の有無、同じからず。或人は此に相待絶待の別ありと云ふ。今謂く、彼には七深心を分て、中に就行立信といふ所就の行を辯ずる一章あり、故に其に讓りて二種中に言はざりし、今は略明の故に、此中に擧ぐるなり、同じく是れ念佛往生の立信なれば、義趣に於て別あるなし。若し夫れ所就の行が稱名なれば、宗祖の所談と異なるやに思ふは、其は本願の宗義に明ならざるが致す所、須く一段の考究を要すべし。「本弘誓願」とは、謂く第十八の本願なり、「稱名號」等といふ、見べし。『經疏』には「四十八願」といふ、讃主の所云四十八願は卽ち第十八願なり、『玄義分』の「二乘種不生」會通下の如し。「及稱名號」とは、及の字解し難し。『甄解』に、上は因位の誓願に就き、下は果地の名號に約す、故に及といふ、或は云ふべし、上は信に約し、下は行に約す、と云へり。今謂く、二說未だ善解とせず、『行信兩卷』の所引の助聲に準ずるに、名號を稱することは、下は一聲一念に至る、その一聲等のものに及ぶまで、定めて往生を得ると信知すといふ意なり。『一多證文』に釋して「及稱名號といふは、及はをよぶといふ、をよぶといふはかねたるこゝろなり」とある、蓋し斯意ならん。乃ち下至の上に、上盡一形の四字を安じて看る意、次下の文の如し。「一聲等」とは、『禮懺儀』には「一聲聞等」といふ、『行卷』の引文、寬永正保二本亦同じ、『信卷』の引文、寬永本は「十聲聞等」に作り、寬文本には「一聲聞等」に作れり、『六要』には聞字あるは寫誤歟と云へり、『甄解』に十聲一聲聞已卽ち下三品の相、『銘文』に下至十聲を釋して云々、必しも剩とはなすべからず、と云へり。「等」の字は、聞の字なきときは聞信一念を等す、次下に十聲一聲等とある亦同じ、若し聞の字ある本によれば、向內等なり、後述に一聲一念等とある亦同じ、何れにしても下三品の說相に居して、聞信一念までに促むるの釋相なり。『一多證文』に今文を釋して云く「名號をとなふることゝ、ここゝろひとこゝろ、うたがふこゝろ一念もなければ、實報土へむまるこまふすこゝろなり」と。祖意見るべし。「定得往生」等とは、信行は是れ必生の因なることを示す。「乃至一念」は信一念にて、次に「無有疑心」といふ是れなり。又可、是れ行一念にて「十聲一聲無有疑心」といふ意、卽ち信行不離の稱名なり、所云往生極樂のためには南無阿彌陀佛とまふせば疑ひなく往生するぞとおもひとりてまふすほかには別の仔細候はず、但し三心四修なんど申すことの候はみな決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞとおもふうちにこもりて候なり」といふ意なり。『行信兩卷』に引證せらるゝよりせば、兩義を存して伺ふべし。

三回向發願心。

三者回向止向發願心」

標釋結は文の如し。「所作一切善根」とは、卽ち上の至誠心釋に所云身口意所修の善根なり。『經疏』三重の釋、『六要』に初一重は回因向果、由自力心也、故に『化卷』に引き、後二重は回思向道、回入向利で、『信卷』に引く、他力に約する故なり、と云ふ。今の釋は、彼初重に合す、故に同じく『化卷』に引かれたり。案ずるに、『淨土論』の回向門は前四念門の功德を回向することなれども、今讃所引の回向門は、廣く一切善根を回向することゝせり、是れ『論』の五念を『觀經』の三心に合して明すので、三心が已に定散に通ずるとせば、第三の回向發願心が、定散の諸善を回向することゝなるは必然なり、故に至

誠心釋中三業所修も、一切の止惡作善に通じ、隨て此回願心も、亦一切の諸善に通じて釋せらる。『經疏』及び今讃に「五門相續助三因」と云て、『觀經』所說を直ちに五念となすもの、其義愈明らかなり。

三結示。

「具此三心止具說應知」

此文一往は要門に通ず。「若少一心」とは、三心中隨一に少ぐるの謂なり、西鎭の釋の如し。『化卷』に第三心の後に此結文を併せ引けり。蓋し『經疏』及び今讃の自利三心の結となすの意なるべし。再往は弘願に約す。「若少一心」とは、上の深心が少ぐるの謂なり。成就の信心は、是れ論主の所云一心なるが故に、『唯信文意』に云く「善導は具此三心必得往生也若少一心卽不得生」とのたまへり。此この一心かけぬれば實報土にむまれずとなり」と、『和讃』に云く「眞實信心ゑざるをば一心かけぬとおしへたり、一心かけたるひとはみな三心具せずとおもふべし」と。弘願の三心は、三心は卽一心、一心は是れ信心で、體は是れ至誠、回願は其義別なり、故に一心は卽ち三心で、三心亦是れ一心なり。『化卷』に一者三者の前後の二心を出して、第二深心を乃至して出さぬものは、要門行者には、他力眞實の一心少けたることを顯すものにして、第二心が少ぐるときは、隨て前後二心も具せずして、三心皆少けて具せず。されば具三必生の義理は、只弘願に局りて要門に之なしと廢立するの祖意なり。「如觀經具說」とは、蓋し本を指して末を知らしむ、意は『觀經義』に具に說くが如しとなり。「應知」前序中に五たび此の二字を安ず、章段の別、須注意焉。

二明起行、中三、一總標二別釋、三結示、今初。

「又如天親止定得往生」

五念に就て先づ本論の所明を明し、後に今讃の大意を辯ぜん。本論に約本、約末、體具、相發の別あり。初め起觀生信章に「善男子善女人修五念門行」と標して其の行相を釋す、是れ願生行者の所修にして、『註釋』に明かに衆生に約して如實不如實を甄別せられたり。『二門偈』に「菩薩入出五種門漸次成就五種門」と云ひ、又「願力成就名五念」といふものは、是れ本佛に約するもので、此は『論註』の利行滿足の釋に二利成就は阿彌陀如來を增上緣となすといふに依て本論に泝り、不虛作住持の偈、及び淨入願心章の幽意を探り得たるものにして、五念の因、五德の果、すべてこれ願力回向で、如來成就ならざるなしと示すなり。極めて之を言へば、衆生の爲に成ずる法藏所修を、衆生に施設したるものと見る意なり。之を約本となす。已に三業二利の行を成じたるが正覺なり、名號なりで、其を信知せるが是一心で、此一心が速得菩提の因といふは、佛德全じて因となり、一心が佛德を全領せるに由る。一心を釋して願作佛心なり度衆生心なりと云ひ、歎じて廣大無礙の一心と云ふ所以なり。それ然り。一心は是れ如來所修の二利五念の行を具するが故に能く佛果を得るなり。されば五念の德は、一心中に具するなり。之を具德といふ。此の具德が、衆生の三業に發現して分に應じて修せらるゝもの、之を相發といふ。然るに、具德は是れ因德にして、相發は是れ報恩なれば、具德は智愚善惡を云はず平等に領得し、相發は淺深あり、具缺あり、一にして定まらず。然り相發は一定せずと雖も、具德は必

ず是れ同一なり。起觀生信章は其相發を知り、善巧攝化章已下は其具德を知る、須く仔細に伺ふべし。今讃の所引は、前に已に辯ずる如く、義は眞假に通ず。中間の深心に合するものは、是れ弘願の起行で、報恩の經營なり、前後の二心と合するものは、其要門の起行で、往生の業因なり、眞實の深心と合せば、五門は是れ信心の相續相なれば五門得生といふは、卽ち信心生因の義となりて、三業の所修は、自ら報恩の經營ならざるを得ず。下に至て先づ「如上念々相續乃至十卽十生」と云ひ、後に之に反する雜修の失を明して「無念報佛恩」と云ふに、專修の得を反顯する、是れ報佛恩の起行なること分明なり。若し己が所修これ生因なるやに計して、三業の行功をもて回願するは、是れ前後二心の意にして其は選擇本願の義に違し、廢立の經意に背く、故に貶して假門の行とするなり。『改邪鈔』の開顯、實に斯の意なり。本論は所云「依修多羅顯眞實」の開示なれば、勿論弘願義なり。其を今假門に通ぜしむるは只修相の一邊に看て用心の如何を顧みざるものに就くなり。されば前後の二心と合して方便の行となすもの、其意信心肝要を示すに在り、此は是れ『註釋』の如實不如實分別の意を承くるなり。問、五念門と五正行と同異如何。答、或同或異なり。五念に約本の義あり、體具の意あるは是れ五正と異なる所なり。五念中の讃嘆、起行とするときは、廣讃の行を以てし、其略讃の稱名をば深心所就の行として、安心に屬するものは、五正行中の第四の稱名を正定業とするものと全く同じ。『二門偈』の讃嘆門下に「攝取選擇本願故」とのたまふもの、正に斯義なり。されば稱名往生といふもの、卽ち名號攝取と信心求念するときは、往生は是れ佛願力にして、衆生の造作は沒交涉となる。已に願力獨立して、衆生は無作得生と知るれば、三業の所修は、生因に擬すべきやうなし。但報佛恩の經營なるのみ、五正中の前三後一、五念中の前一後三、みな稱名に同じて、如實の報恩行を成ずるなり。「五門相續助三因」の釋、亦此義を含む、考ふべし。五念門の名を釋せば。五とは數法。念とは觀念をいふ。謂く約本及び體具には、此義を本とす、通途に順ずるが故に。又心念、或は意念、或は稱念を謂ふ、約末相發を解するには、必ず此義に依る、別途を示すが故に。門とは入出の義、謂く前四念は是れ安樂淨土に入るの門、後一念は是れ慈悲教化に出づるの門。五門は是れ一の觀念、一の心念意念、一の稱念なるを、五念門といふなり。『論』『論註』の意、須く考究すべし。今讃では、前後の二心と合する五念は意念を主として解すべく、中間の深心と合する五念なれば五門は一の信心なり、一の稱念なりとして解すべし。所云「源空が目には三心五念四修みなこれ南無阿彌陀佛なり」といふ、是れ弘願義なり。「五門若具定得往生」とは、三心に五行を具すれば、必ず往生することをうるをいふ。要門は論なし、弘願に於ては「三信十念若不生者」の本願に順じ、信は必ず行を具して、自然に信行相應する旨を談ずるものにして、唯信無行は往生せずとの謂には非ざるなり。

二別釋、中二、一徵起、二正釋、今初。

「何者爲五」

二正釋、中自五、一禮拜門。

「一者身業止名禮拜門」

中に三あり、標釋結なり、見るべし。　後四念亦同じ。　釋中「一心專至」とは、此言は下を貫く、三心の安心より五念の起行を修することを顯す、　又可、專ら五念を修して二心なく相續するを一心といふ、讃嘆門下に專意と云ふも同意なり。「恭敬」は恭敬修、「專禮」は無餘修、「畢命」は長時修、「不雜」は無間修なり。　如此に初の禮拜門下に四修を具して、下の四念門に通ぜしむ、是れ五念の修相は、卽ち四修なる故なり。「香華供養」は、本論にはなし、思ふに、此は自家所立の五正行をもて、論の禮拜中に入れたものなり。

二讃嘆門

「二者口業止名讃嘆門」

釋中、「專意」とは禮拜中に在る「一心專至」をいふ。「讃嘆彼」等とは、『論』は略に約して「稱彼如來名」といふ、今は廣に約して三種莊嚴を讃ずとせり。『讃偈』の六字を標して、後に三種莊嚴を讃ずるが如し。六字名號を開いたが三種莊嚴、三種莊嚴を合したるが南無阿彌陀佛なればなり。　然るに三種莊嚴ともに光明を言ふ。仍ほ論意を存す、三種皆是れ盡十方無礙光中の別相の故に。『甄解』に云く、論讃嘆門助正混融故稱念在中今且分之以「五念」爲「唯助業故不攝稱念」と。　今謂く、此言好し。　稱名行をば深心中に出して、讃嘆門中に沒したるものは、『經疏』の就行立信中に念佛餘行をもて要弘二門を分つの所明に同じくして、唯稱名の一行を專修とし、餘行を修するを雜修とするの趣向を取りしなり。『改邪鈔』に「起行作業の篇をばなほ方便のかたとさしおいて往生淨土の正因は安心をもて定得す」るといふもの是なり。　然るに四修を明すに及んで、第二の無餘修、第三の無間修、皆稱名を出すもの、卽ち深心中の稱名にして、所云「他力の安心よりもよほされて佛恩報謝の起行作業はせらるべきに」よりて行住坐臥を論ぜず長時不退に到彼岸の謂あり」の義なり。　稱名も卽名號卽信心と言はるゝ專修の行であれば、諸善萬行と相對して、就行立信中には「正定之業順彼佛願故」と云ひ深心中には本弘誓願の行と云うてある。　若し三業の修功を計し往生の因に擬するものなりせば、稱名猶是れ貶して雜修に同じて、要門中に屬するなり、存沒不同、應如是觀。

三觀念門

「三者意業止名觀察門」

標中、「憶念」とは恒時相續を示す、必しも入觀の時のみならざるが故に。　釋中、「念觀」とは上の憶念觀察なり。「恒憶」等の四は、前二は出定の時に約し、後二は入定の時に約す、憶持して捨てざるは恒憶なり、日夜に常念するは恒念なり、思惟は是れ恒想で、正受は其の恒觀なり。

四作願門

「四者作願止名作願門」

已下の二門、標中に業を辯ぜず、意業なることは推知すべきが故なり。　釋中、「初中後」とは、『私記』に云く「拜等二門爲初觀察門爲中廻向門爲後、或每一一門有初中後以自願生爲作願以兼濟邊名廻向」と、今謂く、後義を可とす。　問、三四の二門、『論』と次第を異にす、何の意ぞ。　答、玄雄師三義を出す、一に

は作願廻向の二門は第三心の相續相にして、義相關する故に、『往生要集』二に「作願廻向二門於諸行業通用之」とて、二には偏人五因五果の淺深を固執するを遮せんが爲に、三には五念は唯是れ二利願生の爲なることを顯さんが爲の故に、と。今謂く、第三義を可とすべし。作願門の釋、その意可見。乃ち自利々他の次第で、先に三業の行を辯じ、次に作願を置いて是れ皆自の願生の爲なりと結成し、以て後の利他廻向に接するなり。若し夫れ論文は、止觀の次なるが故に、作願を先とし、觀察を後とし、之を自利行として、以て利他の廻向に接するなり、趣向の別見るべし。

五廻向門、中二、一正明、二因示、今初。

「五者廻向止名廻向門」

『論註』の起觀生信章に、廻向を釋するに就て、往還の二種を開く、彼は因の五念中の廻向を釋するに因みて、果の廻向を出す、今亦彼に同じ、故に「又到彼國」等の文あるなり故に正明因示と科するなり。然るに正明の廻向は、自ら要弘に通じて、弘願の義邊は、還相に對して往相の名を得べきなれども、要門とするときは、因示と別なれば、隨つて往相の名も無きなり。正明の釋中、初は所廻の善で、後は能廻の相なり。要門とするときは、前後の二心と共じて、自作隨喜の諸善は、他と共に彼國に廻向するなり。弘願とするときは、諸善を廻するとは、唯是れ具德なり、『執持鈔』に南無の二字を釋して云々し給ふが如し。「三乘五道」等とは、三乘を聖とし、五道を凡とす。五道の善を隨喜すといふ、三惡趣に猶善ありや、謂く、有り、『甄解』に『私記』を引いて云々するが如し。

二因示

「又到彼國止名廻向門」

上の回向門の標、自ら流れて此に及ぶ、而れども今文に就ては、唯釋結の二のみ、文は知り易し。

三結示

「五門既具止業也應知」

心と相應する行を今の起行となすことを結成するなり。「業行」とは、業卽行で、次の作業を謂ふにはあらず。「多少」とは、五行必ずしも具せざるをいふ、五行の具略を言はず、隨つて行業を修す、必ず三心と相應せば、茲に眞實業と稱せらるゝなり。此文自ら眞假に通ず、眞實業の名、必ずしも弘願の意ならず、古人に『註』の讃嘆門の如實行に同ずといふ說をなすものあり、思はずと謂ふべし。

三明作業、中三、一標合用、二列四修、三辯難易、今初。

「又勸行四止速得往生」

已下四修の作業を明す。中に、初に安心起行と合用すべきことを標す。四修の行法はもと他部に出づ。『攝大乘論』第八、『俱舍論』第二十七の如し。『六要』に、『俱舍論』を引いて會して云く、「此論文與宗家釋義相違非一、無餘修者彼約福智資糧圓滿無遺餘義、此約一行無雜餘義、長時修者彼約三大阿僧祇劫長遠之義、此約一生畢命之期、何相違乎、答、論說雖然就今修行隨義轉用、卽今所引已免等者顧彼論說所設釋也」と、實に然り、全く是れ隨義轉用なり、聖淨二門、敎義固り別なり、同じからざる所以なり。

『擇集』には必具三心章に次で、行用四修の一章あり、初に今文を引き、後に『西方要決』を出だせり。然るに作業の四修は、必ず起行の五念と一具す、五念は是れ所修の行體にして、四修は其能修の行相なるが故に、則ち此は具說すれども、彼は能修に所修を攝めて復起行を言はざりし、而して彼は專ら弘願に約し、此は自ら要弘に通ず。弘願は唯是れ報佛恩の行なり、三心既に具して佛恩を了知す、佛恩とは其願力得生をいふ、爾後の行事は、唯罔極に報ふるに在るが故に、之を常途に比するに、止に行體の繁簡あるのみならず、心相の別、幾んど雲泥の如し、彼は辛苦勉强して以て修し、此は安堵慶喜して而も修するが故に、當に知るべし、眞實信心の相續相なり。四修の列次、『俱舍』は無餘長時無間尊重とし、『攝論』は長時無間恭敬無餘とし、『西方要決』は長時恭敬無間無餘とせり、今讃は恭敬を先とす、無餘無間長時之に次ぐ、蓋し是れ常途の業に異なることを示す爲ならん。謂く『華嚴經』に云く「信名恭敬」と、『十住論』に云く「應以恭敬心」と、『智論』に釋して云く「謙遜畏難云恭推其智德故云敬」と、則ち是れ二種深信の義なり、彼を以て此に名けて、以て他力の信心等流して首となりて餘の作業を導御し、善く報恩を行ずること、大に他の自力行に異なることを示すなり。

二列四修、中二、一徵起、二正明、今初。

「何者爲四」

二正明、中三、一恭敬修。

「一者恭敬止是長時修」

四修を明す中三あり、恭敬無餘無間なり、長時修の一は、餘の三修に通ず、長時修少けぬれば、三修成ぜざるが故に、故に長時修は三修に兼示するなり、『擇集』の釋の如し。乃ち此中に二あり、初に正明、後に「畢命爲期」の下は兼示なり。「恭敬」は三業に通ず、中に於て、身業禮拜が敬相最も顯著なり、故に殊に禮拜を擧ぐ、所禮は淨土及び此方の三寶とす。「等」の言は住持三寶を攝す、『擇集』に引く『要決』中の如し。兼示の下、自ら其意を制するを誓と云ひ、懈怠を防ぎ中絕止息せざるを不中止といふ、卽ち臨終を期して不退ならしむるの謂なり。若し方便に約せば、自策自勵の勤修、若し眞實に約せば、信不退の法德が自然に現ずるものなり。

二無餘修

「二者無餘止是長時修」

中に二つ、初は正明、後は「畢命爲期」の下は兼示なり。專ら正行を修して餘の行業を雜へざるを、無餘修といふ。專は專一の義で、無餘を顯すの言なり、此は横に約す、行體に餘業なきなり。無間修に「不以餘業來間」といふ、彼は竪に約す、相續して間隔なきなり。「專念專想」は意業觀察、「專禮專讃」は身口の二業、此の三業行を專稱佛名に合せば、所云「五門相續助三因」にして、三業の行そのまゝ一念佛行なり、「論」の稱名行をば、五念中に沒して、三心中に出す、彼を以て今を視るに、此「專稱佛名」は是れ弘願意にして、下に明す一行三昧なるものなり。願生行者の不退行は、上盡一形下至一念の稱名にして、其餘の行は、分に隨つて修するにて、具缺もあり、精粗もあり、全く是れ報佛恩の助緣なり。されば

専稱佛名が主となりて專禮等と五念を修するは、すべて弘願の報恩行にして、五念卽ち一念佛行なるものなり。爾るに未熟の機には、餘の三業行が主となる、或は觀念は是れ主にして、稱念佛名が之に隨ひ、或は念佛も自功を負む風情となりて、專稱佛名その實を失ふことゝなる。如此に眞假に通ずべしと雖も、專稱佛名といふは、弘願行者の起行作業を主とするものなり。

三無間修

「三者無間止是長時修」

中に二つ、一に正明、二に「畢命爲期」の下は彖示なり。正明中亦二つ、初は餘業無間、後は煩惱無間なり。間は間隔の義、前心後心相續して、中間に餘事をもて間隔せざるをいふ、下に「係念不相續」「憶想間斷」「煩惱來間斷」といふもの、此無間修を缺ぐの失なり。或は云ふ、間厠の義、餘業を雜厠せざるを謂ふと、非なり、無餘修と揀ぶなきが故に。然れども四修は是れ展轉相成して相離れず、故に「相續恭敬」等といふ、則ち五念相續して間斷なき、是れ無間修の行相なり。初の餘業無間の中、五念行を擧ぐ、「恭敬禮拜」は身業、「稱名讚嘆」は口業、後は是れ意業、中に於て、觀察は智業、廻向は方便智業、發願は意業なり、上の相續の二字は無間修の名義を釋す。後の煩惱無間の下、凡夫の作業なれば煩惱發り易し、發れば隨つて懺悔す。「隔念隔時隔日」は、間斷時節の長短をいふ、或は上中下の三根に配し、或は一人の上に約す、二說妨なし。此中二義、並に要弘に通ず。五念卽一の念佛、專修稱名の三業相應なれば、是れ弘願義にして五念各生は其要門意なり、煩惱を抑んと望み、起るも懺悔を欲するは、要門行者の執情なり、若し弘願の人は、全く是れ法德なり、下に「貪瞋諸見煩惱來間斷」と云ひ、「無有慚愧懺悔」といふ、反顯して知るべし。則ち安心に約しては、眞心徹到するものは三品の懺悔に同じと云ひ、起行に約しては、念々稱名常懺悔といふもの、則ち法德が機上の信行の德となるなり。爾らば相續無間と長時修と何ぞ揀ばん、謂く、豫め期して盡形壽中絕なからしむるもの之を長時修と云ひ、心々相續して間斷なき其當相に就て無間修といふなり。

三辯難易

「又菩薩已止具足應知」

此中有二、初に聖道の難を明し、後に「今時衆生」より下は淨土の易を明す。四修は本是れ論藏の所明にして、從前の所明、大に彼と異なり、彼に顧みて結勸す、乃ち今釋あるなり。『六要』に云く「所作善法已下三句約自利行、此中含容無餘無間尊重三修、敎化衆生下三句就利他行、約長時修、然今等者彼大菩薩四修之行今時煩惱繫縛凡夫修行分絕只發廻願往生之心明於一生一行分修四修義也、到彼已下明論藏等所說四修於彼淨土自然任運具足益也」と。此に言ふ自利々他とは、行體は是れ五念門なり、五念は是れ三業二利の行にして、一切菩薩の通行なるが故に、而して修相は四修の外ならず。「然今時」等は、二利不堪の下機を擧ぐ、卽ち聖道の大士に揀んで、淨土の正機を出すなり。謂ふこゝろは、彼は已に生死を免れたる菩薩の四修にして、是れ難行なり、此は惑業に繫縛せられて未だ生死を出でざるものゝ修する所の易行なり、されば論藏所說の四修は、今時凡夫の堪へざる難行なれば、隨緣起行し

て廻向願生するは、是れ易行の五念四修なるものなり。「到彼國」等とは、隨緣起行にて往生しぬれば、論藏所說の廣大なる五念四修は、彼土に於て自然に任運に成就すといふ、乃ち此土の難成をすてゝ、淨土の易成に歸せしむるなり。此文要門を主とす、故に『化卷』に引けり、「隨緣起行」とは隨緣雜善といふに同じ。亦弘願に通ず、淨土に生じて後、任運に成就すといふもの、實義は弘願に在るが故に、隨緣は猶隨分といふに同じ。「廻願」とは「信心廻向作諸功德」と說くに同じ、行相に優劣ありと雖も、報恩ならざるなし、乃ち一切善根は是れ五念行にして、廻願は是れ其の具德なり。此一段の文對揀四あり、一に已免生死と未免生死、二に廻求佛果と廻願往生、三に菩薩二利行願と凡夫隨緣起行、四に此土の策修と彼土の自然なり。難易の別、それ如此、豈去就せざるべけんや。

二約合別辯、中二、一直擧經文、二問答解釋、今初。

「又如文殊止一切佛等」

從前は安心起行作業を開いて、總じて眞假に通じて示し、已後は三門を一念佛行として、別して弘願に就て辯ずるなり。『六要』に云く「具釋成三心五念及四修已結彼安心起行作業悉爲稱名一行之義」と。「一行三昧」とは、上の深心中の稱名號にして、所云「三心四修なんぞまふすことのさふらふは決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞとおもふうちにこもりてさふらふなり」の意なり。卽ち上の三門を一念佛行に束ね、以て安心は是れ往生の正因、受行の至要なることを論定せらるゝものなり。中に於て、初に直に一行を標し、後に問答覈論す。故に粗より細に之き、漸く實義を示す。乃ち前二問答は之が序述にして、第三問答が其極處たり。後より前を顧て、此之の一行を選擇本願の行となす意が知らるゝなり。或が云ふ、文に三重あり、初は難をすてゝ易に歸せしむ、次は九方をすてゝ西方に向はしむ、後は諸佛をすてゝ彌陀に就かしむと。今謂く、文に據れば且く爾り、然るに『行卷』にこの一行をもて付屬の一念に同じからしむる祖意によれば、乃ち橫の義ありて、正依經意に依て、『文殊般若』を會し、彼稱名を以て、本願の念佛となすものなり。由字の音釋も亦其意を寓す、見るべし。『改邪鈔』に「起行作業の篇をばなを方便のかたとさしをいて往生淨土の正因は安心をもて定得すべきよしを釋成せらるゝ條顯然なり」といふ、彼釋成すといふは全く此一段を指さるゝなり。序述の要處、勿看過焉。「文殊般若」とは、一卷經に出づ、『寶積經』第百十五十六卷は是れ文殊般若會なり。別本あり、『開元錄』六同十九に出すが如し。宗藏中、先に西河あり、『樂集』第四大門下に引て、念佛爲宗を證し、後に橫川あり、『要集』に二たび出す、其第四大門觀察門下に引くものは、天台の意に同じく、第七大門念佛證據門下に引くものは、讃主の依る所ろ。一行三昧を明す全文は、『本典略讃』及び『對問記』に引くが如し。穩が云ふ、文に二段あり、觀察と專稱となり、天台終南各據一義と。此は『六要』を承くるなり、諸家多く此說を爲す。今謂く、專稱は觀の方便にして、觀に別するものならず、二段別義となすは、經の當意にあらず、則ち是れ宛然たる定心三昧なり、今は三經意より會し取て、稱名三昧となせしなり。本經に對照して、文に出沒あるもの、亦是れ通をもて別となすの趣向なることを知るべし。「一行三昧」とは、一行とは專一無二の大行といふこと、宗祖が『行卷』に付屬の一念を釋し、

『信卷』に成就の一念を解し、各々信行に無二といふもの、以て一心一行は是れ他力眞宗の正意なる旨を示し給ふ。專一無二とは只本願を信じ行じて其餘を顧みざるの謂なり。『證文』に「一心專念を釋し、『文意』に「敎念彌陀專復專」を釋して云々せらるゝもの亦同じ。餘を顧みざるは、本願全じて信となり、行となる故にして、信じて信功なく、行じて行功なし。『末燈鈔』に「信と行とは御ちかひをまふすなり」と云ひ、『執持鈔』に「本願や名號、名號や本願、本願や行者、行者や本願」とは、斯之謂なり。此義は第三問答に及んで、精細分明なり。文に「信心求念上盡一形」等と云ふ、他力の安心より流出する佛恩報謝の不廻向行にして、卽信心卽名號なる稱名を、觀念に相對して、以て廢立を辯ずるが、此の一行三昧なり。三昧とは入定見佛をいふ、稱名に此法德を具ふ、以て觀佛三昧に對するなり。「不觀相貌」とは、本經及び『觀念法門』所引には「不取相貌」とある、今觀をもて取に換ふるものは、次の問を發すに便せしなり。「得見彼」等とは、本經及び『觀念法門』所引には「過現未來三世諸佛」とし、彌陀と言はず、亦是れ別意を說く經文として擧ぐる故なり。

二問答解釋有三、初決觀稱難易、次決念境應否、後偏嘆西方、今初。

問曰何故止相續卽生

文に二あり、初に問、後に答なり。問の發る遠近あり、次上の般若の文に就くは、是れ近にして、彌前の開に約して示す一段の文に就くは、其遠なり。卽ち觀を正とする聖道敎義に執ずるよりして起る問難なり。問中に「直遣」と云ひ、答中に「直勸」と云ふ直の字『法華』に「正直捨方便但說無上道」といふに同じ、佛意のまゝといふことにて、出世本懷の義を顯す。『一多證文』に「直爲彌陀弘誓重」を釋して云々したまふが如し。答中、初に觀念難成を明し、後に稱名易生を示す。「乃由」と「正由」と、卽ち難易の所由を示す。無漏の聖境と、有漏の凡心と、心境不相應なるを、難成の由とす。其理觀を廢することは像觀の『疏』の如く、其事觀を廢することは、流通の『疏』の如し。稱名易生とは、只六字を稱ふるなり、是れ易しといふに非ず、往生すること行功を藉らず、之を易行といふ。下文に云く「以佛願力易得往生」と、然れば機は是れ無作にして唯願力の攝受を信じ、其恩德を仰ぐ外なし、卽名號なり、卽信心なりの稱名、是れ易行なるものなり。『擇集』に諸行を捨て念佛を取りて本願となす、其所由に勝易の二義を出し、其易を明す下に今文を引けり。彼二義は、勝は名號の圓具を顯し、易は機受の無作を示す。名號圓具の故に、行者は無作なり、受法の無作なるは、是れ名號の圓具に依る、此二は且くも相離れず。爾れば今の易を明す處に自ら勝の義を存するなり。乃ち觀難稱易は、下の專雜得失を判ずるより泝れば、要弘の廢立なること論なし。專稱と云へばとて起行の觀まで廢するに非ず、五念の起行あり、猶專稱といふ、行に助正ありて、唯稱佛名といふに同じ、之を弘願義とす、乃ち知る廢觀立稱は是れ安心の分別なることを。「正由」の由字、『行卷』に音釋あり、以周反は『廣韻』に出づ、行用の二訓は『博雅』に出づ、願力を行ずるが故に、此は徒聞に揀ぶ、願力を用るが故に、此は自力發に揀ぶ、經從の二訓は、『論語』爲政篇に「觀其所由」とある、其註に「言所經從也」といふ、從て經來る所あるが故に、此は無信の行に揀ぶなり。「相續卽生」とは、行業の易きを示す、强ちに相續せざれば生ぜずといふには非ず、後

序に云く「若有衆生稱念阿彌陀佛一聲一念等必得往生」と、一念は信心なり、此信より流出して、自然と多念に及ぶ、故に相續卽生は、是れ一念卽生にして、盡形壽の相續該攝して初一念に在り、されば一形相續は、是れ一念中の多念なり。

二決念境應否

「問曰既遣止西想亦得」

文に二あり、初に問、後に答なり。此一問答は、正く文殊般若の「見一切佛」等の文を會し、而して別願攝化の釋を起すなり。問中、「邪正相交一多雜現」とは、上の句は能觀の心に就き、下の句は所觀の境に約す。係心一佛なれば、境亦應に一佛なるべし。『觀經』に准ずるに、心境相應するは是れ正觀にして、否なるものは其邪觀なり。故に邪正相交るといふ。專ら一佛を稱するに、多佛の相現ずるは、心境不相應にあらずや、之を一多雜現といふ。答中二あり、初は理に就て問を遮し、後は文に就て專を成す。前文に「縱使」とは二字意あり、謂く、一を念じて多を見る、道理に乖かず、況や彌陀は是れ本師本佛なるが故に、彌陀を見る處、必ず諸佛を見る、『觀經』に說て云く「見無量壽佛者卽見十方無量諸佛」と。後の文は前文の伏疑を解き、而して第三問を起す。伏疑とは何ぞや、謂く、境多を妨げずば、能稱も亦多佛に就くを妨げざるべしとなり。乃ち前は通途を本とし、後は別意なり。「觀經云」とは、坐觀禮拜念佛等、すべて西方彌陀に於てす。日想觀に云く「應當專心想於西方」と、『疏』に釋して云く「直指西方簡餘九域」と。尋で八一を言ふ、此は是れ要門觀想なれども、此事弘願亦同じかるべし。『法事讚』に云く「三因五念正助四修」と。今文に復助を擧ぐといへども、意は正に在り、正は必ず助を伴ふ、故に斯の語あるなり。「如樹先」等、『大論』十八に出づ、『樂集』にも引けり。指方立相の敎義は、彌陀本願の別意にして、超世不共、實に此處に在り、淨門の學者、須子細焉。

三決偏歎西方

「問曰一切止罪也應知」

文に二あり、初に問、後に答なり。讃主已證の法門たる弘願眞宗の敎義、此處に較著たり。問答三番、初に專稱一佛を言ひ、次に面向西方を示し、後に別願の因緣を語り、以て一向西方專念彌陀の所由を明了にす。以て已前を顧るに、正依經意をもて、文殊般若は會せられて、一行三昧は、是れ彌陀本願の念佛行なる義が成ずるなり。問中三階ありて、初に諸佛同證を擧げ、次に彌陀に局らざるべきを言ひ、後に偏歎西方を詰る。則ち前二は理を立て、後一は正しく責むるなり。諸佛同證は、上の「佛々齊證形無二別」を承く、卽ち『般若』に所云「一切諸佛功德無二不思議佛法等無分別」の意なり。隨方禮念する、何ぞ必しも西方ならん、隨佛稱念する、何ぞ必しも彌陀ならん、何故ぞ偏歎西方專稱彌陀なるぞと問ふもの、乃ち第二の答より來る問にして通を執じて別を難ずるものなり。是れ『隨願經』の普廣菩薩の問、及び世俗の君子が鸞師に問ふものに同じ。『安樂集』第二大門破異見邪執の下校量十方西方の中に、三義を出す、一に境狹ければ心專なるが故に、此は『隨願經』に依る、二に淨土の初門なるが故に、此は『華嚴經』に依る、三に境次相接の故に、此は『華嚴經』及び『正法念經』に依る、三義みな

是れ一往の義、未だ別意を顯さず。同第六大門の十方淨土共來比校の中に又三義を出す、一に有緣の故に、此は『隨願經』に依る、二に法藏選擇淨土の故に、此は『大經』に依る、三に韋提選擇淨土の故に、此は『觀經』に依る、三義の中、後の二義は、正依經に依て、正く別意を明す。『御鈔』に法藏選擇韋提選擇を明すもの、此を承けたるなり。今文の前二問答は、是れ一往の義にして、彼の一問答が、正しく別意を顯し、宗要を覈論するものなり。答中二あり、初は正しく今佛の別意を明し、後は亦非の下は兼て別は通を碍へざるを示す。正明中に三あり、初は通を許して別を標す、次は正しく別意を釋す、後は偏歎を釋成す。初中「所證平等」は所問を許すなり、「若以」の下は別意を標するなり。同別といふは、『述聞』に云く、彌陀諸佛對照するに、非一非異の二途あり、如何が非異なる、謂く一切如來同じく法身を證して彼此別なきが故に、如何が非一なる、謂く不二門より出でゝ衆生に應ずるとき、二力道分る、自力を以てするを總じて諸佛とし、其他力なるを彌陀となすが故に、非異の處より非一に出でゝ、主となり伴となりて其機に赴き、化して終に非異の處に歸せしむ、是れ佛法の大體なりと。公論と謂つべし。然るに此處は三身同證を許す、故に叡公の說は直に此處に合せず。今謂く、此是れ與奪の釋なり、同じく三身を證す、故に彼此別なし、是れ與門の義なり、彌陀は二利不二なれば、諸佛隨分の利他に同じからず其奪門の義なり。されば果同の邊より一往與へて平等と談ずといへども、因別をも論ずれば、因に異なる果なきが故に、果も亦別を成ずるは理の當然なり、既に爾らば、上に「三身同證悲智果圓」と云ひ、今「所證平等」といふは、諸佛彌陀共に三身を證し悲智並具する同じく佛果なるをいふ事にて、三身に勝劣あり、悲智に分滿あり、證果に左右あるは遮せぬなり。「因緣」とは、猶所以と云ふが如し、『論註』に「有何因緣」といふに同じ。正釋の中、初に願力の攝化を明し、後に但使の下は衆生の得生を示す、「本發」等は是れ願にして、「光明名號」は其力、願力が衆生を攝す、衆生何をか爲さん、但彼に一任せんのみ、之を「但使」といふ。既に願力に任せり、何ぞ稱名の久近に執ぜん、一聲多聲、但大悲を仰ぐ信相續相のみ、之を「上盡」等といふ。されば往生は願力の所使なり、易行ならずして何ぞや、釋迦諸佛の偏勸する所以なり。別願の深致、眞宗の極要、此に至りて究極し、復餘蘊なし。『行卷』に『經疏』に先んじて今文を引くの意、亦此に在るなり。「然」とは簡別の辭、謂く所證平等なれば、何れの佛を念ずるも可なるべきなれども、諸佛に深重の誓願なし彌陀に獨り之ありと なり。「本發深重誓願」とは、上には「本弘誓願」と云ひ、後には「本誓重願」と云ふ、卽ち第十八願を言ふ。四十八願を攝して一の第十八と見るが、讃主の釋格なるが故に、『玄義分』の如し。「以光明名號」等とは、此の處十二・十三・十七・十八・十一の五願、又十七八の二願と見ることならぬにはあらねども、五願六法は、宗祖の開示にして、讃主の釋義は、四十八願是れ一の第十八願とするなれば、光號は是れ第十八願の法義なり。之を經に求れば、重誓偈に「神力演大光乃至天光隱不現」と云ふは、是れ光明攝化にして「爲衆開法藏乃至說法獅子吼」と云ふは、其の名號攝化なり、而して之を卷き收むれば、前の「名聲超十方究竟靡所聞」の名聲に歸す。光明攝取は是れ名下の義にして、破闇滿願の義を名にしたるが名號なれば、名義並擧げて、光號攝化といふ、此は是れ光號相卽の義にして、『論註』讃嘆門の釋意なり。若し

夫れ『行卷』の兩重因緣釋『文類聚鈔』の序述は、且く化益を分てり、亦是れ一義、今と相妨げざるなり。而して光明に調育と攝取とあり、名號に所聞と信體と相發とありて、所談別なりと雖も、光號其一を擧ぐれば、該攝せざるなし。「攝化十方」、其義可知。「但使信心」等、本願の信行を擧ぐ、上は是法にして、下は其機、機受の要は、唯信心にあり、久近一多の稱名は、是れ其相續なり。唯信正因、誰か復疑議すべき。思ふに、南天先に唱へて念我と云ひ、爾後奕々相承けて、遂に吉水に至り、信疑以て迷悟を判じ、宗祖は四法を開示して、信證直接の旨を明にす。眞宗の要、正に斯一著子に在るなり。古人の多くは、但使の字を解して、願力を能使とせり。今謂く、爾らば能使但信とあるべし、故に不可なり。たとひ强て今文は願力が信心求念せしむといふべきも、次の「但使專念作」の文は如何が解すべきか。祖點に依るに、但信心をして願求せしめば、それのみにて聲の多少を問はず、みな願力が攝して往生せしむといふ意なり。『定善義』住立の釋文も亦同樣に解すべし。「信心」とは、上の眞實信心の深心、若少一心の一心にして、即ち三心即一の利他の信樂なり。「求念」とは、往生を願求するをいふ、『玄義分』の定散料簡門には、「一心信樂求願往生」と云ひ、『定善義』華坐觀釋には、「但使回心正念願生我國」と云ひ、『散善義』の至誠心釋には、「所施爲趣求」と云ふ、即ち本願の欲生成就の願生にして信心の義別なり。「上盡一形」等とは、本願の乃至十念にして、決定心中の相續相なり。上盡下至とは、各人の信後の稱名なり、信後の生涯に長短あり、聲の多少隨つて亦同からず、信後の壽命、短き間の相續、十聲一聲の少きに望めて、長命の機の聲多きものを、上盡一形といふ。爾れば時の久近聲の多少は、多人上の判にして、十聲は下々品、一聲は下上品、等は一聲にも及ばざる下中品聞已即滅の機にして、並に是れ臨終遇法なれば、上盡一形は、時節の久近なり、下至一聲は稱名の遍數なり。上下異物ならば、乃至の言に違す、如何、謂く、互相顯義なり、上盡一形は、延の時節を擧けて、其處に在る多念の稱名を顯し、下至一聲は、少の遍數を出して、其法の存する時節の近を顯す。時節に約するは、『小經』の如く、遍數に約するは、『觀經』の如し。乃至十念の言、二義並び存す、故に斯釋あるなり。此の修時の久近、修行の多少、彼此別ありて、同じく往生をうるものは、佛願力の故なれば、機は只願力に乘ずるのみ。信に信功なく、行に行力なし、信や行や、即是願力なり。爾れば法に就かば願力、機に約せば信心、易得往生、亦宜ならずや。「由稱名易故即得往生」の旨、此に於て成立す。「以佛願力易得往生」とは、本願の「若不生者不取正覺」の意にして、前には攝化と云ひ、今は得生といふ、衆生は唯願力の攝化を仰信して、生涯相續慶喜す、如來は即ち願力をもて攝して往生を得せしむ、機法一體の別異、豈揭焉ならずや。釋成の中、「是故」とは別願の因緣を承くる。釋迦諸佛並擧けたるものは上に向ふては廢觀立稱は是れ究竟の敎義なることを成じ、下に向ふては、三隨順の本を張るなり。「別異」とは、語は『隨願經』に採る、意は佛一代敎中に絕例出格なるの義を示す。所云通途の性相にいまだ其例なき言語道斷の不思議なるものなり。此に於て『文殊般若』の一行三昧をもて、彌陀念佛となすの義が、釋成せらるゝなり。別不礙通の文、此は第三問中に「隨方禮念課稱一佛亦應得生」と云ふに答ふるなり。乃ち何れの佛名を稱ふるも、除障滅罪の益あるべしとなり。意謂く、隨つて一佛名を禮稱せんに、隨分の益なきにあらず、唯是れ除

障滅罪にして、往生にはあらず。「亦應得生」と云ふは謬解なり、往生の益あるものは、獨り本願ある彌陀のみ。『十住論』中、諸佛彌陀、同じく是れ易行法ありと說くといへども、其易行の本願あり、其土に往生せしむといふものは、只彌陀章のみ、是れ眞假の分かるゝ所以にして、鸞師の指示する所なり。乃ち「乘佛願力便得往生」の談、善く『易行品』意を道破し、萬世に高範を垂るゝものと謂ふべし。今亦同意にして、諸佛の稱名益なし易に非ずといふには非ずと、通を碍へざるをいふ。其の處に易は則ちなりと雖も、本願ありて往生せしむる彌陀の稱名易行とは同じからずといふ。されば聖道に執ず易るものゝ迷情を破するものなり。

從來開に約しては安心行業、合に約しては一行三昧、衆生の受行を示すこと、上に訖る。

二決專雜得失、中二、一正判得失、二結勸專修、正判中二、一正依教理判、二更擧見聞決、教判中二、一判專修得、二決雜修失、今初。

「若能如上止順佛語故」

從前所明の心行業の三門は、眞假に通ぜし故に、此處に得失を判じて、捨雜歸專せしむるなり。中に於て、初に擧人立得、後に「何以故」の下は、辨其所由。初中、先擧專修人。「如上」とは、『往生要集』第十大門中往生階位の下に、今文を引いて、子註して云く、「言如上者指禮讚等五念門至誠等三心長時等四修也」と、『六要』は依之。『甄解』は言ふ、文は要集の指すが如し、義は上の上盡一形等の文を指すと。或人は言ふ、次上を承く、其已前は帶方便の故に、と。或人は云ふ、遠近二ながら承く、開は眞假に通ずと雖も、合は其眞に局る、次上を以て其前を取る、何すれぞ取捨せん、と。今謂く、前序廣明の文、通じて五段落とす、應知の言を安じて之を知らしむ。中に於て、安心起行作業の三段の所明は、第四段に入て覈論せらる、則ち第四段に論定せるものは、是れ上三段所明の法義、所云本弘誓願の信行なり、而して第五段に於ては、次上に論定せられたる前三段の宗要たる弘願意を得たるものを專修とし、得あり歸すべし、前三段に於ける失意の行者を雜修とし、失あり捨つべし、と示すなり、然れば遠近二承、何れをか捨んや。雜修とは、正雜の別を知らざるものをいふ、本願の稱名に隨屬する起行作業は敢へて遮する所ならず、第四段の二三問答に觀禮念等と云ふが如し、されば安心は是れ決定の正因にして、起行作業は其相續報恩の務なり、斯安心より流發する行業を如上念々といふ。「念々」は無餘修相續」は無間修、「擧命爲期」は長時修、此中自ら恭敬修を含む、卽ち作業を擧げて、意は安心起行を合するなり。「十卽」等とは、本願の所云「若不生者」の意、上の「易得往生」に應じ、下の「千中無一」に揀ぶ。定生の所由を辨ずる下、「何以故」と徵し、「無外緣」の下は釋す。中に四得を擧げたり。其一は他の雜緣に障へらるゝことなく信心を得ることいふこと。「外雜緣」とは、二河譬に所云「解行不同邪雜人、異學異見別解別行人」にして、雜行雜修者なり。それらが種々の見解を說いて弘願專修の行者を誑惑せんとす、然るに毫も之に動亂せらるゝことなく、愈以て堅固不動なるを深心の行者となす。「正念」は信心をいふ、二河譬に所云「一心正念」とは同じからず、彼は是れ行なるが故に、『定善義』地觀の釋に「修因正念」と云ひ、『散善義』流通の釋に「正念歸依」といふ、今は彼に同じ。『和讚』に「一念無疑なるをこそ正念をう

こはさだめたり」こ云ひ、『末燈鈔』に「正念こいふは本弘誓願の信樂さだまるをいふなり」こは、今の意なり。此は次上の「信心求念」なり。其二、「本願相應」は、次上の「深重誓願」なり。其三、「不違教」は、次上の釋迦の偏歎なり。其四、「順佛教」は、次上の諸佛の專勸なり。二河譬に「西岸上有人喚言汝一心正念直來」等こ、今かの喚聲に應ず、故に正念を得るなり。行くこと一分二分するに、東岸群賊等喚還すに、その喚聲を聞くこ雖も、亦回顧せず、一心に直に進んで道を念じて行くは、無外緣得正念の相なり。東岸の勸聲、使尋道去」に、今其教に順ずる、故に不違教なり、既に二尊の意に順ず、證誠の佛語こ自ら相應を得る、これ順佛教なり、此後の三得は、次の如く、大觀小の三經に相應することにて、彌陀の招換、釋迦の發遣、諸佛の證誠を深信するの相、卽ち『散善義』深心釋の唯信佛語なり、其佛語を信ずるの信が、初の「得正念」なれば、利他の信樂こいふなり。深心釋中、就人立信に、釋迦諸佛を出すは、是れ今の佛教佛語なり、就行立信に、本願を擧ぐるは、卽ち今の本願なり、所就の人法に對する能立の深信は、是れ今の得正念なり、能所相應、それ見るべし。『和讃』に「利他の信樂うるひこは願に相應する」等こいふは、得正念を主こして、本願相應を語り、此本願相應の處に、二尊に順ずること を明す。又云く「本願相應せざるゆへ正念うすこはのべたまへ」こ、此雜修の失に反して、專修の得を顯す。乃ち專雜の得失は、佛願に順ずるこ否こに結歸するなり。又云く「一心をえざるひこなれば佛恩報ずるおもひなし」こいふは、雜修十三失ある中、第一に「失正念」こ、第十の「不相續念報佛恩」の二をもて、餘を統ぶるにて、反して知る、專修は一心の安心こ念報佛恩の起行こによりて、次上の信心求念こ久近の稱名こなり、極めて言へば正念の一に結歸するなり。されば法よりせば本願に應ずるや否や、機よりせば正念を得るや否やによりて、得失は定まるものにして、餘は此内より開出するなり。

二決雜修失

若欲捨專止正行故

此中亦二つ、初に擧人立失、後に「何以故」の下は、辨其所由。初中、「專」こは正助二行を修するをいふ、正助二行なりこいへども卽ち唯稱佛名こいはるべきものなり。「雜業」こは定散諸善を謂ふ。たこひ正行を修すこいへども、不得意のものは此中に落在す、宗祖の所云助正並行の雜修なるもの是なり。義は則ち然りこ雖も、今文の當意は、專雜修は卽ち正雜行にして、所修に約して正雜行こ云ひ、能修に約して專雜修こ云ふ、要弘二門是なり、『擇集』二行章の後の私釋の如し。「百時」等こは、一二三五は化土生を謂ふ。彼の業は成じ難し、故に希得こいふ。若し報土に望めば、千中無一なり。後中「何以故」の三字は、是れ徵起にして、「乃由」の下は其正釋。釋するに十三失を擧ぐ、初四は上の四得に反し、更に九失を數ふ。十三の失を上の四修に照すに、初四失は、無餘修を缺ぐ、次の係念等の五失は、無間修を缺ぐ、後の不相續等の四失は、恭敬修を缺ぐ、長時修は三修に通ず、前文に明すが如し。應に知るべし、是れ四修の反なるを。前四は知るべし。次の五の中、初起の後に至らざるを「係念不相續」こし、後起の間斷するを「憶想間斷」こす。「回願」は回向發願の略語、「貪嗔」は是れ五鈍使にして、「諸見」は其五利使なり。「懺悔三品」、要は『日沒禮』の終りの「南無懺悔」等の十句是なり、略は『中夜禮』の終りの

「自從無始」等の八句是なり、廣は『日中禮』の終り「敬白十方」等の發露懺悔の文是なり。後中、正定業の法體を知らぬものは、稱名すれども相續と云はれぬ、報恩にあらず、故に「不相續」と云ひ「不念報」と云ふ、所修の善を負み、自高の心あり。法を崇ばず、名利の心增長す、故に「心生」等といふ。自ら高しとして善知識に親近せず、故に「人我」等といふ。「心生憍憍」と「人我自覆」との別は、何ぞや、曰く、前は輕他を謂ひ、後は自高を謂ふ。或は云ふ、前は法執に約し、後は人執に約すと。定散諸行の人に近づき、正行の知識を蔑如し、自障々他す、故に「樂近」等といふ。後の九失に反して、專修の人に更に九得あるを知る。十三失は初の四失が根本となる、其は專修に反して知らるゝ。初の四失も、極めて言へば、初の失正念を本とす、前に云ふが如し。外緣の來り動すが雜緣亂動で、我より他に近くが近雜緣なり。初は心に約して失正念と云ひ、終りは行に約して障往生正行と云ふ、心行且く別なるも、要は信心にあり。故に第一より開して第一に歸する。されば專雜の得失は、但使信心の有無に歸着する、正念なれば必生なり、正念なければ不生なり、隨つて幾多の得失を生起するものなり。前に『和讃』を引いて辯ずるが如し。『化卷』の中前九失は要門下に引き、後四失は眞門下に出す。思ふに、其實は互に通ず、されば互に略して互具することを顯すものなり。爾り相通ずと雖も、便利ありて二處に分引するなり。便利とは何ぞや、謂く、要門下に在りては、今文の次に『日沒禮』の後文を引き「眞心徹到卽與」「上同」と云ひ、以て得失廢立するの便あり、故に第九失に止めたるものなり、眞門下に在りては「眞知專修而雜心者不獲大慶喜心」と云ふ自釋の次に今文を引く、乃ち眞門行者の過失の最も顯著なるものは、大慶喜心なく知恩報德心なきに在り、故に第十失より引くを便とするなり。

夫れ終南の方便となすものは、要門にして乃ち盡きぬ、宗祖の所云眞門方便は、義として要門中に收めらる、故に雜修十三失は自力行者として攝せざるものなし、引用の意亦了知すべし。

### 二更擧見聞決

「何以故余止如前已辯」

上は敎理に就て決判し、今は見聞を擧げて廢立するなり。此中三あり、初に徵起し、次に「余比日」より下は正明し、後に二行得失より下は結指するなり。初は「何以故」に專雜の得失を判ずるぞと徵問するなり、此は親しく見聞する所にして爭ふべからざるなりと證し、以て專雜二修、得失大に異なりと斷ず、尙仔細なることは、前の四得十三失の如しと示すなり。「專意作」とは、信心稱名をいふ、卽ち專心專念の如實行者なり。「修雜不至心」とは、宗祖云く「一心をえざるひとなれば佛恩報ずるおもひなし」と、一心をえざるは卽ち不至心なり、修雜卽ち不至心なり。「千中無一」とは、鎭西解して云々、『決疑鈔』の如し、彼は專雜二類が一報土に生ずるを許す、西山解して云々、『私集鈔』の如し、彼は一類生にして、鎭西義を破せり。眞宗義を言はゝ、此に二說あり、一に曰く一二三五は化土に據て開く、千中無一は報土に就て遮すと、一に曰く雜行不生、前後意一、唯言に緩急あるのみと、今謂く、二說ある中、前義を是とす、『要集』報化二土の判に順ずるが故に。

### 二結勸專修

「仰願一切止快哉應知」

上來安心行業を示し、專雜得失を決し、一宗の教義、分明に顯し了る、是に於て、專修正行を結勸するなり。此中三あり、一には先願善思量、二には「今身願生」の下は、正勸進勸修、三には「上在一形」の下は、結嘆所得益。初中自謙して心願を申ぶる、故に「仰願」といふ。「一切往生人」等とは、願生行者をいふ。等は未來を等す。「善思」等とは、己分を了知して、難成の雜をすてゝ、易生の專修に入れよといふなり。次中、「今身」等とは、順次の生を期することを顯す。「願生彼國」は安心にして、「行住坐臥」等は起行作業なり。「勵心尅己」、或が云ふ、尅勵といふは、他力眞宗にはなし、必らず是れ自力行者の執情をいふ、他力行中に少れに之を言ふものは、是れ誘引の意なりと。今謂く、安心に之を言ふことは、他力眞宗に於て斷じ無之ことなれども、行儀門に於ては亦之れ有り、『口傳鈔』に「一念にたりぬとしりて多念をはげむべしといふこと」と云ひ、『報恩講式』に「憶念稱名有精」といふ、精の字、精進精勤をいふ、勵むの意なり、『蓮如上人御一代聞書』に「心にまかせずして心をせめよ」と云ふ、心をせむるとは、己に克つことなり、法如宗主の法語に「信は佛智の大悲に縋り報謝は行者の厚念を勵むべし」と、見るべし。或は云ふ、今文を『信卷』に引き、今讃後述の「何不勵竟去也」の文を『行卷』に引くが如きは、誘引の爲なり、或は揀別の爲なりと。揀別とは如何して知り得るにや、誘引とは尅勵に執ずる自力行者を誘引するの謂乎、已に情執の言を用ゆ、何をもてその執情を破するを得るや、如此の說明は、通暢せざるなり。若し夫れ本如宗主の教語に、弘願の稱名に、はげめといふことなしとあるは、此は一類不得意のものを誡めたまふ教示なり、以て一切を斷ずるは不可なり。されども、已に誤謬を生ずることありとせば、末學の注意すべきは勿論なり。但今文を方便語とするは過たり。後中、「上在」等とは、『大經』の「雖一世勤苦止快樂無極」の意なり、『要集』第二門增進佛道の下に「一世勤修是須臾間何不棄衆事求淨土哉願諸行者努力匪懈」といふ亦同意なり。「前念」等とは、上の今身等を承け、外に向ては別時意の僻解を遮し、內に在ては淨土頓教の別意を顯す。宗祖は轉じて平生業成の義を成す、『御鈔』の如し。覺祖は大小二命終を分つ、『最要鈔』の如し、今は是れ其大命終なり。「長時」等とは、且く廣門に約す、廣略は相入なれば、何れに就て談ずるも可なり、決して廣は淺し略は深しの看をなすべからず。「何豈非快哉」の言、何ぞ痛切なるや、甚深の勸進、豈に看過すべけんや。

前來略して前序を講し訖る。

二正說禮讃

三結示勸進

右の二段は今は解さぬ。

佛祖冥加の下に魔事なく滿講となりぬ、感恩尤も深く慶喜何ぞ堪ん。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

（明治四十五年七月）

# 四　執持鈔講話

## 序講

此より講話せんとする、『執持鈔』といふ御聖教は、本願寺第三世覺如上人の御撰述なされたもので、一點がき五章より成れるもの。五章の中で前の四章は、宗祖聖人の御言で、後の一章は覺如上人自身の御言である。

宗祖聖人の御己證は、御自筆の幾多の御聖教に示しつくされて、復のこるところはないが、尙御前に接近せし同行に對して、平易く要を撮て、仰せ聞されたる法義の談片は、晩年に昵近あそばされし、本願寺第二世の如信上人が、左右に侍りて聞き得てありしまゝを、覺如上人に傳へられて、覺如上人が聞くに任せて筆に上された、筆錄も數多くある。それらに照して此『執持鈔』を伺ふと、三代傳持の法門の肝要は、僅少な此五章より成る『執持鈔』の中に蘊在してある。されば他力眞宗の要義を了得せんとするものは、文字の力あらば自らも讀むべし、文字が讀めぬものは人に聞くべし、數々讀み又懇ろに聞きなば、宗祖御己證の眞宗、他力廻向の信心は、必ずや決得せらるゝであらう。

此鈔は今抄の奥書、及び『慕歸繪詞』十に出づるやうに、後醍醐天皇の御宇、嘉暦元年に飛驒の願智坊永承といふものゝ請によりて撰述せられたもので、上人の御年は五十又七である。（茲今大正二

年より五百八十七年の前である)。後に曆應三年に、顯智坊が供奉して上京せしにより、再たび寫して留めおかされしといふ。初に脫稿した時の奧書には、

九月五日老眼で禿筆を染む、是れ偏へに衆生を利益せんが爲なり。

とあり。後に再び寫させられし時の奧書には

燈下に於て老筆を馳せて之を留む、利益せんが爲なり。

とある。嗚呼孤燈の下に老眼を拭ふて、自ら筆を呵せらるゝこと、其勞苦如何ぞや。唯衆生を利益して、佛恩を報謝せんとの一念ありて、斯勞苦を忘れたまふたのであらう。

斯して遺されたる、慈悲心の血塊ともいふべき、御聖敎を拜讀する吾人遺弟は、輕々に看過しては不可である。須く敬虔の心を捧げて眞摯に拜讀し謹聽せねばならぬ。

覺如上人の御時代は、淨土宗の諸流の幾多の大家が輩出して弘通の功著く、法華宗は新興の勢をもつて、盛んに念佛無間を唱ふ。一は宗義を壞す憂少きも、破顯の鋒先勢ひ鋭く、一は論鋒やゝ緩漫なれども、往生の要義頗る濫れ易し、宗祖聖人が草鞋竹杖、東西に奔走したまひ、寒暑に堪へ迫害と戰ふて、辛苦の間に開闢せられし淨土眞宗は、幾んど世に墜んとするの運命であつた。斯る時に當りて、回天の手を揮ふて、吉水相承の要義を顯揚し、彼の諸宗に對抗して、弘通大に功を奏したのが覺如上人傳持の偉勳であります。御著述なされたものに十二部ある中に、今鈔の如きは、眞宗の要義たる平生業成の旨を明して、以て濫れ易き淨土門内の、諸流に揀んだものである。上人の弟子乘專の作られた『敬重繪詞』七に、『口傳鈔』『改邪鈔』『執持鈔』『願々鈔』『最要鈔』『本願鈔』の六部の事を擧けて、次に此の『執持鈔』の文を引き、終りに

平生業成の玄旨、他力往生の深要たうとむべし

と結んである。されば今鈔一部は平生業成、他力往生の宗義が示されてあります。

抑々、平生業成の事は、その義は勿論宗祖聖人の上に於て示されてある、聞信一念に卽得往生すと明さるゝが卽ち其れであります、義は飽まで之あれども、之に平生業成の名目を立てられしは、實に覺如上人に始まるのであります。而して今鈔の五章は、實に斯の平生業成の玄旨を示さるゝのである。五章の中、第一章は、これ不來迎の談で、此が正しく平生業成の玄旨で卽ち『末燈鈔』の初に載せたる、祖言を引いて

眞實信心の行人は、攝取不捨のゆゑに、正定聚に住す、正定聚に住するがゆゑにかならず滅度にいたるゝがゆゑに臨終まつことなし來迎たのむことなし

とある。是れが平生業成の義であります。斯の平生業成の義に就ての要義は、不來迎なるゆゑ、不來迎の義を以て、平生業成の相を示さる。第二章は、平生業成の他力信心の相た。第三章は、平生業成の信心決定に就ては善惡の性得を毫も簡ぶことなき旨を示され。第四章は、是れ偏へに光明名號の因緣にて、凡夫自力の所作でなきことを示さる。これまでは宗祖聖人の御言を引かせらるゝので、後の一章卽ち第五の覺如上人の御言は、前四章の義旨を總括りして釋成せらるゝので、肝要は

唯平生業成の旨を明させらるゝにあります。故に

我すでに本願の名號を持念す、往生の業すでに成辨することをよろこぶべし

と云ひ。又

平生の一念によりて往生の得否はさだまるものなり

と仰せられ、終りに殺生罪を造るもの、平生の時に墮獄の業事が成辨す、臨終に更に造るに非ざる例を擧げて、後に云く

本願を信じ、名號をとなふる時分にあたりて、かならず往生はさだまるなり

と結成してある。されば今鈔一部五章に明さるゝところ、平生業成といふ宗義を示さるゝにあることが分明に知らるゝことであります。

題目の『執持鈔』といふは、執持とは、『阿彌陀經』に「執持名號」とあり、宗祖聖人の『御本典』には

執の言は心堅牢にして、移轉せざることを彰し、持の言は不散不失に名くる

とあり、『略文類』にも同じやうな釋をなしたまひて、後に

執持は卽ち一心なり、一心は卽ち信心なり

とのたまひ、『高僧和讃』には

恭敬の心に執持して、彌陀の名號稱すべし

とのべられてある。されば執とは、堅く執つて移轉せぬこと、持とは一たび我身に執りたまゝ、永く我身より散失せぬこと、煩惱罪濁の凡夫身中に、本願成就の御佛の法德が、聞く一念に受け取られて、確實に我有となり、妄念や罪惡の水火は、いかに盛りに起るとも、西岸に徹貫る本願の白道が、破壞れず亡失せぬが、執持された相であります。その執持の相を五章に涉りて示さるゝが今鈔である。

鈔とは、宗祖聖人の『唯信鈔文意』に

鈔はすぐれたることをぬきいだし、あつむることばなり

とありて、その類文をぬき出だすことである。今は、如來の法を、衆生に受持して、永く散失ふことなき、その方法を示されたるものを、ぬきあつむる書物ぞといふことを示さるゝが、鈔の字であります。

されば造惡不善の凡夫の吾人が、容易く如來の大法を領受して、確實に出離解脫の大願望を成就するその妙方法を示さるゝが、此の『執持鈔』である。なんとありがたきことではありませぬか。

出離の問題に解決を急ぎ、後生の大事に苦しまるゝ同朋諸君は、實に是れ覺如上人が今鈔を撰述せらるゝ華客である、必ず再三再四熟讀せられよ、幾度もうむことなく、有緣の知識に聽聞せられよ、願力むなしからず、必定して大安心の地に住せられん。されば、平生業成の敎化、必ず自身に了得せられん、僅かに五章より成れる一小册子、此の中に無限の妙寶を藏せん、而して唯善男女の執るに任さん哉。南無阿彌陀佛〳〵〳〵

## 第一章

今より本文に入りて講話いたしませう。先づ御文を擧ぐれば、

一本願寺聖人仰云

來迎は諸行往生にあり、自力の行者なるがゆゑに、臨終まつこと、來迎たのむこゝは、諸行往生のひとにいふべし、眞實信心の行人は、攝取不捨のゆゑに正定聚に住す、正定聚に住するゆゑに、かならず滅度にいたる、かるがゆゑに臨終まつこゝなし、來迎たのむこゝなし、これすなはち第十八の願のこゝろなり、臨終をまち來迎をたのむこゝは、諸行往生をちかひます第十九の願のこゝろなり。

これが第一章で、都合五章ある中の首章であります。これは從覺上人が、宗祖聖人の滅後七十二年に編輯められた『末燈鈔』の中に載せられたる御言で、『末燈鈔』の最初に出てある。その終りに

建長三歳辛亥閏九月二十日　愚禿親鸞七十九歳

と、尊諱と高齢に年月日まで、御丁寧に自書せられてある。今はその御言の要めを撮つて示させらるゝ。それで、初めに

本願寺聖人仰云　と標示せられた、宗祖聖人の親言で、覺如の私言でない、有緣の道俗は、必ず難有く心得て信奉せよとの尊意であります。

さて此の一章は、この『執持鈔』の所詮たる平生業成の宗義を顯示せらるゝにつき、先づその大體を定められるので、卽ちその平生業成の宗義を、宗祖聖人の不來迎と仰せられたるによつて、定めさせらるゝのである。それで、この不來迎といふ祖言を、最初に擧げさせらるゝのであります。

この意は、すでに『口傳鈔』にも出てをります。『口傳鈔』は、如信上人が、宗祖聖人より聽かれたお言葉を、覺如上人に傳へられ、覺如上人が聞かれたるまゝを、上筆されたるものである。中に

體失不體失の往生の事

といふ一章あり。我宗祖聖人が師源空聖人の在世に、善惠房證空上人と、往生に就ての諍論の次第を叙べたもので、善惠房は、この有漏の穢體を亡失するとき往生すると主張され、我宗祖は、惑業の穢身このまゝで往生すと言明されたので、換言すれば、一は往生は臨終ならでは得られぬと言ひ、一は臨終をまたず平生に於て定まるといふ、宗要の諍論である。これを師の聖人に提出して、決判を仰ぎたりしに、師の聖人の仰せに、

善惠房の體失して往生するよしのぶるは、諸行往生の機なればなり、善信房の體失せずして往生するよしまうさるゝは、念佛往生の機なればなり、如來の教法元無二なれば、わが根機にまかせて領解する條、宿善の厚薄によるなり、念佛往生は佛の本願なり、諸行往生は本願にあらず。念佛往生には、臨終の善惡を沙汰せず、至心信樂の歸命の一心、他力よりさだまるとき、卽得往生往不退轉の道理を善知識にあうて、聞持する平生のきざみに治定するあひだ、この穢體亡失せずといへども、業事成辨すれば、體失せずして往生すとはいはるゝ歟、本願の文あきらかなり、かれをみるべし。諸行往生の機は臨終を期し來迎をまちえずしては胎生邊地までもむまるべからず、このゆゑに穢體亡失するときならでは、その期するところなきによりて、そのむねをのぶる歟、第十九願にみ

へたり。

と、この穢體を捨てぬまゝで往生するといふが、本願成就の文に說かせられた乃至一念卽得往生の意義で、これを穢體を亡失する臨終ならでは、往生せられぬといふものに簡ぶから、臨終まつことなし來迎たのむことなし」といふ不來迎の言が出たのである。この穢體亡失せずして往生すといふ不體失往生の意を、不來迎と示されたる御言を本として、平生業成の言を立てられたが、この『執持鈔』である。されば、不來迎平生業成の敎示は、實に宗祖聖人、如信上人、覺如上人、三代傳持の法門であることが明かに知らるゝ。

抑、生死の迷を離れて、無碍の極果に遊ばんとするに、概そ二條の道がありて、一を聖道門とし、一を往生淨土門とす。聖道門は、諸佛の敎道で、淨土門が彌陀の攝化である。聖道門は、此三界に在つて大事を成就するのであるから、繫縛の因たる煩惱を斷じ罪惡を滅し極果に上るべき無漏智を開き、出世善を修めるので、すべての事自ら作し自ら得るので、これは上根上智の人にして、初めて堪能なりとしたものである。然しながら、その理ではあるが、古來これで成就したものあることを說いてない。淨土門は、彼れ聖道門と、敎格が大に異なりて、無碍の大悟は、別に設けられたる本佛の淨土に往生した上のことで、此土に在る間は、依然たる凡夫で、少しも舊觀を改めず、今生は凡夫で、淨土で聖者となる宗義なのである。これは下根の凡夫を本として、救濟すべく設けられたもので、源空聖人は、二門の別を大別して

聖道門は智慧をみがいて生死をはなる、淨土門は愚痴にかへりて淨土にむまると言はれた。一は智惠の開發された時に生死が離れられ、一は愚痴を改めずして能く淨土に生れて悟らるゝからである。彼は難行で、凡夫は不能、此は易行で、凡夫の堪能なることも、此れでよく分かることぢや。

而して、この淨土門の中に、自ら亦二途ありて、誓願に就て言さば、第十八の願は、念佛往生とも、選擇本願とも名けて、彌陀佛力が、衆生を攝取し、衆生は唯佛力を信じて往生する、他力の至極で、之を阿彌陀如來の本意とし、往生淨土の眞實とする。第十九の願は、諸行往生とも、來迎引接とも名けて、猶罪福を信じて、自の行力を恃み、攝取の願力に全托することの能きぬ未熟の機を誘引するので、之を如來の方便とし、淨土の假門といふのである。聖人が、

淨土宗のなかに眞あり假あり、眞といふは、選擇本願なり、假といふは、定散二善なり、選擇本願は、淨土眞宗なり、定散二善は、方便假門なり。（『末燈鈔』に出づ）

と仰せられたは、卽ち斯の謂である。喩へば、御眞影に拜禮せんとて、田舍より京都に上らんに、數百里の間に、長亭短驛、山あり川あり、此を通り彼を過ぐ、夜に日に、事容易ならざるべきに、甲は、始終徒步にて毫も他の力を假らず、具さに辛苦を盡して、獨力で京都に着いた。乙は、自轉車に乘りて、些の油斷なく、漸く足力を續けて、上京した。丙は、汽車に乘りて、毫も身勞せずして、專ら機關に托し、機關の運轉によりて、容易に到着した。斯樣に三類ある中で、甲は、乙丙に望むれば、全然自力で、乙丙は他力

である、乙と丙と相望めると、乙は猶これ他力中の自力で、丙こそ純然たる他力である。自轉車に乗ずるは、名の示すがように、自の足力で轉ずるのであるから、車は乗せて運ぶものなるも、足力が強く巧に差排せぬときは、身を他處に移すことは、不可能である。汽車に乗るものは然でない。體力の强弱を云はず、技術の巧拙を選ばず、老若男女、一たび列車に搭ずれば、睡眠する、飲食する、そのまゝ、眺望する、讀書する、そのなり、乘客に勞なし、全然機關車に運ばるゝので、無作に容易に京都に上るので、これが他力である。聖道門の願行は、甲の如く、淨土門に比して、純然たる自力趣入なることが分かる。淨土門は、彼れ聖道門に望むれば、彌陀願力に乘ずるので、これ他力なれども、中に亦眞實と方便との別がありて、諸行往生は猶是れ自力で、聖道の氣執の未だ全く淨盡せぬ、如來の願力も、行者の善力だけ相加はるように心得て、堅く自力を恃むは宛も自轉車の車の速力は、自の足力に應ずるものと一般である。定散自力とも云はれ、他力中の自力とも云はるゝのも、宜哉で、それで淨土の假門と名けられた。選擇本願は、念佛往生で、若不生者不取正覺の誓願成就ゆゑ、如來正覺の舉體が、吾人凡夫の往生で、願行成就の名號が、全體吾人凡夫の所有となりて、決定して淨土に往生せしめたまふ。されば吾人凡夫は、專ら誓願力を信み、唯名號の威德を仰いで、毫も自の善惡を顧みず、偏へに其の攝取に安堵するのである。この往生決定の心が、內外に障へられず、能く臨終に微くて、應分の止惡作善も、微塵ばかりも主因に擬はず、善事惡緣、皆これ佛恩を念じ、多幸を慶ぶ念佛相續の媒介たらざることはない、これを一向專念の行者と云ふ、淨土眞宗とは、正に斯の謂である。

上來の說示で、本文の意義は、已に了解せらるゝことであらうで、本文に就ては、略して說明しおかん。

初に、來迎の方を辨ぜらるゝに、先づ標けて、「來迎は諸行往生にあり　このたまひ、次に其理由を示して、「自力の行者なるがゆゑに」と云ひ、後に結成して、「臨終まつこと、來迎たのむことは、諸行往生のひとにいふべし」と仰せられた。自の行力にて往生せんと期するものは、平生は善惡相交はり、一進一退で、業事が成就せぬ、それで臨終を期することゝなる。臨終に正念に住して、佛菩薩の來迎し引接せらるゝによりて、方に安心して往生すると信ずるのである。

後に不來迎の方を辯ぜらるゝに、初に不來迎の義理を示されて「眞實信心の行人は、攝取不捨のゆゑに正定聚に住す、正定聚に住するがゆゑにかならず滅度にいたる」と云ひ、後にそれを結成して「かるがゆゑに臨終まつことなし、來迎たのむことなし」と仰せられた。自身の善惡を顧みず、如來の攝取を信むものは、信む一念の端的に、如來の光明中に攝められ、往生治定して、正定聚の位に住する、すでに正定聚の位に住すれば、必定して淨土に入り滅度を證るので、復臨終の善惡を憂へ來迎の有無を問ふの要は無ひ。

畢竟、行者の善力によりて、往生するのなれば、臨終に至らざれば決定せず、故に來迎を得て安心せんと期するので、臨終業成となる。往生は偏へに佛力による、行者の善惡に關はらずと信ずるものは、臨終と平生との別は無ひ、信ずる時往生が定まるので、信むところは唯願力で、臨終來迎を期する

ことなし、これを平生業成と名けたまふのである。

後にこの意を願に歸して「これすなはち第十八願のこゝろなり」と不來迎は選擇本願の意で他力眞宗の正意なりと示され、臨終をまち來迎をたのむことは、諸行往生をちかひます第十九の願のこゝろなり、來迎を期するの往生は、第十九の願で、如來の方便淨土の假門であるぞと判じられた。

嗚呼、吾人は何等の宿緣ぞ、すでに斯る親切なる、宗祖聖人の遺敎に遇ふことを得た、已に斯の言明を聞くもの、何してぞ、猶も定散自力に執着して、他力攝取を捨てられうぞ、唯如來の大願業力を信みて、攝取不捨の大益を蒙り、佛恩の廣大なることを喜び、稱名念佛しつゝ、人世に處し、人事を營みて淨土の大益を期すべきことである。

此の一章の意は『御文章』の上に引かせられて、來迎不來迎の言を立てられた、就ては不來迎の言をも解說すべきことであるが、餘り長くなるで此の邊でおきませう。

## 第二章

次に第二章を講話しませう、先づ御文を擧ぐれば

一またのたまはく、

是非しらぬ邪正もわかぬこの身にて、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり。往生淨土のためには、たゞ信心をさきとす、そのほかをばかへりみざるなり。往生ほどの一大事、凡夫のはからふべきことにあらず、ひとすぢに如來にまかせたてまつるべし。すべて凡夫にかぎらず、補處の彌勒菩薩をはじめとして佛智の不思議をはからうべきにあらず、まして凡夫の淺智をや、かへすがへす如來の御ちかひにまかせたてまつるべきなり。これを他力に歸したる信心發得の行者といふなり。されば、われとして淨土にまゐるべしとも、また地獄にゆくべしともさだむべからず。故聖人(黑谷源空聖人の御ことばなり)のおほせに、源空があらんところへ、ゆかんとおもはるべしと、たしかにうけたまはりしうへは、たとひ地獄なりとも、故聖人のわたらせたまふところへまゐるべしとおもふなり、このたびもし善知識にあひたてまつらずば、われら凡夫かならず地獄におつべし、しかるにいま聖人の御化導にあづかりて、彌陀の本願をきゝ、攝取不捨のことはりをむねにおさめ、生死のはなれがたきをはなれ、淨土のむまれがたきを一定と期することゝ、さらにわたくしのちからにあらず、たとひ彌陀の佛智に歸して念佛するが、地獄の業たるをいつはりて、往生淨土の業因ぞと、聖人さづけたまふに、すかされまいらせて、われ地獄におつといふとも、さらにくやしむおもひあるべからず、そのゆゑは、明師にあひたてまつらでやみなましかば、決定惡道へゆくべかりつる身なるがゆゑにとなり。しかるに善知識にすかされたてまつりて惡道へゆかばひとりゆくべからず師とともにおつべし、されば地獄なりといふとも、故聖人のわたらせたまふところへまゐらんとおもひかためたれば、善惡の生處わたくしのさだむるところにあらずといふなりと、これ自力をすてゝ他力に歸するすがたなり。

第一章に、第十八願の眞實信心の行人は不來迎であることを示して、平生業成の義を立てられた。今章は、その信心獲得の相を示さるゝのである。

抑、今度の往生が、行者の三業の行に因るものなれば、臨終ならでは決定することは可はぬ。その故は、凡夫の所作は、昨日は勤めても今日は怠り、今日は行はずとも明日は回復す、自ら企てざるも、外緣より誘惑され、外界に妨害なきも、自身に發起して、惡と知りつゝ作し、善と思ひ乍ら勵まざることの、ありがちな者なれば、棺を蓋うて、事方めて定まるの風情で、三業所作の止息なる臨終ならでは、事の定まる筈はない。それで、自力諸行をたのむの人は、臨終に往生が定まると信ずるのである。然るに、本願力の攝取をたのむ信心の行者は往生の大事はすべて佛力によるので、行者の三業に關はらざれば、已前の業作も、今後の善惡も、今度の往生には、少しも交渉はない、たゞ佛智不思議にたすけらるゝと、信ずるとき決定するのである。それゆゑ、信ずる時決定することを、平生業成と名けて、臨終業成の自力にえらんで、他力往生の義を示さるゝ。それが前章の不來迎の談でありた。然るに、他力往生といふは、行者の上に於て之を言はゞ、信心往生といふことであるゆゑ、その信心獲得の相を心得るが肝要であるから、第二にそれを示さるゝのであります。

今章は、大に二段に分かれて、初は略して要旨を示され、されればわれとして淨土へまゐるべしとも、といふより後は、具さに自督に就て示さるゝ。初の中でも、先づ信心を先とすることを示して、是非しらず邪正もわかぬこの身にて、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり、往生淨土のためには、たゞ信心をさきとす、そのほかをかへりみざるなり。

とのたまふ。「是非しらず」より、「人師をこのむなり」までの御言は、『三帖和讃』の最後に載せられてありて、聖人が凡夫たるあさましき相を表白されたるもので、かゝるあさましき凡夫そのまゝで、信心決定せられ、唯信ずるのみで往生の大事が成就せらるゝ。されば往生に於ては、唯信心を要とする、その餘は善も要せず惡も妨とせず、名利のはけしき凡情のそれを改めずして、大事が成就するぞと示さるゝのであります。

是非とは、法度に契ふは是れ是で、法度に乖くは其の非である。邪正とは、正理に違ふを邪と云ひ正理に順ずるを正と云ふのである。わかぬとは分別せぬと云ふこと。しらずわかぬとは、識了辨別なきといふことで、智慧のない相である。小慈小悲とは、曇鸞大師の著たる『論註』には、慈悲に小中大の三種ありといふてある。大慈悲者は、唯是れ如來で、中慈悲は二乘も能く之あり、小慈悲は外道凡夫も猶此の事に從ふといふ。その小慈悲といふは、其苦を救ひ其に樂を與ふるに由來緣なきものに對して我親族に於てするやうな心にてすること。もなきとは、大中の慈悲は勿論のこと、小慈悲さへもなしといふことで、これは慈悲心の缺けたる相である。名利とは名聞利欲で、名の揚らんことを求め、金を得んことを望むこと。この身にてと云ひ、人師をこのむとのたまふものは、智慧なく慈悲なき不德の自身が、往生淨土の法を說くこと、唯是れ名利の外なしと、深く御謙遜あらせられたる祖言であります。されども、斯る名利の外なき下劣の凡夫も、淨土の往生には、毫も妨碍とな

らず、往生には唯信心のみで事が足るぞと、示さるゝが次の御言である。

「往生淨土のためには、たゞ信心をさきとす、そのほかをばかへりみざるなり」等。

往生淨土とは、今家の相承では、曇鸞大師の『論註』に創めて此言が出て、道綽禪師に及で、此往生淨土の名目が、聖道といふ名目と相對して、釋尊一代の說法を二分する名目となりた。それが次第に傳はりて、我朝源空聖人に至りては遂に自餘の諸宗に對して、特に一宗を標する名目とせられた。

但し往生淨土の四字を、略して但淨土宗と呼ぶのぢや。聖道といふは善導大師の所謂「依心起行」で、自心を開覺する諸佛敎道を呼ぶ名で、自力法門のことである。往生淨土といふは、所謂「乘願爲緣」で、佛願力に乘じて往生し成佛する彌陀法を標する名で、他力敎のことである。往生とは、此有漏雜染の穢土を捨てゝ、彼の界外無漏の淨土に往きて生るゝこと。淨土とは、淨土に種々ありて、勝れたるもあり劣りたるもあるが、今この淨土は、阿彌陀佛の住せらるゝ境界で、或は安養とも云ひ、或は安樂とも名け、或は極樂とも稱して、『淨土論』には第一義諦妙境界相と嘆め、廣略相入の淸淨世間と釋せられ、西河は報土と定められた。されば報法高妙の如來所住の土でありて而も願心莊嚴と釋せらるゝへは、入る者皆土體にかなふて、大般涅槃の大果を證顯す、すでに西方の淨土は報土で、如來の自境界『高僧和讚』には「安養淨土の莊嚴は、唯佛與佛の知見なり」というてある。斯る淨土に下劣の凡夫が能く通入することを得るを、往生といふ。覺如上人が『改邪鈔』の中に

おほよそ、他力の一門においては釋尊一代の說敎に、いまだその例なき通途の性相をはなれたる、言語道斷の不思議なりといふは、凡夫の報土にむまるゝといふをもてなり、もし因果相順の理にまかせば、釋迦彌陀諸佛の御ほねをりたる他力の別途むなしくなりぬべし。そのゆゑは、たすけましまさんとする、十方衆生たる凡夫、因果相順の理に封ぜられて別願所成の報土に凡夫むまるべからざるゆゑなり。

と、述べられた。報土なる淨土は、唯佛與佛の智境界で、等覺の大士も、なほ測り伺ふことが出來ぬのであるに、底下の凡夫が能く入るといふ往生淨土の義趣は、因果相順の道理では判らぬ、それで他力の別途であると言せられた。されば、往生淨土といふことは極めて之を言はゞ、他力攝取といふことゝなるのであります。

源空聖人の御談しに、天皇の御前に伺候することは、三位已上の身ならでは許されざるが宮中の法度なるに、自身は位記もなき、野法師でありながら、幾度となく殿上に登れり、これは天皇より召したるがゆゑである。凡夫の下劣で、報法の妙土に入るも亦同じ例で、因果相順の理に隨へば、萬々生まるべき理りあるべからざるも、超世の願力に牽かるゝゆへ、確かに通入することが出來るのであると仰せられしと傳へらる。されば往生淨土の言は、その意は他力攝取といふことを示すことゝ知らるゝ。

すでに往生淨土といふことが、他力攝取といふことなるゆゑ、衆生は唯攝取の願力に乘托する信心のみ、三業の善惡は妨ともせず、亦用ひるのでもない。故に

往生淨土のためには唯信心をさきとす、そのほかをばかへりみざるなり。

と示された。

第十八願の文には、至心信樂欲生我國の信と、乃至十念の行と、並べ出してあれば、信行相具して淨土に往生するやうに見ゆる、彌陀選擇の願意に徹底すると否とは、此信行の交際が領得せらるゝか否かに由つて決まるので、古今三千年、東西の願生西方者で、眞個に此願意を看ぬきて、二尊の悲懷を滿しめたものは至つて少ない。近くは吉水門下、法衣を着たるもの其數四百に垂々とす、而して師教の正義を體得したもの、甚だ稀れ、要はこの信行の交際に明ならざりしによる。吾人何の幸ぞ、親鸞聖人の遺教を聞く、この信行の交際を明了に知り得て復逃ふことなし、實に難有ことの極みで、大に慶喜ぶべきことである。宗祖遺教の要は、今この處に出づ、往生の要はたゞ信心のみ、その外はかへりみざるなり、と、此は行はこれ生因ではない、生因はたゞ信のみといふこと、行は三業の所修で信は三業にかゝるのではない。「往生淨土のためにはたゞ信心をさきとす、そのほかをばかへりみぬ」とは、唯願力の攝取に信任すのみ、三業の作業にはよらぬといふこと。換言すれば、如來がたすけたまふゆゑ、衆生はたゞ仰いでそれに托すのみ、といふことである。すでに往生の大事は願力のはからひなりと決定するうへは、それより後は唯仰いで佛恩を念じて、慶喜相續するの外はない、その慶喜の三業、相續せらるゝものが、是れ行であれば、行は是れ佛恩を念報するので、之を知恩報德とも、常行大悲とも敎へられた。されば常に佛名を稱へて、その名德を仰ぐと同時に、止惡作善すべてみな、御威德を仰信し感謝するの外はない。中興上人の御言に『御一代聞書』

萬事に付て、よきことを思ひ付るは御恩なり、惡きことだに思ひ捨るも御恩なり、捨るも取るも、いづれも〳〵御恩なり。

と、實に然りである。善に付け惡に付け、たゞ安んじて佛恩を慶ぶのみ、すこしも執着する心はない、眞個に氣樂な日暮である。さて次に信心獲得の相を示すに、凡夫の計度を息めて、佛智のはからひにまかすべきことを敎へて

往生ほどの一大事、凡夫のはからふべきことにあらず、ひとすぢに如來にまかせたてまつるべしと云ひ、次に當に凡夫に限つたことではなひ、佛智の測り知られぬことは、大菩薩も同じことなるよしを示して

すべて凡夫にかぎらず、補處の彌勒菩薩をはじめとして、佛智の不思議をはからふべきにあらず、まして凡夫の淺智をや

とのたまふた。『大經』の偈に

聲聞或は菩薩、能く聖心を究むるなし、譬へば生じてより、盲いたるもの行きて人を開導せんと欲するが如し、如來の智慧海は、深廣にして涯底なし、二乘の測る所にあらず、唯佛獨り明了せり

と說いてある。界外の聖者、二乘は勿論のこと、大菩薩ですら、尙佛智に對しては、生盲の如くなりといふのである。況して淺智の凡夫をやである。されば誓願の不思議佛智の御はからひに任せて、

ただその攝受に安んずべきことである。往生の大事は、たゞこの佛願力の攝取を仰信して、その偉德に安住するのである。後に例を引いて重ねて勸めて

かへす〴〵如來の御ちかひにまかせたてまつるべきなり

と、仰せられた。煩惱の强き、罪惡の重き自身に於て、出離の大事を成就せんとするは、宛も木に緣りて魚を求むるの愚に等しきことで、苦心するも功のある筈はない。幸ひに彌陀佛力の、吾人凡夫を救ひたまふ大法あり、さればひたすらこの大法に依らん哉、大法は必ず吾人の大望を達しめたまふ。かやうに自の計度をすてゝ、佛願力に乘托するのが、往生淨土の宗義に相應したる信心ぞと結ばれたるが

これを他力に歸したる信心發得の行者といふなり

の御言である。

直ちに眞宗の肝要たる信心を獲得する相を示さるゝ前の一節は、已に講話し了りたれば、此より更に宗祖の自督に就て示さるゝ後節を講話し致すであらう。さて宗祖の自督を示さるゝ中で、先づ自督の大意を標舉して、

さればわれとしては、淨土へまいるべしとも、また地獄にゆくべしとも、さだむべからず

と仰せられた。此の意は、未來の生處は其の淨土たらんも、又地獄たらんも、自身の定むべきにあらねば、たゞ師教にまかせたりとのたまひたのである。次に正しく其の師教にしたがひ、まかせたるやふを示して

故聖人黑谷源空聖人の御ことばなり)のおほせに、源空があらんところに、ゆかんとおもはるべしと、たしかにうけたまはりしうへは、たとひ地獄なりとも、故聖人のわたらせたまふところへ、まいるべしとおもふなり。

と仰せられた。此れ宗祖が專ら源空聖人の聖言を聞いて、毫末も自計を加へぬ、師教仰信の情相を直明さるゝので、決定して直ちに白道を進ませたまふ光景が、宛然として確認せらるゝことである。師源空聖人が、曾て余に對して、源空が參る處へとも、にゆかんとおもへと仰せられたこと、今猶耳の底に留り心の中に銘して、忘るゝことなく、脚下の行程、たゞ師の跡を尋ね、後世の落處、必ず師の側に侍らんこと、望外の光榮、たゞ滿足し慶喜せらるゝのみ。すでに如此である上は、たとひ地獄たりとも師の處であるならば、すこしも嫌ふこころでないといふのである。決して地獄にゆくべき道理はない、宗祖に於ては少しもそのうたがいはないが、よしや地獄にても、師の在處ならば、厭ふべきにあらずと、かりにもうけて師の教示に滿足したる決心深信の心情を示さるゝのである。『歎異鈔』には、師教を仰信して機計を加へざる心相を直示して

親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん、總じてもて存知せざるなり。

と云ひ、其を又施設を以て反説して、

たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候。

と云ふてある。此れ皆掛引なき正直な仰信の告白で、たゞ師教を信じて機計を加へざる、他力安心の自督であります。世の中には、祖師や蓮師の御安心御往生は疑はねども、自身の往生をあやぶみて、御たすけに安心せぬものがある。此の一段の御言をきゝて、如何に感ずべきや、師法然上人が、彌陀にたすけられて、淨土に往かん、いざともに念佛して、一つ處に樂まんとの聖言を聞いて、慶喜滿足したまふ、宗祖の其の自督を、吾人に示したまふが、此一段の御言である。宗祖の御往生御安心に疑ひなくば、吾人の往生も亦あやぶむ筋はないのである。宗祖が名師に遇ひたてまつりて、其の所聞を慶喜せらるゝ相を反復して

このたびもし善知識にあひたてまつらずば、われら凡夫かならず地獄におつべし、しかるにいま聖人の御化導にあづかりて、彌陀の本願をきゝ、攝取不捨のことはりをむねにおさめ、生死のはなれがたきをはなれ、淨土のむまれがたきを一定と期すること、さらにわたくしのちからにあらず。

と言明された。『高僧和讃』に、遇ひ難き弘願眞宗に遇ひて、順次の往生を期する身となり、曠劫未決の宿題たる、出離の一大事件を解決せることは、全く是れ源空聖人てふ、眞の善知識に遇へる故なる旨を述べて

曠劫多生のあひだにも、出離の强縁しらざりき、本師源空いまさずば、このたびむなしくすぎなましし。

と、慶讃されてある。曠劫未遇の師によりて曠劫未聞の法を聞く、法の眞實を知るは、卽ち知識の力である。宿緣時到つて、幸に名師に遇ふは、是れ有緣の法に遇ふのである、法に遇ふは卽ち大利無上功德を我身に具足するので、其れを彌陀の本願をきゝ、攝取不捨のことはりを、むねにおさめ、生死のはなれがたきをはなれ、淨土の期しがたきを一定と期する」と述べさせられ、此れ皆師源空聖人の教示の賜で「さらにわたくしにあらず」と、慶喜し感謝された。されば宗祖が師の跡を尋ね師の所在に赴かんことは、無上の幸福として、慶喜せらるゝは、その筈である。

次に專ら師教を信じて餘念なき相を、施設を以て反説したまひて、

たとひ彌陀の佛智に歸して念佛するが、地獄の業たるをいつはりて、往生淨土の業因ぞと、聖人さづけたまふにすかされまいらせて、われ地獄におつといふとも、さらにくやしむおもひあるべからず。

とのたまふた。いつはるとは、非なるものを是とすることで、地獄の業たるものを淨土の因といふこと。すかされといふは、誑惑でだまさるゝこと。くやしむおもひとは、後悔すること、決してあることではないがよしや佛智をたのみ、佛名を稱ふるが、墮獄の業たるを、往生の因ぞと誑惑されて、地獄におちたりとも、毛頭も後悔はせぬと、確信の相をのべらるゝので、次に其の理由を述べて、

そのゆゑは、明師にあひたてまつらで、やみなましかば、決定地獄にゆくべかりつる身なるがゆゑ、

にこなり

こ仰せられた。あひたてまつらでやみなましかばこは、遇ひたてまつらずして止みなばこいふこと。若し善知識に遇ひたてまつらずば、如何、勿論出離の術はないのである、墮獄は決定うたがひなし。されば師教によりて、念佛しつゝ墮獄せるこも念佛が業こなりしではない、聖人に誑惑されたのではないこいはるゝのである。この意を、『歎異鈔』では

たこひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりこも、さらに後悔すべからずさふらふ、そのゆゑは、自餘の行をはげみても、佛になるべかりける身が、念佛をまふして、地獄におちてさふらはゞこそ、すかされたてまつりてこいふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、地獄は一定すみかぞかし。

このたまうてある。すでに自身本來出離の緣なきものこ自覺せるうへは、たこひ地獄におちたりこも、念佛をこがめず、師をうらみず、たゞ自の惑業深きに泣かんのみ。かくなるからは、却つて師教に遇ひたてまつりしここがたのもしくなり、其の意を、次に

しかるに善知識にすかされたてまつりて惡道へゆかば、ひこりゆくべからず、師こゝもにゆくべし。

こ言ふてある。されば、たゞ師教を信じて一念疑ひなきが、宗祖の自督安心なるゆゑ、其れで從來の意を結んで、

されば、たゞ地獄なりこいふこも、故聖人のわたらせたまふこころへ、まいらんこおもひかためたれば、善惡の生處、わたくしのさだむるこころにあらずこいふなり。

こ仰せられた。如此に、彌陀願力の攝取を、親しく有緣の源空聖人にきく、近く聖人に就て明かに佛力を信ず、出離の大事は專ら聖人の教示によつて、決定安堵せらる。これが、自力の機計を離れたる、他力廻向の信心である。よりて、結び示して

これ自力をすてゝ他力に歸するすがたなり

こ仰せられた。

抑、宗祖が曾て台嶺に在て切に道を求められたる時、其の台嶺に傳はる所の、彌陀の名號を稱へて、西方の淨土に往生するこいふ一法をも必ず聞き知られたるならん、而るに當時はそれに滿足する能はずして、洛陽東山に源空聖人を訪ふて、其の教示によりて、一席の法談で、煩悶忽ち消えて、大慶喜の身こなりたまひしは、何故であらうか、其れは別義ではない、台嶺所傳の念佛は、猶是れ彼れ天台家風の念佛で、彌陀本願の正意を得てをらぬからで、彌陀本願の眞髓、他力往生の實義は、實に源空聖人によりて教示され、聖人を通して、彌陀大悲の願意が方めて明確に信知するこが出來たからである。師教の外に彌陀の願意なく、願意は全く聖人の教示にあらはれ、其によりて安堵滿足せられたるが、宗祖の信仰である。されば宗祖の信仰眼に映りたる源空聖人は、是れ阿彌陀如來なので、聖人の教示は、卽ち如來の直說であるのである。『高僧和讃』に

智慧光のちからより、本師源空あらはれて、淨土眞宗ひらきつゝ、選擇本願のべたまふ

とも、又

諸佛方便ときいたり、源空ひじりとしめつゝ、無上の信心おしへてぞ、涅槃のかどをばひらきける。

眞の知識にあふことは、かたきがなかになをかたし、流轉廻向のきはなきは、疑情のさはりにしくぞなき。

とも、讃嘆せらるゝが、皆宗祖が聖人に對する信仰の聲言である。それで、たとひ地獄たりとも、故聖人のわたらせたまふところに、ゆかんとおもふといふは、卽ち彌陀とゝもにあるの謂なり。ひとり惡道にゆくべき身が、師とゝもにゆくべきことゝなりたるを、たのしく喜ばるゝは、彌陀如來のつねに、我身を離れたまはぬことを、愉快に信知しをらるゝ興致である、唯師教を仰信して、毫も機計を加へたまはぬ宗祖の安心、豈他力ならで何ぞや。

覺如上人が、宗祖聖人に對しさせられての信仰も、亦全く此と同じことである。『傳文』や、『式文』に、しば〳〵宗祖聖人は是れ彌陀如來の化身であることを叙べさせらるゝが、それで、これ聖人の遺教によりて、如來の願意を知りたまへる、信仰の言明である。すでに教示の知識に對して、如來の化現なりと信ぜらるゝゆゑ、知識の教示は、全く如來の金言として、一伍一什利益ある指導と信じられるで、その教訓に順ふは、卽ち自身に益あるものとして實行せらるゝで、茲に歡喜心と同時に、知恩報德の實現となるのである。『中興上人御一代聞書』に揭げられた、宗祖聖人の弟子高田の顯智房が、聖人の御詞の末にありたることで、生涯舟に乘られず、茸を食べられざりしといふ美談もあり。又中興上人の門弟道宗が、善知識の仰せとあれば、近江の湖を一人にても埋めると言明せしなど、如何に深く師言を尊重し遵守せしかゝ明かに知らるゝ、

『化文類』に、『華嚴經』の

汝善知識を念ぜよ、我を生ずること父母の如く、我を養ふこと乳母の如し

といふ文を引いてあるが、實に然うである。往生すべき信心の定りたるは、卽ち法身の慧命の生じたるのであり、事は至つて廣大である、其れが善知識の教示によるとせば、善知識の恩の我等に於ける、父母に優る萬々である、豈報ぜずして可ならんや。

南無阿彌陀佛〳〵、〳〵、先づ此邊でおきませう

## 第三章

第三章の大意は、善惡得生といふことで、善人も惡人も同じく彌陀如來の大願業力に乘じて往生することを示さるゝのであります。第二章に自力をすてゝ他力に歸する相を明された。然るに其他力に歸するに就ては善人は其所修の善行は如何すべきか、惡人は其所造の罪業は障りとなりはせずやの事が、未だ審かならぬ。今章は、その旨意を特に明了に示さるゝのであります。『口傳鈔』に「善惡二業の事」といふ一章があるが、今章と全く同じことである。『改邪鈔』に

たゞ男女善惡の凡夫を、はたらかさぬ本形にて、本願の不思議をもて、むまるべからざるものをむ

まれさせたればこそ、超世の悲願ともなづけ、横超の直道ともきこえはんべれこあるは、今章の大意ともして、拜讀すべきか。

先づこの一章を標じ擧げて

光明寺の和尚(善導御こゝろ)の、大無量壽經の第十八の念佛往生の願のこゝろを釋したまふに、善惡凡夫得生者莫不皆乘阿彌陀佛大願業力爲增上緣といへり

此御文は、善導大師が、『觀經』の御講述をなされた四帖の聖教中其初め『玄義分』といふ中の序題門と名づくる下に出てある。『口傳鈔』にも、全文を引いて御釋がなされてある。

大師が『觀經』を釋したまふに、『觀經』一部に要門と弘願門との二途の法門があるとし、その弘願門の法義は、「言弘願者如大經說」と言うて、『大經』の所說をさゝれた。

而して示さるゝ御言が、只今擧けらるゝ「善惡凡夫得生者」等の御文である。此御文の意は、これが第十八願の義理なるので「大無量壽經第十八の念佛往生の願のこゝろを釋したまふ」と標げられたのであります。

次に御文の意を述べさせられて、

このこゝろは、善人なればとておのれがなすところの善をもてかの阿彌陀佛の報土へむまるゝことかなふべからずとなり。惡人またまうすにやおよぶ、己が惡人のちから、三惡四趣の生をひくよりほか、豈報土の生因たらんや。しかれば善業も要にたゝず、惡業もまたさまたけとならず。

善人の往生するも、彌陀如來の別願超世の大慈大悲にあらずばかなひがたし、惡人の往生、またかけてもおもひよるべき。報佛報土にあらざれども佛智の奇特なる不思議を顯はさんがためなれば五劫があひだこれを思惟し永劫があひだこれを行じて、かゝるあさましきものが、六趣四生よりほかはすみかもなく、うかむべき期なきがために、こゝろわき、むねとおこされたれば、惡業に卑下すべからずとすゝめたまふむねなり。されば、おのれをわすれてあふぎて佛智に歸することなくんば、おのれがもつところの惡業なんぞ淨土の生因たらんや。すみやかにかの十惡五逆四重謗法の惡因にひかれて、三途八難にこそしつむべけれ。なにの要にかたゝん。しかれば善も極樂にむまるゝたねにならざれば、往生のためにはその要なし、惡もまたさきのごとし、しかればたゞ機生得の善惡なり、かの土ののぞみ、他力に歸せずば、おもひたえたり。これによりて、善惡凡夫のむまるゝは、大願業力ぞと釋したまふなり。增上緣とせざるはなしといふは、彌陀の御ちかひのすぐれたまへるにまされるものなしとなり。

この解述の文段を、大體に分ちますと、初から「惡業に卑下すべからずとすゝめたまふむねなり」までは、「善惡凡夫得生」の意を明され、「されば、おのれをわすれて」より、「他力に歸せずばおもひたえたり」までは、「莫不皆乘大願業力」の旨を示され、かやうに各それ〴〵分けて釋せられたものを、後に結成して、「これによりて善惡凡夫のむまるゝは大願業力ぞと釋したまふなり」と仰せられ、更に最後に、增上緣といふ字義を釋しおかれたのである。

抑、善惡といふことは善とは潤益に名けたもので、潤益とは、富は家を潤し德は身を潤すといふやうに果報を善くし作用を大ならしむる、それが潤益で、自身及び他人に通じ、今世及び未來に渉りて、潤益する業作が善業で、習ひ性を成すで、善業の習慣性となりたるが善性である。惡とは、損害に名けたもので、損害とは、果報を損ひ作用を妨ぐる謂で、自身より他人に及び、今世より未來に亙りて現れ來る、斯る作業を惡業といふ、惡事が習慣となりて惡性を成す、それ等の者を惡性人といふのである。それで、吾人をして下落し縮ましむるものは惡業で、向上し發展せしむるものは善行である。因果相順は、天地の大法で、毫末も差ふこともなく、亦私すべきやうもないのであります。

然るに、阿彌陀佛の眞實報土に往生するに於ては、凡夫の所有の善事は通用せぬのである、吾人凡夫の所修の善事は、善は則ち善なれども、惡性の雜はりたるゆゑ、雜毒の善と云ひ、顚倒の妄念を體として僞されたるゆゑ、虛假の行と名けられて、三界中の善處たる人天に生まるゝ功力はあるとも、界外の淨土に往生する價値はないのである、啻に凡夫のみではない、羅漢や菩薩の聖者たりとも、自身所修の行力では、彌陀如來の淨土には往生はできぬ。『高僧和讃』の善導章に、

願力成就の報土には、自力の心行いたらねば、
大小聖人みなながら、如來の弘誓に乘ずなり

とある。出離に緣なき惡逆の凡夫を、救濟せんとする大慈悲より起る願と、隨順法性不乖法本して修められたる行とで、成就せられた安養淨土であるからは、自力の心行では、往生すること、決して不可とをしへられた。されば、彌陀願力に由る一途、よく往生の望を遂ぐるので、願力に由ることなかりせば、決して往生の道はないのである。

又惡業は、勿論、三惡四趣の苦果に沈むべきことにて、本來三界を出離することかなはぬので、況して極果の報土へ生るゝといふこと、希望を懸けても及ぶべきことでは萬々ないので、其は眞に木によりて魚を求め、沙を蒸して食を得んとするに同じ。決してえらるゝ道理はないのである。されば、但斯るものをたすけましますの彌陀願力の强緣あるにより往生するなれ、彌陀願力をはなれては、決して往生の道はないのである。

然れば、惡人は勿論、永く生死に沈んで三界を出離する期はないのである。善人も自己の行力には、報土の往生は不可である。それに、善人も惡人も、皆同じく往生することができる、これを「善惡凡夫得生者」と言はれたので、今の前段が、その御解釋であります。

後に、「莫不皆乘阿彌陀佛大願業力」といふは、善人も、惡人も、みな彌陀佛の願力に乘托するので、往生がなるといふ、その願力に乘託するすがたを御解釋なされたが、今の後段であります。前段に示さるゝやうに、十惡五逆四重謗法の罪惡は、三途八難の苦果に墮つべき業にて、淨土に往生すべき道理は勿論ないのである。世戒行の三福善根力も、界外無漏の淨土には往生できぬとすれば、善惡といふは、たゞ往生する衆生の生得の分別でありて、往生するに於て、毫も善惡の別はないのである、往生の望みは、他力に歸すれば達し得らるべし、さうでなくば、萬々絶望なのである。要はたゞ願力に

まかす一途である、その願力に乗託する相を示して「おのれをわすれてあふぎて佛智に歸するまこと」と言れた。

「おのれをわすれてあふぎて佛智に歸する」、これが自力をすてゝ他力にまかす相であります。

覺如上人が、『報恩講式表白文』の中に、宗祖の安心を示されて

至心信樂己を忘れて、速かに無行不成の願海に歸す

と言れたが、今が彼と同じことである。おのれをわすれるといふは、酒や茶を樂み、碁や將棋に耽り、詩歌書畫に興ずる時は、時刻の移るを覺えず、要事の放下された光景を呼んで、己を忘れたりといふ、卽ち當事に憧憬れて、餘念なかりし謂である。おのれをわすれてとは、自力の執情をすてること、あふぎて佛智に歸するとは、他力の强緣にまかすこと、唯此のみが、淨土に往生すべき途なることを、まことゝ示された。善根も報土の因とならぬときけば、善人も善に執せず、罪惡も佛力にたすけられて往生すると聞けば、惡人も造罪に絆されず、善惡はたゞ性得の別でこそあれ、往生淨土の利益は、平等なりと信知されたが、皆願力に乗ずるといふことであります。

大願業力に乗ずるといふ乘ずるとは、乘託することゝ。汽車に乘る、汽船に乘るといふ。今の意は彼と同じくて、汽車や汽船に乘る場合は、如何でありませう。乘客の、性質の善惡や、容貌の醜美や、體力の强弱には、差別がありても、汽車や汽船は、平等に取扱うて、共に乘せ等しく運んで、目的地に達する、夫で乘客の方にも、體格の强力も用んとせず、性色の善美も誇んとせず、又體質の虛弱も案じもせず、性色の醜惡も怖るゝことなく、自己のすべてをうちわすれて、たゞ車や船の力にまかすであらう。今もそれと同じく、善人も善をたのまず、偏へに願力に乗じ、惡人も惡を怖れず往生する。此を結成して「善惡凡夫のむまるゝは、大願業力ぞと釋したまふなり」と、仰せられたのであります。

增上緣とは、殊勝の因緣といふことで、出離解脫に於ては、二も三もなき惟一のすぐれたるちからぢやといふこと。彌陀如來の第十八の本願力を增上緣と名けたることは、御相承では、曇鸞大師に創まりて、道綽禪師を經て、善導大師に至りて、盛んに用ひられた。要は、衆生の煩惱惡業が妨とならずして、容易く報土に往生せしめたまふ德用を示したまふ名稱であります。よりて、最後に「增上緣とせざるはなしといふは、彌陀の御ちかひのすぐれたまへるにまされるものなしとなり」と、仰せられたのである。

## 第四章

先づ御文を擧げましよう。

一またのたまはく、

光明名號の因緣といふことあり。彌陀如來四十八願のなかに、第十二の願は、わがひかりきはなからんとちかひたまへり、これすなはち念佛の衆生を攝取のためなり。かの願すでに成就して、あまねく無碍のひかりをもて、十方微塵世界をてらしたまひて、衆生の煩惱惡業を長時にてらしまします。されば、このひかりの緣にあふ衆生、やうやく無明の昏闇うすくなりて、宿善のたねき

ざすこゝ、まさしく報土にむまるべき第十八の念佛往生の願因の名號をきくなり。しかれば、名號執持すること、さらに自力にあらず、ひとへに光明にもよほさるゝによりてなり。これにより て光明の緣にきざされて名號の因をうといふなり。かるがゆゑに、宗師(善導大師)の御こゝなり 以光明名號攝化十方但使信心求念とのたまへり。但使信心求念といふは光明と名號と、父母の ごとくにて、子をそだてはぐくむべしといへども、子となりて出で來べきたねなきには、ちゝはゝ となづくべきものなし、子のあるとき、それがためにちゝといひはゝといふ號あり。それがごと くに、光明をはゝにたとへ名號をちゝにたとへて、光明のはゝ名號のちゝといふことも、報土にま さしくむまるべき信心のたねなくばあるべからず。しかれば信心をおこして往生を求願する とき、名號もとなへられ、光明もこれを攝取するなり。されば、名號につきて信心をおこす行者な くば、彌陀如來攝取不捨のちかひ成ずべからず。彌陀如來攝取不捨の御ちかひなくば、また行者 の往生淨土のねがひなにゝよりてか成ぜん。されば、本願や名號、名號や本願、本願や行者、行者や 本願といふ、このいはれなり。本願寺の聖人の御釋教行信證にのたまはく、德號の慈父ましまさ ずば能生の因かけなん、光明の悲母ましまさずば所生の緣そむきなん、光明名號の父母これすな はち外緣とす、眞實信心の業識これすなはち內因とす、內外因緣和合して報土の眞身を得證すと みえたり。これをたとふるに、日輪須彌の半にめぐりて他洲をてらすとき、このさかひ闇冥たり、 他洲よりこの南洲にちかづくとき、夜すでにあくるがごとし。しかれば、日輪のいづるによりて 夜はあくるものなり。世のひとつねにおもへらく、夜あけて日輪いづと。いまいふところはし からざるなり。彌陀佛日の照觸によりて、無明長夜のやみすでにはれて、安養往生の業因たる名 號の寶珠をばうるなりとしるべし。

謹んで窺ひますに、此一章の大意は、吾人凡夫が、信心を獲得して淨土に往生することは、彌陀如來 の光明名號の力用であることを示さるゝのである。次上の第三章で、往生を得ることは、佛の大願 力を增上緣と爲すのであるゆゑ、自身の善惡に執せず、自力をすてゝ他力に歸すべき旨を明された。 今それに次で、その他力のなさしめたまふ相狀を彰さるゝのである。さて

「一またのたまはく」とは、前と同じやうに、宗祖聖人の聖言なることを標(か)けたので、それをのぶるに ついて、先づ聖言の大意を標けて、「光明名號の因緣といふことあり」というたもの。此下大に三段 に分れて、

初に、直ちに光明名號因緣の義を釋し、

次に、善導大師の御文を引き來りて之を釋し、

後に、宗祖聖人の御遺典を擧げて之を結ぶ、

といふ、如此に三段に伺はれます。初め直ちに光明名號が凡夫往生の因緣である事を釋せらるゝ 中で、最初の一句は、一段の大意を標す。此光明名號で凡夫往生の因緣といふことは、今章の終りに 引かるゝやうに、宗祖聖人は『御本典』の中に、すでに教示されたが、又近く御前に謁ふものにも時時

御話しのありたこと丶見えて、それを傳へ聞くまゝに錄して後代に示すものに、『口傳鈔』の中に、

光明名號の因緣といふ事、

無碍の光耀によりて無明の闇夜はるゝ事

の二章があります。今章は彼の『口傳鈔』の二章を合したるものであるから、此章を拜讀せらるゝ法兄姉は、『口傳鈔』の右二章をも併せて讀まるゝよう、希望いたします。

因緣に就ては、今章の終りに引いてある宗祖の御釋文には、兩重に語りてある。兩重なれども、吾人が往生を得る因緣に外ならぬ。而して光明名號因緣といふは、吾人が往生のためには、光明は是れ緣で名號は其因ちや、といふこと。それで、因緣の解釋が、自ら二節に分れて、先づ光明が吾人が往生のための緣であることを示され、後に名號が往生の因であることを明させらる。初節の光明の緣を示させらるゝに就て、彌陀如來の四十八願の中、第十二の願は光明無量と云うて、光明の照力が、遍く十方世界に及ぶことを誓ひたまへるにて、すなはち念佛の行者を攝取したまはんがためで、かの願すでに成就して、この正覺果體より放ちたまふ光力が、十方微塵世界を照したまひ、有緣の衆生は、それによりて宿善漸次に熟して、往生の因たる名號を聞信し受持することゝなりて、すなはち攝取不捨の大益を蒙るのである、といふ、願意より說き起して、光明の照益迄に及びたまふのである。

抑、光明に、智光と色光との別あり、又調熟と攝取との分がある。內心智慧の明淨なるを光明といふ、此が智光で、外界身業に光輝を放ちたまふは、卽ち色光である。此二光はその名くる所が別なれども、相離れたるものではない。「光明は智慧の相なり」とありて、內心の明淨なる智慧が、外面の身業に現れるのであるから、身業の光明に智慧の效用があり、世間の日月珠光が、唯空穴中の闇を除くのみとは、大に異なりて、內界の煩惱惡業の無明闇まで、照破するのであります。阿彌陀如來の光明は、天親菩薩は盡十方無碍光と讚嘆せられて、吾人が煩惱惡業も妨げさせず、夫を碍りさせずして、攝取して往生せしめたまふ。されば光明というて尊崇すべきものは、佛智の力用なのであります。『正信偈』や、『和讚』に、つねに心光とのたまふは、此智慧光の謂であります。さて又、調熟光、攝取光、といふことは、第十八の若不生者不取正覺の誓願の成就せる正覺の果體より放たせらるゝ光明が攝取光で、衆生を攝取せらるゝ如來であるから、阿彌陀といふ御名も立つたのである。善導大師は、『小經』に說き給ふ無碍と、『觀經』に出てある攝取とを取合して、何故に阿彌陀と名くるぞと問うて、其答に「彼佛の光明は無量にして十方國を照すに障碍する所なく、念佛の衆生を觀はして、攝取して捨て給はず、故に阿彌陀と名く」と言ふてある。宗祖聖人は「十方微塵世界の念佛の衆生をみそなはし、攝取してすてざれば、阿彌陀となづけたてまつる」と述べさせられ、中興上人は、阿彌陀といふ三字は「をさめたすけすくふ」とよめる」と仰せられた。卽ち煩惱惡業の吾等凡夫をして、今生には正定聚に住せしめ、來生には大涅槃を證らしめたまふ本願力の利益を、攝取といふのであります。然るに斯やうな大利を得るやうに、なさしめたまふ如來の方便は、亦容易ではない。長き間に、倦まず弛まず、種々にみちびきたまふ、其巧方便力で、宿善機熟して、方に如實に聞信さるゝことゝなる。その方便化導の

作用を、調熟光といふのである。中興上人が「彌陀如來には攝取と光明との二つを以て衆生を濟度したまふ」と示された。彼光明とあるが、今いふ調熟のことであります。

今文に、第十二の光明無量の願を立てたまふは、念佛衆生を攝取せん爲とありますのは、光明成就の本意を示さるゝので、吾人凡夫が、彼淨土に往生することを得るためには、如來の光明は是れ緣であると示さるゝ、究竟の至極で、その攝取して正定聚に住するやうに到らしむる方便、卽ち前位の長き間の調誘を示して、「煩惱惡業を長時にてらしまします」とも、「このひかりにあふ衆生やうやく無明の昏闇うすくなりて宿善のたねきざす」とも示された。

されば吾人凡夫が、彼淨土に往生することを得る因緣中の其緣たるものは、如來のなりと示さるゝ中で、調熟の光明より攝取の光明までが含んである。中興上人が「信ずるこゝろも念ずるこゝろもみな彌陀如來の御方便よりおこさしむるものなり」と示されたは、全く此意であります。

光明が吾人凡夫、得生の緣であることを示さるゝ一節は、先づかやうであるとして、次に示さるゝが名號の因である。吾人凡夫の往生の因として誓ひたまふものは第十八願がそれで、「念佛往生の願因の名號をきく」とあるが、すなはち生因の名號を誓ひたまふことであります。源空聖人は、名號は萬德の歸する所なり、則ち四智三身十力四無畏等の內證の功德、相好光明說法利生等の外用の功德、悉く皆阿彌陀佛名號の中に攝在す」と示され、宗祖聖人は「諸の善法を攝し諸の德本を具せり、極速圓滿眞如一實の功德寶海なり」と述べ、覺如宗主は「因位の萬行、果地の萬德、ことゞく名號のなかに攝在して、衆生往生の行體となる」と傳へ、中興上人は「わづかに六字なれども功德利益の廣大なることはそのきはまりなきものなり」と敎へられた。要之、吾人凡夫を攝して畢竟淨に入らしめたまはんために、願を建て行を修め、その願行成就したまへる正覺の力用を、名號に示し、その名號を聞いて、一念信ずる立ちどころに、往生一定の大益を得ることに、建立せられたるが、第十八願であります。されば、吾人が成佛せらるゝ願行が、如來の方に成就せられしゆゑ、吾人は吾人自身に願行を成就すべき苦勞せず、卽ち吾人は煩惱惡業を斷滅せず、かゝるあさましき身のまゝ、たすけらるゝと、自力をすてゝ佛力に安住することができるのは、これ名號が吾人凡夫の所有となりて、往生の因が成就するからであります。名號が吾人凡夫の得生の因となりたまふことは、あら〳〵如此であります。かやうに名號を聞いて往生の大事に安堵し、歡喜の餘り優に淨土に進まるゝことは、毫も吾人の自力にあらず、長き間に種々に方便し調熟して、遂に攝取し往生せしめたまふ如來の御恩である。之を「光明は緣なり」と示さるゝので、すべて吾人凡夫は、如來によりて出離の大事を成就するので、全然他力であると示さるゝが、光明名號因緣の御敎示であります。

次に善導大師の御文を引いて釋せらるゝ、中で、初に御文を出して、「かるがゆゑに宗師は」等と云ひ、後に「但使信心求念といふは」の下は、御文の意を解釋さるゝ。解釋の中で、文に就て要義を釋さるゝと、夫を結んで相成を示さるゝと、の二節がある。要義を示さるゝに、先づ喩を擧げて、夫婦相因て子を生むのであるが、子ありて方に父母の名が立つので、子なければ父母の名はない。夫を合法し

て、名號は是れ因で、光明は其緣といふも、父と云ひ母と云ふは、子の生るゝ場合に於ける名稱の如に、報土に生まるべき信心の發起りたるによりてのことである。されば順次の往生、卽ち眞實報土に大涅槃の佛果を證すべく生れ出る子の因種たるものは是れ信心で、其因種たる信心を造成するものが名號ゆゑ、それを父にたとへ、其を守護するものが光明なるゆゑ、母が父の子種を受けて養育するに喩へて、光明の母とし、よりてもて名號の父、光明の母というたもの。佛敎では、生れ出づべき子の業種は、父母の交合を緣として前生より今生に移りたるにて、父が其業種を造成するとは云はぬ。今の喩は、世間の情謂に父が子種を下すといふに隨ひ、それを名號が信心を成ずるに取て、報土に生れ出る子に望めて、一たびは名號を因と云ひ、一たびは信心を種とし、それでもて名號が信心となり、それを光明が護持養育して、淨土の眞身を生ずるといふ他力得生の旨を示されたのである。

如來の法が吾人凡夫の者となる相は、如此であるとして、さてその信心の業種の下る時、淨土の眞身の生れ出ることの定まりたる道理ゆゑ、其を示されたが『信心をおこして往生を求願するとき名號もとなへられ光明もこれを攝取するなり』との御言である。さてこの

『信心をおこして往生を求願するとき名號もとなへられ光明もこれを攝取するなり』といふ御言は、『御本典』の中に兩重の因緣が明さるゝ中で、今は彼後重の意で、彼初重は機法不二の中で、法を主として得生の因緣を明さるゝので、それで名號が因で光明が緣となりてある、後重は機を主として趣入の極要を示さるゝから、それで信心を因として光明名號は共に緣としてある。今章も全く彼『御本典』の意と同じく、前に名號を因とし光明を緣とする彼初重の意を述べられ、後に信心を因とし光明名號を緣とする彼後重の意を示さるゝ。今はその信心が因で、光明名號は緣でありて、自ら受法と得益と同時、以て往生の大益を得べき旨を結成せらるゝのである。彼の『御本典』に、初重で得生の因とせられた名號が、後重で光明と同じく緣となされたものは、如何といふに、それは已に辨ずるやうに、趣入の極要信心が往生の因であると示さるゝからで、機受はたゞこれ信心で、此場合に於ては、名願力は外に仰ぐの相である。故に信心を內因として、報土に生まれ出る子がための業識に喩へ、光明名號を外緣として、それを下種する父、受持する母に例へたものであります。而るに今文には、名號もとなへられ光明も攝取するなり』と述べらるゝによれば、名號とは稱名念佛のことになりてある、此は如何であらうか。古來この御文に就ては、間異說も起りしことで、大に注意を拂て正意を會得せねばならぬことゝ思ふ。彼の『御本典』の名號とのたまふは、初重後重ともに、如來所成の名號で、衆生の稱念のことではない、たとひ稱名としても、衆生の稱念を取るのではない、稱名の上に於て名號の德を示さるゝのである。今の彼初重の意を述べらるゝ名號の因とのたまふたのも、亦稱念のことではない、乃り名號のことである。夫に茲に名號もとなへられとあるものは、蓋し彼の後重の名號は外緣なりと示さるゝ彼意を開顯さるゝのである。其は如何かといふに、前に「光明のはゝ名號のちゝといふことも報土にまさしくむまるべき信心のたねなくばあるべからず」とあるは、信心が發きて方に光明名號が衆生を利益する實が知らるといふこと、全「信心をおこして往生

を求願するこき名號もこなへられ光明も攝取する」こあるは、たゞ信心さへ獲得せば、光明名號は自然に皆吾有こなるぞこ示さるゝのである。名號を聞いて信心が生る、信心生る處、名號はすでに吾有こなる、其名號が己が有こなつて、而も自力をたのまず、法體を惟れ仰ぐの有樣は、佛恩を念ずる稱名が明了である。名號こして衆生の稱念こならざるものなく、衆生の稱念こして卽名號ならざるものなければ、今は稱々念々に名願力を仰ぐ邊に於て、外緣の相を示されたもの。業識が父母の精血を己が有こ認めて、方に母胎に寄託するやうに、信心が名號を己が行こ了知したる時、方に光明中に入るものである。されば光明は前では調熟より攝取までが名號に對する緣で、後ではたゞ攝取のみで、信心の因に望めて其緣こなしたもの。又或人は「信心をおこし往生を求願するこき名號もこなへられ光明もこれを攝取する」こある、こきの言に拘りて、信心こ稱名こは同時で、信心こ稱名は同時に相具うて、方に攝取の益を蒙るこいふここ思ひ取れり。此は大に文意を悞りてをるこで、此文は、前にもいふ如に、往生を得るに於ては信心肝要なるこを示さるゝので、衆生はたゞ信心求念すれば、自ら名號も己が有こなり、光明も攝取したまふこ謂ふ意でも、もの假名使にて、其意が見ゆる。

前に喩を辨じ子あるこきちゝはゝの名ありこいふに相映して、信心生るこき光明名號の攝化の實が成るここをいふので、その稱名を先にし光明を後にしたるものは第十八願文に准說したもの、願文の乃至十念は稱名で、若不生者不取正覺が攝取、今は彼文の次第に隨うたもの。今鈔第五章の太尾に「本願を信じ名號をこなふれば其時分にあたりてかならず往生はさだまる」こある。彼れは臨終業成に對して、平生業成を示さるゝのであるが、本願の文に准說したものなるここは、今こ同じここである。右御宗意に謬りなきやう、致したく、實に大事である。後に相成を示されて、

されば、名號につきて信心をおこす行者なくば、彌陀如來攝取不捨のちかひ成ずべからず、彌陀如來の攝取不捨の御ちかひなくば、また行者の往生淨土のねがひなにゝよりてか成ぜん

こ言ふは、從來に示された兩重の因緣は、光明こ名號こ信心ここの外はない。それを今は名號を信心に攝めて行者の信心こし、それを如來の光明攝取に望めて、信心の行者ありてこそ如來の攝取不捨の誓ひが成就すれこ示し、又如來の光明攝取の誓ひを、行者の往生に望めて、如來の攝取不捨の誓ひありてこそ、行者の往生淨土の願心が成就すれこ明し、乃ち、行者が信ずるによりて、本誓が空しからぬここゝなり、本誓の違はぬによりて、行者の往生が決定なるぞこ、機法相成の旨を結示さるゝのである。而して、さらに之を證明するに、他の文言を引いて

されば本願や名號、名號や本願、本願や行者、行者や本願こいふこのいはれなり

此文言は、『西方指南鈔』に出でゝある。『指南鈔』は、元祖の御詞を、吾祖の筆錄されたものこ相傳へて、初め內題の下に「法然上人御說法事」こあり、終りに「康元元丙辰十一月八日愚禿親鸞八十四歲書寫之」こある。古來之を眞僞未決こして疑ふものもあるが、『敎典誌』には評して、元祖の御言なるここ疑ひなし、こ云うてある。さて本願や名號、名號や本願こは、因願こ果力この相成で、卽ち願力不二、本願や行者、行者や本願こは、願力こ往生この相成で、是は機法不二である。初めの本願こ名號この事に就て、

宗祖の當時に、間〻異解をも生じ、不審をも致せし者ありしと見えて、『末燈鈔』の中には「誓願名號同一事」といふ標題の下に、宗祖より弟子教名房に遣はされし消息が載せられてあり、又『歎異鈔』の中には誓願不思議に就ての御教示の一節が遺されてある。凡そ誓願と云ひ、本願と云ふ、並に是れ阿彌陀如來の四十八願中の第十八願の謂で、法藏菩薩因位の建立を云ひ、名號とは、阿彌陀如來正覺果上の嘉號、卽ち南無阿彌陀佛の謂である。本願と名號とは、鳥と鷺とのやうに色彩の相異りたものでもなく、玉と石とのやうに、物體の各別なものでもない。たゞ因願よりすると、果力よりすると、名目の異るのみで、造惡不善の吾人凡夫を攝取して、淨土に往生さゝんと誓ひたまへる本願が、成就した正覺の德用が南無阿彌陀佛であるからは願行具足機法一體の名號が吾人凡夫を攝取して、往生せしむるは、卽ち本願の遂行である。

曇鸞和尙が願力成就といふを釋して

本法藏菩薩の四十八願と、今の阿彌陀如來の自在神力と、願は以て力を成じ、力は以て願に就く、願は徒然ならず、力は虛設ならず、力願相符うて畢竟して差はず、故に成就と曰ふ

と示され蓮如上人は、

それ、五劫思惟の本願といふも、兆載永劫の修行といふも、たゞわれら一切衆生を、あながちにたすけたまはんがための方便に、阿彌陀如來御辛勞ありて、南無阿彌陀佛といふ本願をたてまし〳〵て、まよひの衆生の、一念に阿彌陀佛をたのみまゐらせて、もろ〳〵の雜行をすてゝ、一向一心に彌陀をたのまん衆生を、たすけずんば、われ正覺ならじとちかひたまひて、南無阿彌陀佛となりまします、これすなはちわれらがやすく極樂に往生すべきいはれなりとしるべし

とも、又

阿彌陀佛のむかし法藏比丘たりしとき、衆生佛にならずばわれも正覺をとらじとちかひましますとき、その正覺すでに成じたまひしすがたこそ、いまの南無阿彌陀佛なりとこゝろうべし、これすなはちわれらが往生のさだまりたる證據なり、されば他力の信心獲得すといふも、たゞこの六字のこゝろなりと落居すべきものなり

とも教示された。されば誓願によりて名號が成じ、名號によりて誓願が遂げらるゝ。誓願の外に名號なく、名號を離れて誓願はない。之を本願や名號、名號や本願と仰せられた。卽ち願力成就の謂である。後の本願と行者との相成不二といふは、佛の本願力のむなしからぬによりて、衆生が能く淨土に往生することができる。衆生の往生するによりて、本願力の虛設ならぬことが確定となる。されば若不生者の願力が衆生心中に徹到して、御たすけ一定といふ信心が發起され、行者が願力に一任して、決定して往生を期する安住心は、卽ち佛願力が攝取して捨てざるの活事實である。

『淨土和讃』に、

若不生者のちかひゆゑ、信樂まことにきいたり、一念慶喜するひとは、往生かならずさだまりぬ、

と云ひ、『安心決定鈔』に、

われらは今日今時往生すこも、わがこゝろのかしこくて念佛をもまうし他力をも信ずるこゝろの功にあらず、勇猛專精にはけみたまひし佛の功德、十劫正覺の刹那に、われらにおひて成じたまひけるが、あらはれもてゆくなり、弘願正因のあらはれもてゆくなれば、佛の願行のほかには、別に機に信心ひとつも行ひとつもくはふることはなきなり

と示されたが、皆今文と同意で、本願の外に行者なく、行者を離れて本願はない。之を本願や行者、行者や本願と仰せられた、卽ち機法不二の謂である。

かやうに願力相成機法不二の例證で、他力得生の教示が愈々明了に知らるゝ

後に『御本典』に示さるゝ昔日の聖文を擧げて、今の教示を證明せらるゝの御文が、

本願寺の聖人の御釋教行信證にのたまはく乃至報土の眞身を得證すとみえたり

とあるがそれであります。先に述るやうに、此御文に自ら兩重が分れてある。然り兩重に分るれども、肝要は、願力によりて往生を得るなれば、機受の要は、唯信心に在り、唯願力を信ずる信心にて、報土の往生が成就すると示さるゝのである。

得生の因緣を示さるゝ其要旨は、此上にすでに盡きたるが更に別譬を出して、前意を追釋せらるゝが最後の御文である。古代の說によるに、吾人の住する此土地面は不動で、唯太陽のみが回轉する、それで晝夜の分るゝは太陽の回轉背面によるといふ。今此說によつて、太陽の他の地界に在るとき、此地方は夜であるが、太陽が此界に向ふときに、夜あけて晝となる、卽ち太陽の出づるによつて夜は明るのである。それが如くに、佛光の照觸によりて、無明の疑心が消除されて、明信佛智の信心となるのである。されば南無阿彌陀佛にて往生一定と、佛力に乘託して、淨土の往生を期する身となること、偏へに是れ光明の照護によるのである。願力廻向、唯是れ他力であると、卑近な譬を以て、前意を追釋せらるゝが、最後の文意である。

得生の因緣を叙述させらるゝ一章、粗如此である。

## 第五章

一私にいはく

根機つたなしとて卑下すべからず、佛に下根をすくふ大悲あり、行業おろそかなりとてうたがふべからず、經に乃至一念の文あり、佛語に虛妄なし本願あにあやまりあらんや。名號を正定業となづくることは、佛の不思議力をたもてば往生の業まさしくさだまるゆゑなり。もし彌陀の名願力を稱念すこも、往生なほ不定ならば正定業とはなづくべからず。我すでに本願の名號を持念す、往生の業すでに成辨することをよろこぶべし、かるがゆゑに臨終にふたゝび名號をとなへすこも、往生をとぐべきこと勿論なり。一切衆生のありさま過去の業因まち〳〵なり、また死の緣無量なり、やまひにをかされて死するものもあり、つるぎにあたりて死するものもあり、水におぼれて死するものもあり、火に燒て死するものもあり、乃至寢け死するものもあり、酒狂して死するたぐひあり、これみな先世の業因なり、さらにのがるべきにあらず。かくの如きの死期にいたり

て、一旦の妄心をおこさんほかは、いかでか凡夫のならひ名號稱念の正念もおこり、往生淨土の願心もあらんや、平生のとき期するところの約束もしたがはゞ、往生ののぞみむなしかるべし。しかれば平生の一念によりて往生の得否はさだまれるものなり、平生の時不定のおもひに住せばかなふべからず、平生のとき善知識のことばのしたに歸命の一念を發得せば、そのときをもて娑婆のをはり臨終とおもふべし。そも〳〵南無は歸命、歸命のこゝろは往生のためなればまたこれ發願なり、このこゝろあまねく萬行萬善をして淨土の業因となせば、また廻向の義なり、この能歸の心、所歸の佛智に相應するとき、かの佛の因位の萬行、果地の萬德、こと〴〵く名號のなかに攝在して、十方衆生の往生の行體となれば、阿彌陀佛卽是其行と釋したまへり。また殺生罪をつくるとき地獄の定業をむすぶも、臨終にかさねてつくらざれども、平生の業にひかれて地獄にかならずおつべし、念佛もまたかくのごとし、本願を信じ名號をとなふれば、その時分にあたりてかならず往生はさだまるなりとしるべし。

前で已に言うたやうに、今鈔に五章ある中に、前四章は、宗祖聖人の法語を載せたので黑谷聖人より吾宗祖へ傳へたまふ一宗の要義、それを吾宗祖が如信上人へ時々話され、如信上人は之を覺如上人に傳へられて、其をそのまゝ記載されたのが、前の四章である。それで、第一章の首に、本願寺聖人仰云とし、第二章より第四章までは、同く又のたまはくとして、相傳のまゝなることを標示したまふた。而して此一章は今鈔の記錄者なる覺如上人が、上人自身の宗義の心得を表示せらるゝのである。それで、私にいはくとして前に揀んだ辭を安せられたのである。されども、上人の心得として各別なことであるのではない、全く如信上人より聞かされた宗祖聖人の遺訓である。それゆゑ、今章の大要は、前の四章に明された義理を總括し釋成して、一宗の要義平生業成の旨を示さるゝのである。

次に正しく宗要を明さるゝ中に於て、先づ法の勝益を擧て衆生に疑退することを誡められて、

根機つたなしとて卑下すべからず、佛に下根をすくふ大悲あり、行業おろそかなりとてうたがふべからず、經に乃至一念の文あり、佛語に虛妄なし、本願あにあやまりあらんや

と示された。此は安心と起行とに就て、本願大悲の深重なる法德を示して、往生に於ける疑慮怯退をなすに及ばぬことを敎へられるのである。根機つたなしとて卑下すべからず佛に下根をすくふ大悲ありといふは、一念の安心決得の相を明すので、此は善導大師の二種深信の釋意に據られたもの、根機つたなしとて卑下すべからずとは、卽ち機の深信の相で、佛に下根をすくふ大悲ありとは、其法の深信の相である、つたなしとは、卑拙で、根機の下劣なるを謂ふ、卑下とは、遲慮怯退の謂、善導大師は、「疑怯退心を生ずることなかれ」と云ひ、「源空聖人は、「たゞふかく本願をたのみてあへて卑下することなかれ」と仰せられた。

されば、無始よりこのかた、未來永劫、煩惱具足し罪業深重で、生死を出離することのかなはぬ下根の凡夫を所被として、攝受したまふが彌陀の大悲本願なりと信知すれば、自身の本分に安んじて、それがために出離生死を疑怯せぬが、機の深信の相で、今それを示されたのである。「佛に下根をすく

ふ大悲あり」こは、「根機つたなしこ卑下すべからず」こいふ所由で、彌陀如來は、決定攝取の本願力をもて、往生せしめたまふからは、吾人下根の凡夫も、定めて往生が得らるゝぞこ、信知するが、これ法の深信の相である。約言すれば自身の無能力に絆されず、大悲に安住するが、他力廻向の信心である行業おろそかなりこてうたがふべからずこは、信後報恩の行業の相を明すので、行業こは安心の上の起行作業のこと。善導大師の『禮讃』前序に、安心起行作業の三門を分て委く釋示された。起行こは所修の行體で、作業は能修の行相、信心決得の後に、念佛禮拜等の行を修するに、恭敬心をもて、餘行を雜へず、相續し行ずることで、皆己が分に隨ひて、三業行を修することである。『改邪鈔』に「他力の安心よりもよほされて、佛恩報謝の起行作業はせらるべきによりて、行住坐臥を論ぜず、長時不退に到彼岸のいひあり」こあるが、このことである。おろそかこは、疎略で怠惰なること、『和語燈』四に「念佛を疏相にまうせば」こ云ひ、又「行じながら疎にして明しくらし候へば」こ云ふ、皆同じ意である。うたがふべからずこは、行業の疎慢で勇猛ならぬによりて、往生を疑慮するので、此が三業によりて決定心に住せぬものゝ謂である。『御一代聞書』に、

こきゞ〳〵懈怠するこあるこき、往生すまじきかこうたがひなけくこもあるべし、しかれども、もはや彌陀如來をひこたびたのみまゐらせて往生決定ののちなれば懈怠おほくなるこのあさましさよ、かゝる懈怠おほくなるものなれども、御たすけは治定なり、ありがたや〳〵こよろこぶこゝろを、他力大行の催促なりこまうす、こおほせられさふらふなり

こある。この御文は、人の多く心得がたしこするこであるが、此は行業に勇猛ならぬ懈怠多きがために、往生いかゞの疑慮が出て來たのである。それは三業行の勇猛なるこ、懈怠なるこによらず、唯佛力にて往生せしめたまふここが、知られてないので、もはや一たび行業の精進なるこ懈怠なるこにかゝはらず、たすけたまふ彌陀の大悲が知られてみれば、往生は他力なりこ決定して、もはやうたがふここはないのである。

さればかやうに懈怠しては往生すまじきかこなけくここはない。懈怠すれば、それを緣こして、かゝる懈怠おほきものを、たしかに往生せしめたまふが、佛の强願力である、大慈悲であるこ、いよいよ御たすけ治定なりこよろこぶので、これが他力催促の大行ぢや、こ示されたのである。今うたがふべからずこのたまふも、亦かやうに心得てよろしい。『和語燈』四に

問て云、往生を願はぬにはあらず、願ふこいへごも其心勇猛ならず、又念佛を賤しこ思ふにはあらず、行じながら疎にして明しくらし候へば、かゝる身なれば、いかにも此三心具したりこ申べくもなし、されば此度の往生をば、思ひたえ候べきや、答て云、淨土を願へごも猛しからず、念佛すれごも心のゆるくなるこを歎くは、往生の志のなきには、あらず、志のなきものは、緩くなるをも歎かず、猛しからぬを悲まず、いそぐ道には足の遲きをなけく、いそがざる道には、これを歎かざるがごこし、好めば自ら發心すこ申すこもあれば、漸々に增進して必ず往生すべし

こあるは、今こ同意である。「經に乃至の一念の文あり」こは、宗祖聖人は、願成就文の乃至一念は、信の

一念とし、彌勒付屬の乃至一念は、或時は行の一念とせらる、それで今の文もいづれの經文と見てもうかゞふことができる。若し行の一念と見れば、付屬の經文を指さるゝとして、報恩の行業は疎なりとも、乃至一念と說きたまふ文より見れば、多念の稱名を要とするに非ざれば、一聲にてもよし、決して疑退すべきにあらずとの意である。若し信の一念と見れば、成就の經文を指さるゝとして、往生の決定するは、信心歡喜乃至一念卽得往生と說きたまへば、信ずる一念にして、多念の稱名を行じて後のことにあらざれば、報恩行業の疎なるを歎くべきにあらず、との意である。二義いづれでも宗義はよく伺はれるが、「一念をもては往生治定の時剋とさだめて、そのときの命のぶれば自然と多念におよぶ道理なり」とあるより推すに、信一念の意で示されたものと伺はる。「佛語に虛妄なし」とは、乃至一念と說きたまふ釋尊の金言に虛妄なしといふこと、「本願あに誤りあらんや」とは、下根を攝取する大悲の本願に、錯謬はないと示さるゝのである。

名號を正定業となづくることは、佛の不思議力をたもてば、往生の業まさしくさだまるゆゑなり、もし彌陀の名願力を稱念すとも、往生なほ不定ならば、正定業とはなづくべからず、われすでに本願の名號を持念す、往生の業すでに成辨することをよろこぶべし。

此より已前は、法の勝益を擧げて、衆生の疑退を誡め、此より已後は、正しく六字名號に就て、平生業成の義旨を明させらるゝ。此中に、初は正定業と言ふ義によりて示され、後は願行具足の意によりて明させらるゝ。初の正定業と言ふ義に就て平生業成の旨を明させらるゝ中で、先づ名號を正定業と名くる義理を釋顯さるゝが此御文である。此御文は前の第四章に「まさしく報土にむまるべき第十八の念佛往生の願因の名號をきくなり、安養往生の業因たる名號の寶珠をばうるなり」とある御言より來るので、名號を正定業と名くることは、本『散善義』深心釋の就行立信の下に、

一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近念念不捨者是名正定之業順彼佛願故。

とあるより出で、宗祖は『正信偈』に、「本願名號正定業」と言ひ、『銘文』に自ら釋して、「本願名號正定業といふは、選擇本願の行なり」とのたまうてある。今はこの名號を正定業と名けてあるによりて、それを釋して、吾人凡夫の往生の業事は、臨終をまたず、平生に成就することを示させらるゝが、この一節の御文である。

抑、名號を正定業と名くるこゝろを解釋せば、此に法體に於てするとの二義ありて、法體では、正選定業といふ意でありて、法藏菩薩が、吾人凡夫の往生の行を定めたまふとき、二百一十億の諸佛國中につき、諸行を選び捨て、念佛を選び取りて、本願となされた、換言すれば、衆生が三業に修するところの行をもて往生することゝせず、如來所成の功德にて往生せしめんといふ本願を建立せられた。それによりて成就したるが、今の六字名號なる故、今の名號は法藏の正しく選び定めたまへる行業なりといふが、正定業と名けらるゝ所以である。機受では、正決定業といふ意でありて、此れに亦一念の信心でいふと、多念の稱名でいふとの二義がありて。善導大師の六字釋に、衆生が歸命むこころに、佛體の功德が廻向せられて、往生の業事が成辨すと示さるゝは信むこころ

に往生の決定せらるゝやうに成就してあるといふことで、名號を正定業と名づけたはこの意である。宗祖の『一多證文』に、「弘誓を信ずるを報土の因とさだまるを正定の業といふ」と仰せられたも、亦同じ意である。此は信心に就て正定業の名を解釋されたもの。又源空聖人の『選擇集』に、「正定之業とは卽ち是れ佛名を稱するなり、名を稱すれば、必ず往生を得る、佛の本願に依るが故に」とのたまひ、宗祖が『銘文』に、「正定の業因はすなはちこれ佛名を稱するなり」と仰せられ、存覺師が『眞要鈔』に「南無阿彌陀佛をもて正定業となづく、乃至往生のまさしくさだまるたねは念佛の一行なり」とあるは、是れ稱名の上に於て名號の德を示さるゝので、行者の用心より言ふときは、自ら正定聚に住せし上の行業といふ意義である。

右の二義は、皆善導大師の御文に見えてありて、佛願の言によれば、正選定の業とすべく、一心專念の言によれば正決定の業となるものである。

名號を正定業と名づくる事は、佛の不思議力をたもてば、往生の業定まるゆゑなり等

さて如此に衆生の上に於て、信心と稱名といづれに於ても、正定業の名を釋されてあるが、今文の解釋は、其信心に於てするので「名號の不思議力をたもてば往生の業まさしくさだまる」とのたまふ。たもつとは、執持することで、『和讃』にも「恭敬の心に執持して」とある。執持は信心のことである。今鈔を名けて『執持鈔』と云ひ、明させらるゝ肝要は、平生業成の義趣である、然れば、平生の業事が成辨することは、佛の不思議力を執持する一念の信心によるからである。此處にあるたもつの言を、題號の執持と照して、よく〳〵心得られ度し、次に反顯して「もし名號を稱念すとも、往生なほ不定ならば、正定の業とはなづくべからず」とのたまふ。たとひ日に夜に、斷えず日夜稱名すとも、心に往生不定の思ひあらば、正定業たる名義にかなはざるゆゑ、如實の念佛者でないとなる。他流には、稱名の功德力で淨土に生まれんと願ふので、それで平生に定まるのでなくて、必ず臨終に業成することを望むことゝなる。かやうな心得は、名號正定業の義意には背くぞと、今それを揀んで、平生業成の眞宗義を示さるゝのである。彌陀の名願力といふことで、名號は本願より成就せる神力なるが故である。後に名號の利益を結んで、平生に往生の業事が成辨ふことを示されて「我すでに本願の名號を持念す、往生の業すでに成辨することをよろこぶべし、かるがゆゑに臨終にふたゝび名號をとなへずとも、往生をとぐべきこと勿論なり」とのたまふ。此は覺如上人が、自身の領解をもて、名號正定業の義を結んで、平生業成の宗義を成立せらるゝのである。持念とは、又は念持とも云ふ。執持と云ふに同じく、聞名の信心のことで、攝受衆生の名願力を領受せる信心の意である。蓮如上人が、眞宗御再興の勳功は、念持の意義を示さるゝに在りといふことは『遺德記』に出でてある。「かるがゆゑに、臨終にふたゝび名號をとなへずとも、往生をとぐべきこと勿論なり」とは、今鈔の初の章に「臨終まつことなし」とある平生業成の宗義を成立せらるゝのである。

されば、口業の稱名を待たずして、往生の決定するといふことは、これが佛願力の妙益で、卽ち名號の不思議力なのである。衆生の善をたのまず、惡を妨とせず、往生の決定するは、これぞ他力の妙益

で、すでに他力なるがゆゑに、名號の威德を聞く處に、業事が決定す。此を平生業成といふ。平生業成は他力往生である。他力往生なれば「この一念臨終までとほりて往生する」で、「いのちのぶれば自然と多念におよぶ道理」で、信決定の上は、善惡苦樂の世事に動搖せらるゝことなく、却てそれを助緣として、得益を思ひ、大悲を仰ぎ、自身の所作に拘泥さるゝことなく、悠々として、權威あり、趣味あり、平和なり、清淨なりで、念佛相續して、順次生の大果を期することゝなるが、如實修行の念佛者である。

次に平生業成を明させらるゝ中に於て二段ありて、初は具さに死の緣は無量なることを擧けて臨終業成を遮したまふ。文に云く

一切衆生のありさま、過去の業因まち〳〵なり、死の緣無量なり、やまひにをかされて死するものあり、つるぎにあたりて死するものあり、水におぼれて死するものあり、火に燒けて死するものあり、乃至寢死するものあり、酒狂して死するたぐひあり。これみな前世の業因なり、さらにのがるべきにあらず

あとる。これまでは過去の業因が、人によりて同じからぬゆゑ、果報も亦異りて、臨終の因緣千差萬別であることを示させらるゝのである。この事は、『口傳鈔』にも兩處まで出てある。對照せらるべし。又文に云く

かくのごときの死期にいたりて、一旦の妄心をおこさんほかは、いかでか凡夫のならひ、名號稱念の正念もおこり、往生淨土の願心もあらんや、平生のとき期するところの約束もしたがはゞ、往生のぞみむなしかるべし。

とある。これが臨終業成を遮せられたので、一旦の妄心とは、臨終捨命の虛妄分別の心のことで、怨敵の爲に害せらるれば、あらにくやと思ひ、火に燒け水に溺るれば、あら苦しやと思ひ、或は病氣に苦悶しつゝ死し、或は無心に寢死する抔の場合にて、凡夫の身としてどうしてぞ名號が稱へられ、願心を發されやうぞや。臨終に妄心起りぬれば、凡夫のならひとして正念に名號も稱へられず、眞實の願心も起らぬは、道理必然である。

よりて平生の時より臨終來迎を期するとも、其の約束要期が相違して、往生を得ざるべしとのことなり。

爾れば、死の緣不定の凡夫としては、臨終業成の希望は、虛しくして成就し難しと示さるゝのが、この一段の意でありて、たゞ平生業成の他力眞宗こそ斯る死の緣無量で定りなきものをして、能く往生の大益を遂けしめたまふ妙法ぞと示させらるゝのである。

後に、正しく平生に約して業成の相を示させたまふ。その文に云く

しかれば平生の一念によりて、往生の得否はさだまるものなり、平生のとき不定のおもひに住せばかなふべからず、平生のとき善知識のことばのしたに歸命の一念を發得せば、そのときをもて婆婆のおはり臨終とおもふべし

とある。此は上の所明を承けて、平生に彌陀に歸する一念の信心發起する時、往生を定得す、是れ平

生業成の宗義ぞと成じたまふのである。黒谷聖人は『和語燈』二に出づ）

心の善惡をもかへりみず、罪の輕重をも沙汰せず、只口に南無阿彌陀佛とまふせば、佛の誓に依て必ず往生するぞと決定の心を發すべきなり、其決定の心に依て往生の業はさだまるなり

と仰せられ、宗祖聖人は『信文類』の中に）信樂一念の言は、「廣大難思の慶心を彰す」と云ひ、一念は一心で、「一心は清淨報土の眞因なり」と斷め、「眞心を獲得するものは、横に五趣八難の道を超へ、必ず現生に十種の益を得」と示させられ、又『愚禿鈔』の中に）「本願を信受するは前念命終、卽得往生は後念卽生」とのたまひ、又『和讃』の中に）「金剛堅固の信心の、さだまるときをまちえてぞ、彌陀の心光照護して、ながく生死をへだてける」とも述べさせられた。　如是に相傳の宗義を承けて、此に平生業成の名を附け、以て他流の臨終業成に簡ばるゝのが、此一段の意である。　然るに若し臨終に聞法せば、臨終に往生の業を成ずべし、强ちに平生の時に限るではない。　故に『黒谷傳』五には「往生の業成は、臨終平生にわたるべし、本願の文、簡別せざるがゆゑなり」とあり。『御本典』には、「大信海を按ずるに、臨終を云はず、平生を云はず」と仰せられ、『改邪鈔』には、「宿善開發の機として、他力往生の師說領納すれば、平生をいはず、臨終を論ぜず、定聚の位に住し、滅度にいたるべき條、經釋分明なり」と示された。

臨終と、平生と、時節に定めのあるのではない、たゞ法に遇ふて聞信する立ぎころに業成するので、眞にこれ他力治定なのである。　それを特に平生業成と名けて示さるゝものは、自行の結着する最後念、臨終ならでは不可とおもふ臨終業成を期する他の謬れる自力宗に簡別せられたのである。　それで「平生のとき不定のおもひに住せばかなふべからず」とは往生を定得せざることである「平生のとき善知識のことばのしたに」等とは、聞信の一念發得しなば、其とき法德として、生死の迷界を出でゝ、涅槃の樂鄉に入る身となると示さるゝので、臨終とは、『最要鈔』に身心二命終の別あることを示さるゝ中の、心の命終のことで、たのむ一念のこころに、無始已來の迷心の盡くるとの御示しである。

有相の凡夫が、信む一念の處に、往生淨土の業事成辨といふことは、實にこれ大乘圓頓の妙益で之を淨土眞宗とは名くるのである。

從來六字名號に就て、平生業成の宗義を明させらるゝに二段ありて、此より前は「名號を正定業と名くる」ことに就て示し、此より後は「名號に願行を具足する」とある釋意によりて述べさせらるゝので、卽ち南無歸命の一念に、他力廻向の願行を具足して、必得往生の大益を得る、豈平生業成に非ずや と示させらるゝのである。　文に云く、

そも〳〵南無は歸命、歸命のこゝろは、往生のためなればまたこれ發願なり、このこゝろあまねく萬行萬善をして淨土の業因となせばまた廻向の義あり

と、此は南無の二字に詮る歸命と發願廻向との釋の意で、

この能歸の心、所歸の佛智に相應するとき、かの佛の因位の萬行果地の萬德、こと〴〵くに名號のなかに攝在して、十方衆生の往生の行體となれば、阿彌陀佛卽是其行と釋したまへり

と、此は阿彌陀佛の四字に詮る卽是其行の釋の意である。　抑、此六字の釋は、本善導大師の『經疏』に

出でゝ、通論家の謬解を破ると同時に、弘願眞宗の他力廻向の妙趣を顯さらるゝ妙釋で、實に是れ一家の要義である。宗祖は『行文類』及び『銘文』に具さに釋したまひ、蓮師は『勸章』に數次之を述たまひ、殊に善導のいはくと標けて具に疏文を引いて釋述せらるもの五通もある。今此鈔釋は、宗祖の意を通して疏釋を宣述し、以て蓮師の依憑となりたまふのである。拙者の著述に『六字釋講錄』なる一小册子あり、顯道書院より發行せり、疏文は勿論のこと、『行文類』『銘文』今鈔、『勸章』に通じて、略其の釋意を解きておけり。少し讀みがたき嫌ひはあらうが、一讀せらるれば光榮である。

さて初の南無の二字釋の中で、南無は歸命といふは、疏釋の「言南無者卽是歸命」の謂で、南無の二字には、歸命と發願廻向との二義あるも、歸命といふが南無の當義を詮すゆゑ卽是と云ひ、發願廻向といふは、歸命の中に存する意義であるゆゑ、亦是之義と云ふたもので、今はその意もて釋述さるゝ、それで先づ歸命といふをもて南無の意義を定め、その歸命よりして發願と廻向とを解釋されるのである。歸命とは、宗祖が『銘文』に

歸命はすなはち釋迦彌陀の二尊の勅命にしたがひめしにかなふこまふすことばなり

と釋されてある。此は二河白道の喩意によりて歸命の意を解いたので、歸命とは歸順命とは勅命で、釋迦彌陀二尊の勅命に歸順する、卽ち衆生の願力をたのむ信心を歸命とはいふ。二河譬に、西岸の彌陀如來は「汝一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護ん、衆て水火の難に墮んことを畏れざれ」と招喚し、東岸の釋迦世尊は、「汝此道を尋ねて行け」と發遣したまふ。此が卽ち二尊の勅命で、仰で釋迦の發遣して指へて西方に向へたまふを蒙り、又彌陀の悲心招喚したまふに藉て、今二尊の意に信順して、水火二河を顧みず、念々に遣るゝことなく、彼願力の道に乘ずる」とは、衆生が二尊の勅命にしたがひめしにかなふた相である。卽ち願成就文の「聞其名號信心歡喜」で、歸命は卽ち信心である、斯の佛勅に歸順し、佛力を信用するの心は、卽ち決定して淨土の往生を期するの心なるゆゑ、其意義を開いて發願といふ。今其を次に「歸命のこゝろは往生のためなればまたこれ發願なり」と示された。『論註』に淨土論偈の「願生安樂國」を釋して、「天親菩薩歸命の意なり」というてある。又源空聖人は、『一枚起請』の中に、「往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申せば」等と敎へられた。されば、信ずるも行ずるも、期する所は、往生極樂の爲より外はないのである。『銘文』に發願廻向を釋して

亦是發願廻向之義といふは、二尊のめしにしたがうて、安樂淨土にむまれんとねがふこゝろなりとのたまへるなり。

とある。發願廻向を釋すに、先づ歸命の意義を持込で、「二尊のめしにしたがふて」と云てあるが、これ發願廻向の意は、歸命の中に存するので、勅命に歸順する所に、發願も廻向も自然に相具して、たのむ外に別に存するこゝろでなきことを示さるゝので、これでもて衆生の領受心はたゞ一心で、三心別發でなきことが知らるゝ。而してこの『銘文』にては、發願廻向といふはと牒して、安樂淨土にむまれんとねがふこゝろなり」と釋したまうて、たゞ發願の意だけ釋いて別に廻向の意を示してない、今この鈔では、彼の『銘文』に意は存しても文に見えぬところを開顯して、

このこゝろあまねく萬行萬善をして淨土の業因となせばまた廻向の義あり

と釋述させられた。このこゝろとは、或は歸命を指すと云ひ、或は發願を承くと云ふ、何れも好し。

「あまねく萬行萬善をして淨土の業因となせばまた廻向の義あり」とは、此れを解釋するに古來二義あり。一義にては、衆生の歸命の心に具する所の發願には、如來の方より萬行萬善を與へて、淨土往生の業因となさしめたまへば、他力廻向の義ありと云ふ意とす。なせばとは、しめの反で、なさしめばといふことで、他力廻向を示す詞と伺ふたのである。一義にては、衆生が歸命するところに、淨土に往生せんと願ふこゝろあるは、是れ發願で、此發願は物持たずの虚願ではない、如來が萬行萬善を名號の中に攝めて、衆生に廻施したまふゆゑ、衆生は此廻施したまふ名號の行をもて我行として、淨土に生れんと願ふ道理あれば、また廻向の義ありと示されたものとする。『改邪鈔』に「彌陀他力の信を以て凡夫の信とし、彌陀他力の行を以て凡夫の行とす」とあるに照して、其意を得べきこと。私が思ふに、前義は法に約して解き、後義は機に就て釋く、並に宗義を顯しておる、『御一代聞書』に「歸命のこころやがて發願廻向のこゝろを感ずるなり」とあるを、『山科連署記』には感の字が含の字に作つてある。前義は自ら感の字の意に準じ、後義は亦含の字の意に合ふ。然り宗義よりせば並び存すべきであるが、今の文勢は、機に約する後義が親しきやうにおもふ。

南無の義歸命と發願廻向との意を、近く譬喩を借りて云はゞ、都に住む親父が、邊鄉に在る幼き其の兒が、上京せんとの志しありて、而も行程に必要な資金に乏く、内外の難に障へられて、進行するこ



との不可能なことを恐れをるを承知し、其兒の希望を遂けしめんとて凡ての旅費を送ることを知したとき、兒と同住する慈母が、親父の意を保證して、懇に出立を勸めなば、幼なき兒自身は、たゞ其父母兩親の言を信みて、決心して上京の行程に立つであらう。今釋述せらるゝ南無の義が、卽ち其れと同じことで、兩親の言を信みたるは、是れ二尊のめしにしたがふ歸命で、めしにしたがふ歸命は、卽ち京都に向て行んと欲ふので、是が淨土に往生せんと願ふ發願で、京都に向つて行んと決心する欲願の心は、物持たぬ空手ではない、必ず父より送り來れる路費資金は已に我物として十分に用意されてそれでもて内外の諸難に障へらるゝことなき强き堅心が備はるので、これが今の廻向心である。しかれば幼兒の安心して上京の願望を達するものは、偏へにこれ兩親の保護力で、この保護の威力を信みたるが、幼兒の安心であると同じく、釋迦の發遣彌陀の招喚、衆生はたゞこの二尊の大悲をたのむのみ、之を歸命と云ふ。この歸命のこころに、自ら發願廻向の義ありと示させらるゝが、この南無の二字釋であります。

後に、阿彌陀佛の四字卽ち卽是其行の釋此亦『行文類』及び『銘文』の祖釋に本づきたもので、この能歸の心とは、次上に明された南無歸命の心、所歸の佛智とは、阿彌陀佛卽是其行で、因位で云はゞ本願、果上で云はゞ佛智で、卽ち願力である。相應するとは如實修行相應とある相應で、『論註』に比へて函蓋相應の如しと云てある、卽ちたのむ歸命の心は、たすくる佛智に相應するので「如實修行相應は信心ひとつにさだめたり」の意である。さて彌陀如來因果の諸德は、悉く皆その名號の德となり

て、それが十方衆生の往生の行德として、衆生の聞信するところに廻向せられ、それが衆生の所有となる、これを阿彌陀佛卽是其行とはいふぞと釋述させらるゝのである。『往生要集』には、淨土の依報を歎じて

凡そ八方上下無央數諸佛國の中には、極樂世界の所有功德を、最も第一となす、二百一十億の諸佛淨土の嚴淨の妙事を以て皆此中に攝在す

と云ひ、『選擇集』には、選擇稱名を辨じて、

彌陀一佛所有の四智三身十力四無畏等の內證の功德、相好光明說法利生等の一切外用の功德、皆悉く阿彌陀佛名號の中に攝在す、故に名號の功德最も勝となすなり

と云うてある。今文に因果の功德ことゝく名號の中に攝在すとのたまふ。其の本づきたまふところ知るべし。

されば歸命の一念に願行が具足す、故に必得往生の益あり、必得往生といふは、當來に必ず往生すべき身と定まることで、それがたのむ一念の處に定まるとせば、豈平生業成に非ずして何ぞやと、示させらるゝが、この一段の意である。

正しく名號に就て平生業成の義を明すこと上に訖つて、此より後は、上來明したまふ意を結びて示させらるゝ、中に二節あり。初に

また殺生罪をつくるとき、地獄の定業をむすぶも臨終にかさねてつくらざれども、平生の業にひかれてかならずおつべし

とあるは、此れは眞宗の平生業成の大益を結成せんとして、反對に惡業に例を借りたもので、殺生罪の惡業は、臨終をまたず、平生作業の時に、墮獄の業道成辨することを例にとりて、平生業成の宗義を結成せらるゝのである。

後に

念佛もまたかくのごとし、本願を信じ名號をとなふれば、その時分にあたりてかならず往生はさだまるなりとしるべし

とあるは、此は正く平生業成の義を結成せらるゝので、卽ち殺生罪の平生に業道成辨するに反例せらるゝ御文である。「本願を信じ名號をとなふれればその時分にあたりてかならず往生はさだまる」とあるは、正定業と名けらるゝ念佛に信と行とが具するゆゑに、平生の時に本願を信じ名號をとなふれば必ず往生は定まると、のたまふたもので、以て臨終業成に揀ぶので、卽ち臨終にふたゝび信ぜずとなへずとも、平生の時に信じ行ずるなら、それで業事成辨するぞとの文意である。信じ稱ればその時分に往生が定まるといへば、稱へて後に往生が決定す、唯信ずるのみにては未だ定まらぬやうに見えて、信ずる一念に往生定得といふ一家の定格に相違するやうにあれども、此れは本願に準じて受法の全相に就て平生業成の旨を示さるゝので、「その時分にあたりて」とは、平生に信じ稱ふるその時分に於て必ず往生は定まるので、臨終を期するに及ばぬと、前の例に合して、以て臨終業成に

揀ばれたものである。次前の章に「信心をおこして往生を求願するとき、名號もとなへられ、光明もこれを攝取するなり」とありしと同じこゝろである。彼處でも解釋せしゆゑ、對照せられたし。

此の最後の一章を、上來大に三段に分ちて講話した。初に、先づ法の勝れたる利益を擧げて、衆生の疑退するを誡められ、次に、正しく名號に就て、往生の業事成辨するよしを明され、後に、平生業成であるぞと結示せらる。此の三段である。

今鈔は、五箇の一點書より成る。即ち通じて五章あり、中に於て、前四章は、宗祖聖人の教示、後一章は覺如宗主の自說で前に宗祖の遺訓を擧げて、後に自ら是れが平生業成の眞宗なりと示させらる、此れを此の執持鈔の詮示とする。

眞宗の簡要、衆生の往生は、彌陀願力の爲さしむるに由る、故に衆生が願力を信ずるところに、往生が決定す、之を平生業成といふは、他力往生の義を顯すことゝ知るべし。

一部五章、その要此に在り、覺如宗主の、末世の吾人を益したまふ。その恩德の尠少ならざる、豈感戴報謝せざるべけんや。

奥書に云く、

一本無「此題號」、而有嘉曆元年及曆應三年所書之跡。其一に曰く、

嘉曆元歲丙寅九月五日、老眼染「禿筆」、是偏爲「利益衆生」也、釋宗昭五十七 其二に曰く、

先年如「此予染「筆與「飛彈願智坊「訖」、而今年曆應三歲庚辰十月十五日、隨「身此書」上洛中、一日逗留、十七日下國依「於燈下」、「老筆留」之、爲「利益」也、宗昭七十一

右嘉曆元年は、後醍醐天皇の即位八年で、今茲大正四年より五百十年前であり、曆應三年は、嘉曆元年より十四年後である。

執持鈔一部、此に略して講話し訖る。不徹底の廉定めて多からん、薄學無德の致す所慚愧に堪へず。南無阿彌陀佛々々々々々々

（大正二年三月より同四年一月まで雜誌『法味』連載）

# 五　一乘眞實の利益

爾者乘「大悲願船」、浮「光明廣海」、至「德風靜」、衆禍波轉」、卽破「無明闇」、速到「無量光明土」、證「大般涅槃」、遊「普賢德」也。

## 一

本文は、宗祖聖人が編輯したまへる『敎行信證文類』第二の中に出てある。抑『敎行信證文類』は、眞宗の御本書と崇敬したてまつる寶典にて、聖人が自ら清淨なる愉快なる光輝ある威力ある信仰を披瀝して、有緣の衆生に告白し、衆生をして其の信仰に一同ならしめんとの勸說である。

聖人は、選擇本願は淨土眞宗なり」と宣ふたが、選擇本願とは阿彌陀如來の發願四十八ある中の第十八願のことで、第十八願の法が卽ち淨土眞宗なのである。聖人は、第十八願の本願を信じて、安心

立命の身となりたまふた、即ち身心を擧げて第十八願に安住し、全然淨土眞宗となりたまふたのである。換言すれば、第十八願の果の成つたが阿彌陀佛で、阿彌陀佛は第十八願の實行者である。如來の本願力が、能く聖人の心地を照し、聖人の信仰眼が、能く如來の本願力を觀て、如來の本願と、聖人の信仰と能く相契うて、毫も違逆することなし。否、彼此一體機法不二の妙趣が現はれたのである。その聖人の信仰眼に映りたる、本願他力の淨土眞宗を、有緣の吾人に告白して、吾人をして聖人の信仰に一味ならしむるものが『敎行信證文類』の御本書である。されば、覺如上人は「敎行信證文類は、聖人の己證、當流の肝要なり」と嘆め給ふたことである。さて文類に六篇ありて、其の第二篇は、他力廻向の眞實大行、即ち南無阿彌陀佛六字名號の威德を開示せらるゝのである。中に於て此に擧ぐる所の御文は、一乘眞實の利益を結歎なさるゝ御文である。次前に『大經』の彌勒附屬の一念得大利の文を釋して、名號大行の利益を示したまふ。此の文は、その釋文の後に於て、右の經意を結歎したまふ文である。

## 二

今文八句先づ圖を造りて示さん。

- 能得因
  - 乘大悲願船
- 所得益
  - 浮光明廣海
- 現在
  - 總
  - 浮光明廣海
- 別
  - 生善至德風靜

- 當來
  - 滅惡衆禍波轉ス
- 提出能得因
  - 卽破無明闇
- 正示所得益
  - 總
    - 速到無量光明土ニ
  - 別
    - 智體
      - 證大般涅槃
    - 悲用
      - 遊普賢德

前四句は、比喩を帶びて讃め、後四句は、專ら法に就て嘆めたまふ。通じて之を云へば、第一句は、吾人が他力に乘托する安心で、これが能得の因、後七句は、其の安心所得の現在未來の利益である。他力に乘托するが卽ち佛力が衆生に領受されるのであるから、托法は是れ受法するのである。一たび他力に托して佛智を領受するや、現在當來の利益は、滿足して缺ぐることはない、之れを得益といふのである。

## 三

初に「乘大悲願船」と仰せられたは、第十八願のこと。卽ちこれ名號の大行である。聖人は、善導大師の六字釋を述べて後に、名號を聞くといはずして「願力を聞く」とのたまひ、聞其名號を釋するに佛願を聞く」とのたまふ。佛願と云ひ願力といふは、卽ち六字名號のことで、因より云へば本願、果より云へば名號で、因願は果力を成じ、果力は因願に就く、願と力と相符うて畢竟じて違はぬ。故に、聖人は「本願や名號、名號や本願」とのたまひ、中興上人は「信心獲得すといふは第十八の願をこゝろうる

なり、この願をこゝろうるといふは、南無阿彌陀佛のすがたをこゝろうるなり」とのたまふたことである。

船とは、名號のことを喩へ顯はしたまふので、船が能く物を載せて速に彼岸に到るがごとく、名號は能く衆生を載せて涅槃の岸に到らしむるのである。龍樹大士は、自力の得道を難行道となすに對して、他力の願生を易行道となし、それを喩へて、水道の乘船は、則ち樂しきが如し」とのたまふた。彌陀佛力は、衆生の善惡智愚を云はず、同じく之を攝受して、彼岸に運載す。衆生は唯佛力に乘托するのみにて、微塵の苦勞もなくして、安穩に速疾に成佛の岸に達することを得る、之を乘船に喩へて顯はしたまふのである。法然上人は「阿彌陀佛は、惡業の衆生を救はん爲に、生死の大海に弘誓の船を浮べ給へるなり、喩へば船に重き石、輕き麻がらを、一つ船に入れて向の岸にとつくるが如し」との給ふた。衆生成佛の因たる願行は、如來の方に成就して、衆生が佛力に乘托する時、その願行が衆生の所有となりて、速かに無上菩提を成ぜしむるに喩へ給ふ。されば他力攝取を船に喩へ給うたものである。

乘ずるとは信むこと、船は能く物を運載すと知る、故に船に乘るや己が功力を用ひず、只その運ぶまゝに任す、之が乘托の相ぢや。彌陀の名號は、或は願行具足ともいひ、或は機法一體とも釋してあるが、つまり能く衆生を攝取して、淨土に往生せしむるの威德を具足せるが名號である。中興上人は「阿彌陀佛のむかし法藏比丘たりし時、衆生佛にならずばわれもまた正覺ならじとちかひたまひて、その正覺すでに成じたまひしすがたこそ、いまの南無阿彌陀佛なりとこゝろうべし。これすなはちわれらが往生のさだまりたる證據なり。さればわれらが往生すべき、他力の信心を獲得すといふも、たゞこの六字のこゝろなりと落居すべきものなり」との給うてある。衆生攝取の名義をきわけ、如來の攝受に一任して、疑ふことなく、慮ることなく、其威德に安住せるが、これ乘ずるの相である。即ちたすくるとある名願力に、たすけたまへとのたむこと。されば乘ずるとは、信ずることをいふのである、この乘ずる即ち信ずると云ふが、衆生の發起するところではない、全然名號威力の然らしむる所なるゆゑ、他力廻向の大信とは云ふのである。

次に「浮光明廣海」とあるより以下は、現在未來の利益を得ることを示し給ふ。中に於て、この下の三句は現在の利益で、其中此一句は、總じて現益をいひ、次の二句は、この句意をわけて示し給ふのである。さて此句の意は、光明攝取中に安住すること、光明は無量にして十方國を照す、威德無窮にして及ぶ所際りなし、之を際限なき海に喩へて、光明の廣海といふ。浮ぶとは、海の喩に應じていふ。光明中に入り佛力界に住するの相をいふのである。

## 四

抑も光明に二ありて、一を心光といひ、一を色光といふ。又は智光放光ともいふ。心光とは佛心の明かなるを云ひ、即ち佛の智慧を光明といふのである。色光とは相好より放つ所の顯色をいひ、即ち放つ所の色相の明朗なる光明といふのである。心光の智慧は、衆生內心の所知で、外相色光は

衆生肉眼の所見である。曇鸞大師は「光明は智慧の相なり」と宣ふた。外相の色光は内心智慧の表現で、内に明かなる智慧ありて、外に顯赫たる色光を放つものである。すれば木畫の佛像に、相好より光を放ちたまふ形容を拜見するに就ても、内心智慧の光明なるに想ひ到り、深く信仰を捧げねばならぬことである。されば佛の光明中に入ることは、佛心の智慧の中に入り、佛力保護の範圍内にすむことである。

我能く汝を護らんといふ佛智の威力は、固より十方微塵世界を照して障碍なきも、衆生が之を信ぜざれば、自ら碍へて攝受衆生の佛智を見ず、故に佛力保護の範圍外にあるのである。世尊は之を「不了佛智、疑惑不信」と說き給ふたことである。曇鸞大師は、之を喩へて「日光は四天下に周けれども、而も盲者は見ず、見ざるはこれ盲者の過にして、日光の失にあらず」と宣ふたことである。吾人今や宿善開發して、本願の名號をきゝ、一念顧慮の疑なく、攝受衆生の佛力を信みて往生安堵の心に住す、これすなはち早や佛智中に投入し、其の保護範圍の内に安住したのである。

思ふに、一たび光明中に入るや、吾人の心身は全然無限の佛力に一任したのである、起きて人事に從ふも、臥して安眠に就くも、進退出入みな佛智中に在り。俯して過去を顧れば、無始已來未決の宿題たる出離生死の最大事件は、已に根底より快く解決されて、一點不安の念なく、仰いで當來を望めば、無上の佛界は、はや目睫の間に迫れり。曠劫多生、徒らに望みて未だ得ざりし、悲智圓滿の妙果は、已に手中に握り得たるの感がある。悠々たる凡夫も思うて此に至れば、豈大慶喜心なからんやである。聖人はこの情境を讃述して「無始流轉の苦をすてゝ、無上涅槃を期することゝ、如來二種の廻向の恩德まことに謝しがたし」とのたまうた。實に然うぢや、願力に托して光中に入るの身は、近き將來に於て無始の迷苦を離るゝのである。

今現に未來の無上佛果を期しつゝ、日を送り夜を明して居るのである。慰安、快樂、人生何物か之に例ふべき。この慶喜の心が、吾人慣習の非行を顧みて慚愧となり、よく煩惱を抑へ、よく罪惡を誡むるの動機となるのである。聖人は「如來の廻向をたのまでは、無慚無愧にてはてぞせん」とのたまうた。實に如來廻向の德に催ふされ、自然に自の過失を知り、自ら誡むることゝなるのである。又煩惱の盛なる罪惡の重きに關らず、必ず攝受して捨てぬといふ法德の廣大なることを望めば、煩惱中に猶慶喜の心が湧出でゝ、自ら勵みて道を行ひ德に進みて、知らず識らず帝の則にかなふことゝなる。中興上人は、この情態を敎へて「萬事に付て、よきことを思ひ付るは御恩なり、あしきことだに思ひ捨たるは御恩なり、捨るも取るも、いづれも〳〵御恩なり」とのたまうたことである。天災地變、不幸凶事の出來事ありて苦痛に沈み、悲境に泣き、陰鬱の情、憂愁の感、人生何物を以てするも、慰安の道なく、氣力回復に方法盡きたる時、一念光明中に在るの身なることに想到して、此に佛恩の深重なることを憶念せば、一朝忽然として悲苦は轉じて愉快となり、陰鬱は消て氣力を起すのである。不平あり天を怨み人を訴ふもの、來つて眞宗の法義を聞け、心身安靜にして、復不平なし、憂苦あり、自己に泣き家族に託つもの、來りて佛力中に住めよ、日夜快樂にして復憂苦なし、中興上人が佛法には、萬、

かなしきにも、かなはぬにつけても、何事につけても、後生のたすかるべきことを思へば、よろこびおほきは佛恩なり」とのたまうたは、この境遇の謂で、斯やうな安心にて世間に處し出でゝ公事に盡し、人て私事に勤む、各その天職に從ふ、百般の事、適くとして不可はない、これ願力の德よく世間に優游するのである。光明の力よく人事に活動せしむるのである。嗚呼、眞實の氣力、清淨の愉快、心廣く體胖なりの情境は、偏へにこの光明の廣海に浮んで、無限の佛恩中に安住するものゝことである。

## 五

次に「至德風靜」とは、無上大利の功德が、衆生の身に具はることを云ふのである。聖人が、他力の信心を得るものには、現生に十種の益ありとして列示したまふ中では、これは第二の至德具足の益で、次に衆禍の波轉ずとは、其第三の轉惡成善の益に當るのである。抑『大經』には、聞信の衆生に對して、攝取不捨の益を說き、龍樹大士は「入必定」と釋し、曇鸞大師は「入正定之聚」と述べたまふた。同じくこれ第十八願の若不生者の生に、現當二益ある中の現在の利益を示させらるゝのでありて、それを或は光明攝取と說き、或は入正定聚と述べさせらるゝのであるからは、十益は或は第六の心光攝護の一を、餘の九に開いたものとも云ふべく、或は第十の入正定聚の一を開いて餘の九となしたるものとも云ふべきである。それで今文は、前の光明の廣海に浮ぶは、彼十益の中の心光攝護に當るから、之を現益の總とし、この至德の風靜と、次の衆禍の波轉ずとを、現益中の別として、心光攝取の相を分つて、此の下の二句として示したまふものと伺ふのである。

無上大利の功德、卽ち佛果を開く願行を至德といふ。風靜とは、喩に就て云ふ。上の海の字に應ずるのである。靜とは、安靜で、噪動の反ぢや。自餘の修善、不如實の稱名は、己が功を勵み得生を求む、常沒の凡夫、一時煩惱百千間で、懈怠多く、精進稀れに臨終に及ぶまで、不安の念、片時も止むなし。此噪動不安の作善に對して、他力廻向の大行を風靜といふ。攝受衆生の佛願力に任して、往生治定する一念に、名號の德卽ち法體成就の願行が衆生の有となりて、佛因此に圓滿する、之を至德具足と云ふ。『和讃』に「阿彌陀佛の御名をきゝ、歡喜讃仰せしむれば、功德の寶を具足して、一念大利無上なり」とも、又「五濁惡世の有情の、選擇本願信ずれば、不可稱不可說不可思議の、功德は行者の身にみてり」とも讃述したまひ、中興上人は大善大功德を一念に彌陀をたのみまをすわれら衆生に廻向しまします」と仰せられたことである。此の如くたのむ一念の時に、願行を領受して、佛因滿足し正定聚に住するがゆゑに、煩惱心中にも、斷じて往生に疑ないのである。存覺上人は「三毒の煩惱はしば〳〵おこれども、まことの信心はかれらにもさへられず、顚倒の妄念はつねにたへざれども、さらに未來の惡報をまねかず」とのたまふた。風靜の相は、此にて知らるゝ。これは法德に就ていふのである。又たのむ一念の時に、己が有となりし功德が、一生の間、口頭に流れ出づる、之が多念相續の稱名である。已にたのむ時、往生の業事成辨した上は、多念の稱名は、毫も生業に擬ふ念はない、千聲多しとせず、一聲少しとせず、唯佛恩の深重なるを仰ぎて、之を吹聽し之を感謝するのみ、稱へて稱ふる功を認

めねば、唯これ法體の自運願力の表現のみ、故に、一聲十聲百千萬聲、多少の別はない。法然上人はこの意を「一念を以て一無上となし十念を以て十無上となす、乃至念佛恒沙なれば、無上功德まさに恒沙なるべし」と釋せられたことである。聲の多少で功德に別あるものは、往生不安の疑念頭を去ることなし。名願力を仰ぎ、光明中に住するものは、自の功に執せず、多少を認めず、大慶喜心、能く德海を念ず、之を至德風靜といふ、これは機相に就て云ふのである。

## 六

内はこれ一心、攝受衆生の願力に疑なし、煩瑣な世事に汲々たる心底にも、念うて此事に至る、毫も疑懼の雜はる跡を見ぬ。褥裡で夜半夢覺むるとき、無端も佛恩に想ひ到る、憶念相續、毫も間斷の憂はない。日夜煩惱心中に、猶この始終一貫の堅き心がある、豈他力廻向の大信ならずや。これこの一念が、外に口に現はるゝ、之が一行である。唯名號法を念じて、毫も不足の念なく、出離の大事は勿論、處世の上にも心身滿足して、專ら佛名を稱へつゝ、月日を送る、之が專修正行である。然れば名願力に全托して、其保護範圍中に滿足して、此世の幸福を得つゝ、遙かに當果を期するもの、これが一心一行の相である。然り稱名一行を修むといへばとて、絕えて三業行なしといふではない。すでに口に德海を念ずるものは、進んで佛前に在るや、隨時隨分の相應行なかるべき、退いて世務に從ふや、信徒の行儀全く忘却し去りて口業の稱名と沒交渉の所作あるべき。上祖高祖、覺師、蓮師が、隨時の起行を勸說せらるゝもの、みなこの意より出るのである。若しは佛法行、若しは世間善、みなこれ稱名に隨伴せしものにして、稱名がすでに願力を仰信する如實の大行であるからは、餘事はみなこの稱名に相應するもので、單獨に功用をなすの理なければ、隨機隨時幾箇の行事あるも、全然專修正行に妨なし、之を一心一行のものとし光明海中に浮ぶの相となすのである。

次に「衆禍波轉」とあるは、轉惡成善の相で、仍ほ攝取光明中にあるの別相を示させらるゝのである。之にも亦法德と機相との二ありて、法德でいへば、初起一念のところに、三世の業障悉く轉じて、復繫縛の力なきことゝなる。近くは中興上人が「この大善大功德を、一念に彌陀をたのみまふす、われら衆生に廻向しまします故に、正定聚のくらゐ、また等正覺のくらゐなんどにさだまるものなり」と宣ふがこれである。信後に猶ほ煩惱を起し、罪惡を作ることあるも、既に至德を得、光明に攝めらるゝ身は、臨終を限りに妄念を飜し罪惡を轉じて、法性一如の大悟となることを決定せるゆゑ、たのむ一念の所、早や轉惡の德を具ふることゝなる。又其機相を云へば既に名願力に托し、佛光攝護に預る身は、慚愧の心時々起り來つて煩惱を抑へ、罪惡を誡め、道を進み德を行ふの美風を養成し、所謂賢を見ては齊からんことを思ひ、惡を見ては我も亦非行やあらんと、自己反照することゝなる。これみな佛智他力に催さるゝのである。中興上人は「心にまかせずして心をせめよ、佛法は心のつまるものかとおもへば、信心に御なぐさみ候」とのたまひ、實如上人は「佛法のこと、わがこゝろにまかせず、たしなめと御掟なり。こゝろにまかせてはさてなり。すなはちこゝろにまかせず、たしなむこゝろは他力なり」と宣ふ、佛智他力に催ふされて、多生の慣習たる妄念や非行が漸次に改まり來りて、其の

能く進むものに至つては、宛も其の人を異にするごときこゝなる。これが機相に於て見る轉惡成善の相である。波轉とは、亦海の喩に應じたる辭で、波が翻り轉ずる如く、惡が改まりて善となるを形容したものである。夫れ此の如くに非行は漸く改まり、善行は隨うて進む、快く人世に處して自他の幸福を增進しつゝ、日を送り夜を明して、無上菩提の當果に向うて進むもの、之を佛力保護の中に在る念佛行者の相とは云ふのである。

七

「卽破無明闇」已下の四句は、當來の利益を明したまふのである。中に於て、此一句は能得の因で、上の「乘大悲願船」の句意を提出したまふのである。無明闇とは、疑惑不信の自力執情のこと。疑心自力は佛智を了らず、故に慧明無し、之を夜闇に喩ふ。宿善時熟して、明かに佛智を信ず、攝受衆生の願力に疑なし、無明の疑闇忽ち去りて、信心の慧明此に生る、之が光明中に入るの相である。聖人は「無碍の光明は無明の闇を破る慧日なり」とのたまふた。佛の無碍光力、能く衆生の無明を破るのである。前にはその相を光明海に浮ぶと云ひ、今は裏面より言を立てゝ、無明闇を破ると云ふ。乘願の時が卽ち無明を破り光中に入るの時で、之を卽破といふ。故に此の句は上の意を提出して、次に當來の益を得るの因を擧げて示させらるゝのである。無明を破ると、光明に攝めらるゝと、別ではないのである。

次に「速到無量光明土」この已下の三句は、正しく未來の益を示させらるゝのである。中に於て此句は總で次の二句はこの句意を別開せらるゝのである。聖人が第十二、十三の兩願を擧げて、西方の佛土は報佛報土なりといふことを談じさせらるゝ中に「佛とは不可思議光如來なり、土とは無量光明土なり」とのたまうてある。卽ち唯佛與佛の智境界を無量光明土といふのである。速到とは、前の乘願船に應ずる言で、願船に乘じて速に疾く西岸に到るといふこと。惑染の衆生が願力に托するや、佛の智慧光に照されて無明の闇晴れ、三祇の時劫を經ず、萬行の修功を積まず、此の一生を畢るや直ちに無量光明の智境界に到達するのである。

八

次に「證大涅槃」とは、此句は往相の極果、卽ち略門一法句といふ無上菩提の智體である。般涅槃とは、大滅度のこと、煩惱罪惡の因悉く滅し生死輪轉の果永く離れ、復惑業苦の現はるゝことなき、究竟の妙境をいふのである。これは消極より云ふので、若し積極より云へば、無限の空間に一致して、微塵世界に智力の働くが光明無量、無限の時間に一致して、未來永劫に、萬德圓滿の果報の盡きぬが壽命無量、竪に横に自在自由、悲智雙運して毫も煩惱罪惡に壓制束縛せらるゝ憂のなき、無碍圓融の境界を云ふのである。「證普賢德也」とは、此の句は還相の攝化、卽ち廣門示現といふ利他遊戯地のことである。前句は自利、此句は利他、自利々他圓滿の妙境を無量光明土といひ、この光明土に到る處が卽ち自利々他究竟して顯はるゝ時である。普賢の德とは、已に佛果を成じて、自利々他究竟せるものが、衆生の爲めに、菩薩聲聞人天乃至三途の身を現じて、大悲の化事をなすを普賢の行となすの

である。聖人は『唯信文意』の中に「このさとりをうれば、大慈大悲きはまりて、生死にかへりいりて、よろづの有情をたすくるを、普賢の德に歸せしむるとはいふなり」と宣ひ、『和讃』には、「普賢の德に歸してこそ、穢國にかならず化するなれ」とも、「還相の廻向とゝくことは、利他教化の果を得しめ、すなはち諸有に廻入して、普賢の德を修するなり」とも讃述し給ふた。前の證大涅槃は大智の發現、自利の究竟、この遊普賢德は大悲の化事、利他の圓滿、智は火の如く昇りて極際に達し、悲は水の如く降つて最下に及ぶ、これこの二利圓滿なるが安養の自然の妙果で、無量光明土にいたるとき、即時にこの妙境に契ふのである。

上來八句に示さるゝ要旨は、惑染の衆生が一たび名願力に托するや、即時に光明中に攝められ、日日夜々其の保護中に起臥して、稱名相續し、慚愧の心能く惡事を謹み、慶喜の心能くはげみ、以て自他の幸福を增進しつゝ能く一生を畢へ、絶息閉眼の夕には、速かに眞實報土に往生して、即ち悲智圓滿の德を具し、自利究竟と同時に、廣く十方を濟ひ、遠く未來を化するの身となる。生きなば念佛申すべし、死なば淨土に參るべし、生存死亡、何れによるも憂なし、身は尙生死界に在りて、心は既に生死の外に超然たる情趣が如上八句の聖旨である。みなこれ本願力の妙作用で、之を一乘眞實無上の大利益とはいふのである。古今は長し、東西は廣し、而れども如上の利益を得せしむるもの、唯阿彌陀如來のみ、三世十方に絶えて、似たるものなしである。聖人は「本願一乘海は、頓極頓速圓融圓滿の教、絶對不二の教なり」と讃嘆せられ、聖人の信仰眼に映りたる彌陀願力の妙旨、淨土眞宗の深趣は粗此の如くである。嗚呼、不思議々々々、有緣の吾人須らく尊重信仰すべき事である

南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

# 六眞俗二諦

## 一

大正昭代の御大禮、御卽位、並に大嘗會、は曠古の盛儀で、諸事滯りなく結了遊された、洵に欽賀したてまつるべきことであります。して斯御大禮に値ひたてまつりし吾人の光榮は、實にこれ無上で、たしかに祖先をも輝し、子孫をも照すべきことであります。御卽位式の當日に賜はりし御勅語に、「爾臣民ノ忠誠公ニ奉ジ勵精業ニ從ヒ義ハ則チ君臣ニシテ情ハ猶父子ノゴトク以テ萬邦無比ノ國體ヲ成セリ」と仰せられました。實にありがたき光榮の極で、唯感泣するの外はありませぬ。已に斯御大典に値ひたてまつりし吾人は、斯の榮華をして大正四年秋季の一時にのみ止めしめずして、永遠に果實あらしむるよふ計らなくてはならぬが、其は大正の御昭代を翼賛するに在りて、其翼賛の道は、各自に其本分を努力するに外ならぬでありませう。御勅語に「爾臣民ノ忠實其本分ヲ守リ勵精其業ニ服シ以テ皇運ヲ扶翼スルヲ知ル」と仰せられてある。されば、吾人は誠意でもて斯聖意に副ひたてまつるよう、愈々益々奮勵し努力しなければならぬ。よりて御大典後一年の初に於

て、吾人眞宗信徒としての奉公は宗義體現の身となる是であります。それで聊か眞宗教義の大要を述べて、有緣の諸兄姉に告げまうさん。

## 二

さて眞宗の教義とは如何なることであらう、抽象的に之を言はゞ眞俗二諦であります。この眞諦二諦の言は、本は佛語に出でゝ、『本業瓔珞經』の佛母品に「二諦は能く佛を生ず、故に二諦は是れ諸佛の母なり」と說かれ、龍樹菩薩は『中觀論』の四諦品に「諸佛は二諦に依て衆生の爲に說法す」と示され、道綽禪師は『安樂集』に「諸佛の說法は、要ず二緣を具す、一に法性の實理に依る、二に須く其二諦に順ずべし」と述べられた。されば釋尊一代の說法も、各宗各派の弘通も、畢竟するところ、眞諦二諦の外はありませぬ。之を大にしては宇宙間の諸法、之を小にしては吾人の身心、みなこれ眞俗二諦で。其の能く之を體得したまへるかたを世尊と云ひ、其の之を體得せんとして實行の道程に苦勞せらるゝかたが菩薩であります。して吾人凡夫は現に己れ自身が其でありて、而も己れ自身に其なることを知らずして、爲に生死流轉の苦海に出頭沒頭しておるのであります。之を要するに、理論としても眞俗二諦の道理を說明するものが佛教であり、實行としても眞俗二諦を自身に體現するものが佛教であります。故に佛教深廣なるも、眞俗二諦の四字で盡して餘蘊はないのであります。此意なれば各宗各派を問はず、いづれもみな眞俗二諦の教義を弘通するもので、又其の實行者といふべきであります。

## 三

然るに、殊に我淨土眞宗を、眞俗二諦とか、眞俗相資とか、二諦相依とか、いふ名義で、他の各宗派と異なりた宗風を抽象し顯示することは如何であらう。之を佛說の『三部經』に探すに見ませぬ。之を七高僧の論釋に求むるにありませぬ。宗祖聖人や、覺如宗主はた中興上人のうへにも、さらにこの語は見當りませぬ。

吾人の朝夕拜誦する『正信偈』『和讃』や『御文章』にもたゞの一處として此語でもての教示はない。但御祖師聖人の御作『御本典』の中に、傳教大師の撰られた『末法燈明記』を引れたその中に「仁王法王互に顯れて物を開き眞諦俗諦遞に因て教を弘む」の語が見え、存覺上人の『六要鈔』に右の『末法燈明記』の作を述べて、「此書はこれ佛法王法治化の理を演べ乃ち眞諦俗諦和依の義を明す」と言れたが、此等の語意は、聖世尊が教法をもて衆生を開化するを眞諦とし、世の君主が政令をもて人民を統治するを俗諦とするので、所謂政治と宗教と相資くるを二諦相依といふたのでありて、殊に眞宗の教義を抽象的に說き示された語ではないのであります。其の殊に我眞宗の教義を示す言として用ひられたるは、蓋し近世のことかと存じます。明治二年九月に發せられたる、信法院廣如上人の御書に「夫れ當流は眞俗二諦の宗風にして、內に佛法を信じ、外に王法を勤め、人倫五常の世教を相辨へ候こと、觸光柔輭の自然の法理にして、高祖已來の宗則なり」と言ひ、同四年七月に示された。同上人『御遺訓御消息』に「一流の道俗、上に示す所の相承の正意を決得して、眞俗二諦の法義をあや

まらず、現生には皇國の忠良となり罔極の朝恩に酬ひ、來世には西方の往生をとげ永劫の苦難を免るゝ身となられ候やう、和合を本とし自行化他せられ候はゞ、開山聖人の法流に浴せらるゝ所詮、この上はあるまじく候」と仰せられてある。それより　信知院明如上人に及んで數々この語でもて一宗の教義を具體的に示された。隣山大谷派でも、此れ等の言にての教示は、今二三代前よりしてのことであると聞き及んでゐる。されば已前では、安心起行とか、世間出世間とか、又は王法佛法とかいふ言でもて說き示されしものを、近代に及んでそれを眞俗二諦の語に替へて教示せられたものであります。それ然り、教語の使用は近代に創まりしものなれども、教義のほゞは、宗祖聖人開示の別途眞宗で、それを抽象的に宣示する術語としたのであります。

## 四

さて眞諦俗諦とは如何なる義趣であらうかといふに。出世間の法、卽ち三界の苦を離れて涅槃の果を開く、轉迷開悟の道程に進行する方法が眞諦で、世間に處する方法、卽ち存命の間は、此世に在て、時處に相應したる適宜の行動を俗諦といふのであります。近く『領解文』に就て言はゞ、先づ安心を治定し、その上より佛恩報謝の稱名を相續し、尙教示の師德を感戴する、此等の前の三節がこれ眞諦で、後の信心治定のうへは聖人指示の法度を守るとあるが、卽ち俗諦であります。之を彌陀如來本願の本源に就て伺んに、攝取の願力を信ずる初起の三信より佛恩を感謝する後續稱名の乃至十念までが、これ眞諦で、唯除逆謗の抑止の佛意が、卽ち俗諦であります。それで眞諦は願生行者に限るの信行で、俗諦は普通一般に同ずる云爲であります。さて眞とは眞實で究竟して動きなきもの、時の古今によりて變易るとなく、處の東西によりて差別あるなく、又人の智愚上下によりて用捨されることのないのが眞實であります。生死の苦界を出でて、法性の常樂に至る往生淨土の安心起行、卽ち三心の信心、十念の稱名は、上代も末代も、東洋も西洋も、學者も愚者も、善人も惡人も、皆同じく之に依るので、時や處や人によりて區別せぬ、同じよふに願力を信じ佛名を稱へつゝ淨土に往生し卽成佛するのである、それで眞といふ。『歎異鈔』の中に宗祖聖人の言として「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらごとたはごとまことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますことこそ仰せは候ひき」といふが遺されてある。實にそれぢや顚倒虛僞の吾人をして、界外無漏の境遇に優游せしむるものは、唯是れ彌陀本願力の一法のみであります。三世十方の凡聖が、みなこの本願力に乘じて出離解脫するのであります。諦とは審諦と熟けて、物に明了なと、法の眞實にかなふたが諦であります。俗とは世俗とも風俗とも熟く字で、時の風、處の風で、それ〴〵のならはせのことであります。卽ち古代は古代、現代は現代で、毫も拘泥せずよくその宜に適ふ。西洋に在れば西洋風、東洋に住めば東洋風、決して固定せしことなく、たゞ其習に隨ふ。上に立ち下に働く、僧たり俗たり、官吏たり處士たる各自に其本分を全ふすれば可し、決して一規をもて律めぬ、かゝる隨宜の處世法を俗といふ。この處世法の明了で謬りなきを諦といふたもの。

眞宗の行者としての處世法は、一定の則なし、たゞ人類の本分を盡すをもて準とするので、中興上

人が『御文章』の中に「その後は人間のありさまにまかせて世をすごすべきこと肝要なり」と仰せられた。實にそうである、簡短なる斯法語に、時機相應の要法たることが示し盡されてありがたし。

## 五

抑、宗祖聖人が、源空聖人に親接じて、彌陀願力の攝受衆生の義理を聞いて、往生淨土の安心を獲得せられたるは、これ眞諦で、聖德太子に私淑して、妻子を帶び、魚肉を噉ひ、世人と事を同ふして、但其本分を盡すをもて要訣とする、隨宜の處世法は、卽ち俗諦であります。生涯非僧非俗で自ら安んじられたは、全くこの謂であります。『三帖和讃』に、源空聖人の本地を勢至菩薩とし、聖德太子の本地を觀音大士として仰崇せられた宗祖聖人の信仰が何はれ、覺如上人の造られた『傳文』繪相にも、亦その尊旨が見えてあるが、勢至は智慧をもて度脫し、觀音は慈悲をもて攝化したまふ。その慈悲智慧は、卽ち本佛彌陀如來の二德で、如來が二德でもて、十方三世の衆生を成就せらるゝ情態がこれ觀音勢至の二大士であります。『和讃』に「彌陀觀音大勢至大願のふねに乘じてぞ、生死のうみにうかみつゝ、有情をよばふてのせたまふ」とあるは正にこの謂であります。その二大士の化身たりと信ぜらるゝ、源空聖人に出世間の要法を承け傳へ、聖德太子に世間に處する方法を模ふとの謂が、取りも直さず本佛彌陀如來に攝化せられ、其を自の一身に體現せられたが宗祖聖人であることが明確に窺ひ知らるゝ。されば眞俗二諦は自ら他力でこれが、眞宗であります。それで眞俗二諦は不離不二でなければならぬ。彌陀如來の攝取の願力を信みて、念々に遺るゝことなく、稱名相續して、直に白道を尋りて西方淨土に向ふ眞諦ありて、隨分に世に處する俗諦に意義があるのであり、時と處とは一定の制限なく、男女智愚が各其本分に隨ふて、優然として人事に經營れる俗諦ありて、變化多き世のまに、動亂變易なき出世間の道程を進行する眞諦なるものが慶喜せらるゝのであります。眞俗相離れぬといふはこのことであります。又佛力を信み佛恩を仰ぐ眞諦が、優然として世に活動せしめて、所謂知らず識らず帝の則にかなふ情の人たらしめ、順逆苦樂の世事に於て、愈以て佛恩の深廣を仰崇ぐ、所謂「よきことを思ひ付るも御恩なり、惡きことだに思ひ捨るも御恩なり、捨つるもとるも佛恩なり」と感謝慶喜するもの、眞諦がこれ俗諦であり、俗諦が卽ち眞諦なりといふ興趣が、自然に實現するので、此等の興趣は、世間に出世に盡然とした區別は見ないのであるから、眞俗不二といはなければならぬ。

全體から言へば、諸大乘教卽ち、華嚴や天台や眞言禪宗等の圓頓大乘の諸家は、皆これ眞俗不二で、佛法として世間を離れたものではないので、人事已外に出世法なしとの教義でありますが、理想と實行と相伴ふことの難きは人類の弱點で、諸家も亦此患を免れずして、悟解は不二であるとも、實地の修行は之を分つの必要ありて、傳教の叡山に籠り、弘法の高野に構ふ等、諸家も亦同じく、各々僧俗を分ち、世出世を離して、自然に山佛法寺法義の形成となりしもの、これ實行が理論に伴ひ難き例證ではないか。

方今彼家の末徒に宗祖の遺制を改易して眞俗不二を實行せんとする形勢であるが、古に難くし

て今に易きこの理はこれあるまじければ、畢竟は巧辯者の墮落かと思はる。獨り我眞宗教義は、眞諦は俗諦を妨げず、俗諦は眞諦を障へず、否相障へず相妨げざるのみならず、大に相依り相資くるのであり、念佛者が人事に勵むのであり、世間に處するまゝ白道を進行しつゝあるので、世間卽ち佛法、佛法これ世道、廣如上人の「生きては皇國の忠良となりて罔極の朝恩に酬ひ死して西方の往生を遂げて永劫の苦難を免るゝ身となる」と教示したまふ通りであり、實に時機相應の要法、難有こと の極であります。今や我日本帝國は人類社會に於ける重大の任務を負てをるのであります。近くは支那に對しての處置、遠くは歐米に對する折衝、歐洲戰後の經營、東洋平和の保持、世は刻々に變轉し、毫も油斷を許さず、今や世に物質的文明の進歩の長足にして、精神界の文明の遲々不振なるを觀て、人世の前途を悲觀するものがあります、必ずしも杞憂でもありますまい。人類救濟の道は幾多あるべきも、精神的文明の指導より先きなるものはあるまい。その精神的文明の指導は、必ずや宗教に根柢せねば成功せぬ。而して宗教多しといへども、吾人の信ずる所、必ず我淨土眞宗ならざるべからず。これ誓願一佛乘の金言に本くのであります。

されば、世界に於る日本國の立場として、日本に於る佛教徒の責任として、同胞に於る眞宗僧俗の報恩の經營として、必ず右述る所の眞俗二諦の體現者たることを勉ねばならぬ。卽ち宗祖親鸞聖人の繼續者たる光榮を輝さねばならぬことであります。

御大典に値ひたてまつりたる吾人眞宗信徒の任務は、たゞこれ此であります。

南無阿彌陀佛、〳〵、〳〵。（大正五年一月）

# 七　淨土眞宗

## 一

我眞宗は、具さには淨土眞宗といふのである。淨土とは、往生淨土の略語で、此は教法の名であり て、支那隋朝の道綽禪師に始りたもの。禪師は、實に我眞宗の第四祖で、禪師の撰述せられた『安樂集』の中に、釋迦御一代の說法を分て、聖道門と往生淨土門との二門となされた。聖道門とは、此娑婆界で悟る諸佛の敎法に名けたので、それに對して彼安樂土に生れて得脫する阿彌陀佛の敎義を往生淨土門といふたものである。其往生淨土とあるを、今略して淨土といふたは、吾人の期待すべき淨土をもて、直ちに尊崇む宗門の名稱としたので、卽ち期する所の淨土の言をもて、宗とする所の名稱となしたのである。眞宗とは、往生淨土門の中に、眞實と方便との別があり て、其方便の法に揀ぶから、更に眞宗といふたもの。仍て宗祖聖人は、如是に言された。

淨土宗のなかに眞あり假あり、眞といふは選擇本願なり、假といふは定散二善なり、選擇本願は淨土眞宗なり、定散二善は方便假門なり。（『末燈鈔』に出づ）

阿彌陀如來は、吾人衆生を自の安樂淨土に往生せしむるをもて其誓願となし、永劫の苦行で能くそ

の誓願を成就して、往生淨土といふ吾人凡夫の苦を出離るゝ一門を開かれたのである。

抑、阿彌陀佛には四十八の誓願ありて、其中に衆生の淨土に往生する生因を誓はれたものが正しく第十八と第十九と第二十との三願である。此三願に眞實と權假とが分れて、第十八願が是れ選擇本願で、佛隨自意の眞實であり、第十九第二十の兩願は是れ佛の隨他意で、本願眞實に引入れる方便權假の施設である。三願ともに同じく淨土に往生する宗なるも、眞實と方便との別があるで、彼權假に採んで此本願眞實の法に、眞宗の名を附けて、佛の御本意なることを表示して、淨土眞宗と稱へたのである。如是に、淨土眞宗といふ名稱は、本は彌陀本願の法を表示すのであるが、之を釋尊が如實に解說されたが、『大無量壽經』ゆゑ、宗祖聖人は又大無量壽經を淨土眞宗ぢやと仰せられた、(『御本典敎文類』に)。又此經の意を如實に傳へられたが三國の七高僧なるゆゑ、宗祖聖人は亦三國の祖師が眞宗念佛を開興すと示された。(『御本典化文類』及び『御傳文』に)。

されば、淨土眞宗は佛祖相承の敎法でありて、宗祖聖人の私創されたものではない。併し之を明確に已證し已證そのまゝを精明に開示し、以て立敎開宗の標幟を建られたるは、正に我親鸞聖人である。故に吾人は聖人の開示によりて、方に佛祖の淨土眞宗に悟入するの大慶を享受るので、換言すれば、吾人は親鸞聖人に私淑(おしく)られて、正に淨土眞宗の念佛者たる光榮を得るのである。此意義に於て、親鸞聖人を眞宗の開山として尊敬したてまつるのである。

## 二

第十八の本願に、若不生者不取正覺と誓ふてある。此誓願に由て成佛したまへる阿彌陀如來を、『觀經』には「光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨」と言ひ、『阿彌陀經』には「彼佛の光明は十方の國を照したまふに障碍する所なし」と說き、善導大師は(二河譬喩の中に)「我れ能く汝を護る」と述べ、宗祖聖人は(『御本典行文類』に「攝取して捨てたまはず、故に阿彌陀佛と名く、是を他力と曰ふ」と示し、中興上人は(『御文章』に)「阿彌陀といふ三字をば、をさめたすけすくふとよめる」と、極めて簡明に論された。爾れば、平俗にいふ彌陀如來の御たすけといふは、如來が吾人を彼淨土に往生せしめたまふことをいふので、此吾人凡夫を淨土に往生せしむることは、十方諸佛に絕えて無きことで、阿彌陀佛のみ獨り能く之を作したまふ超世不共の攝化なのである。それゆゑ、一切諸佛が皆共に彌陀の攝化を讚嘆して、吾人凡夫を勸めて彌陀の淨土に歸入せしめたまふのである實に此往生淨土の一門こそ、凡聖善惡男女智愚、齊しく之に歸し、同じく轉迷開悟の宿願を遂ぐべき一乘大智願海の妙法である。

往生といふは、此土を捨てゝ彼土に往きて蓮華の上に化生することで、本願には欲生我國と願じ、願成就には願生彼國と述べ、宗祖聖人は

凡夫といふは無明煩惱われらがみにみちゝて、欲もおほく、いかりはらだち、そねみねたむこゝろおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とゞまらずきえずたえずと、水火二河のたとへにあらはれたり、かゝるあさましきわれら、願力の白道を一分二分やうゝづゝあゆみゆけば、無

碍光佛のひかりの御こゝろにおさめとりたまふがゆゑに、かならず安樂淨土へいたれば、彌陀如來とおなじくかの正覺のはなに化生して大般涅槃のさとりをひらかしむるをむねとせしむべしとなり（『一多證文』に出づ）

とも、又

なごりおしくおもへども、娑婆の緣つきてちからなくしておはるとき、かの土へはまいるべきなり（『歎異鈔』に出づ）

とも示された。中興上人は

一期のあいだはこの光明のなかにすむ身なりとおもふべし、さていのちつきぬればかならず淨土にをくりたまふなり

と述べさせられた。安樂淨土は、法藏菩薩の清淨なる願心によりて莊嚴し成就されたる報佛土であるゆゑ、彼土の德として、自然に往生するものをして皆悉く法性眞如を證りて、往生するや卽に成佛するのである。之を宗祖聖人は、難思議往生とも云ひ、「卽證眞如法性身」とも言ひ、中興上人は「淨土にまいりてうつくしき佛とはなるべきなり」とも仰せられた。空間的に十方世界に自由に活動し、時間的に未來永遠に榮華を享有する幸福は、彼淨土に往生してのみぞ受けらるゝことである。

## 三

爾れば、彌陀如來が吾人衆生を救濟したまふといふは、此不完全なる迷界より彼自由な淨土に轉生させたまふことをいふので。吾人の安心は、彼淨土に往生せしめたまふことに過誤なき彌陀佛の大悲願力を信むのである。吾人の求るすべてが、彼淨土に往生して滿足せしめたまふ佛力を仰ぎて、その慈悲救濟の恩寵に安んずるのである。本願には信樂欲生と云ひ、經には信心歡喜願生彼國と說き、天親菩薩は一心願生と述べ、善導大師は彼願力に乘じて定めて往生を得ると示し、又宗祖聖人は

二尊のめしにしたがふて安樂淨土にむまれんとおもへとなり

と釋された。

如此に、未來の永遠に向ふて徹底したる安心に、幾多の幸福が現在より發生するので、之が眞箇に現實の宗教的光榮といふべきものである。

世に往生したといふ俗諺がある。他の强き力に壓制せられて、それに打勝つこと能はず、百計なすなく、苦痛のまゝに了る場合に使用された俗諺で、宛ながら死亡と同じ意味の用語となりてある。思ふに、佛教に云ふところの往生が、人生の最後たる死の次に顯るゝ出來事であるから、次に起る往生を、前の終りなる死亡の事に使用して、抗抵に力なく、苦痛のまゝに了ることを形容する俗諺となりたのであろう。併ながら佛教に云ふところの往生は、決して如是な厭ふべく恐るべきものではないのである、人情としては、死は好もしからぬ悲むべきものであるが、次に顯るゝ淨土の往生は、難思議往生とも示されて、往生すれば卽に成佛するのでありて、實に無上の幸福なのである。横に空

間的に十方に亘りて自由に活動し、竪に時間的に永遠に通じて威德を保有し、智力に、慈愛に、無限の活動をなす新天地が展開するのである。眞個に慶喜の極みである。世にいはゆる生は、生は喜ぶべきものなりとするも、生には必ず死といふ悲むべきことが裏づけられて、悲むべき死の絶えた生といふことは、この世の中には絶無である。されば、生には必ず死が伏在するものであれば、生るゝとて絶待の喜びでもない、さりとて死も亦次の生るゝといふことの相續ぐべきことを知らば、死も必ずしも悲むべきでもない。死生を達觀する正智あらば、吾人がその一方に偏りて、或は喜び或は悲む底の固執は少しもないのである。が、生死に通ずる安心は、やがて生死を超越するの大達觀がなくては不可能である。安樂國は無生の土で、往生といふがそのまゝ無生の生で、生も死も超絶したる生でありて、凡夫の出沒往來する三界中の生とは同じからぬのである。空間的にも、生死の悲喜を超絶したる眞個の幸福が顯現はるゝことを、淨土の往生とはいふのである。

## 四

方今眞宗と自稱する一類の徒に、死後の往生を閑却放任して、現代本位の彌陀の救濟を鼓吹するものがある。如此の說は、信仰の對象たる彌陀佛をば、若不生者不取正覺の誓願に報ひて衆生を淨土に往生せしむる正覺成就の御方なる事を認めぬのであるから、阿彌陀佛といふも、本願成就の佛ではなくて、私に構造した架空の佛である。隨つて、自己の信仰も、往生一定御助け治定の信心でないから、亦これ一時幻影の安心である、決して確實な救濟に預る徹底せる安心であるべきやうもない。

又一類の徒ありて、信仰といふものは、各自の實感であり、畫一なるべきものではない、故に今時の吾人は、必ずしも往年の親鸞聖人と、その安心の內容の同異を檢ぶるの要はないといふ、此亦宗義に違ふた不心得ものである。信仰の內容が聖人と同じからずといふならば、たとひその人は眞宗と自稱するも、親鸞聖人の御己證によりて開示させられた眞宗ではない。聖人の開示させられた眞宗は決して安心の各別を許さない、時の古今と性の冷熱とに關はらず、必ず同一のものとせられてある。其は、衆生の信心は佛願力によりて惹起されるので、衆生の智愚善惡によりて加減上下するものでないからである。若しそれ安心より發現する起行の動作は、自他甲乙人によりて同じからずで、同一人の上に於ても、昨日と今日との行事は各別である、其は性を異にし緣を同ふせざるに由るからである。されども、起行の同じからざるが爲に、信心も亦各別なりといふは決して親鸞聖人の開示せられた眞宗ではない。近くは『御傳文』上卷の第六、七の兩段を拜讀しても、それが明了に解ることである。聖人と同一の信仰でないことを自認して、恬として省みざる人は、其は無緣である、强るも詮なきこと。

又一類の徒ありて、疑ひながらの往生といふて居る、此亦如實の信者ではない。宗祖聖人は、佛祖の敎示によりての御己證の信仰ぶりを宣示して、「涅槃の眞因は唯信心を以てす」と云ひ『信文類』に出づ、「唯はひとりといふこゝろなり、信はうたがふこゝろなきなり、すなはちこれ眞實の信心なり」とも云はれた『唯信文意』に出づ。中興上人は「かゝるあさましき機を本とたすけたまへる阿彌

陀如來の不思議の本願力なりとふかく信じたてまつりてすこしもうたがふこゝろなければかならず彌陀は攝取したまふべし」(『御文章』第二帖の第十五通に出づ)と云はれた。此等の教示に背くことは勿論、自語の上にも相違がある。疑は闇で、信は明、疑闇は夜の如く、信明は晝の如し、明るい晝と闇い夜とは同時に並立すべきものでない、疑ひながら往生すと信ずるといふもの全く此と同じことで、自語の相違が明了である。又道理に背く、水瓶に蓋が除かれずして、月影の宿る道理はない。たすくる佛智が衆生心中に印現すれば、疑の蓋は除かれた筈で、疑の蓋が猶ありては、佛智の月光は、未だ宿りてはないのである。纜を切らねば船は出ぬ、彌陀の攝取を疑ふ纜がそのまゝでありては、極樂に向ふて進むべき船は未だ出ぬ。西に向ふの白道を進むものが、西岸よりする招喚と東岸よりする發遣とを信ぜぬことのあるべき筈はない。若し二尊の發遣招喚を疑ふ心あるものは、未だ白道に乘らざるので、西岸を指しての進行者ではないのである。思ふに、此は信心を獲得するといふことを誤解して、何物か一箇の物を凡夫心中に貰ひ受けることのやふに思ひなして、煩悶苦心するものあるを見て、楔をもて楔を拔き、毒をもて毒を制するやふな手段に出たものとも見らるゝけれども、それとしても、甚しき不心得である。若しそれならば、其信心領解の難きやふ思ひなせる誤謬を洞察し、明かに正義を示して、唯大悲攝取の理りを聞いて、其願力をたのむばかりなるよしを教へなば、必ずや、あら心得やすの安心やとたやすく領解すべき筈で、決して常教になき手段の必要はないのである。若し別に手段の必要ありとせば、宗祖や中興には、未だ教示の盡さゞるものありて、今は其已上の教導方法を創むることゝなる。越祖の罪の大なること、皷を鳴して攻めなければならぬ。尤も世に傳ふ、宗祖聖人が其女の覺信尼公に御遣しの物として、一通の消息ありて、それを金科玉條として、疑ひながらの往生の證文とすれども、彼消息は僞物である、決して聖人の親撰せられたものではない、何となれば、宗祖の他の消息に照しみて其筆格の相似ておらぬこと、又その教示が全然相反戻するからである。

## 五

さて死後の往生卽ち未來の得脫を期する淨土眞宗の信仰者には、未だ往生せざる前に、卽ち今世に於て、種々の法益あることは勿論なるが、其は往生の大益に隨伴ふ自然の法德でありて、彌陀をたのむ信仰の餘益である。決して現代の救濟による利益を目標として佛力をたのむ安心ではない。宗祖聖人が、今世に得る法益を示したまふに

金剛の眞心を獲得すものは、横に五趣八難の道を超え、必ず現生に十種の益を得る。(『信文類』に出づ)。

と示めされた。金剛の眞心とは、彌陀をたのむ信心で、卽ち如來の吾人を攝取したまふ眞實心が、吾人の身に受けられたのである。此如來の攝取の受けられた處に、所得の益として、先づ横に五趣八難の道を超ると示された。五趣八難とは、生死の絕えぬ苦痛の境界のことで、それを頓に離るゝを横に超るといふ、是は消極的に當來の利益を擧たもので、之を積極的に言換れば、昇道無窮極とあり

て、無上佛ことなることである。斯る當來の大益を得べきものには、必ず現世の利益ありとして、後に現代に得る德相を十種擧られた。其は今世の利益は、當來の所得に必具する法德なるからである。恰も太陽が將に東山に上らんとするや、先づ明相を現ずるが如く、當來の益を得ることに定まる處に先づ現代の利益がず生るからである。又種因は必ず果實を結ぶ、其果實を結ぶ前相花である、花とと實とは同じく是れ因に報いたるものなれども、實に正しく種因に對する果報でありて、花報は其果報に必具する前相である。それが如くに、眞實信心の因には必ず往生し成佛するの果實がある。其當來に結ぶ果實の前相が、現生に得る十種の利益である。『御文章』には、正定と滅度とは二益で、正定は此土にて得、滅度は彼土にて得るとと示されたのも、亦此意義を明了に述べさせられたのである。

聖道門は、自ら菩提心を發し、諸善萬行を策修して、直ちに成佛を期するので、故に難行なので、凡夫の能すべきことではないのである。淨土門は、自ら勤めて此土にて成佛を期するのではない、佛願力が凡夫を攝取て淨土に往生せしむ、往生すれば土德自然に卽ち無生を證す、故に易行道で、低級弱劣なる凡夫も、亦能く通入することを得る。眞にこれ萬機普益の法門である。爾れば阿彌陀佛の攝化の極要は、淨土に往生して成佛せしむるのでありて、現代の利益をもて攝化の本義とはせられないのである。其現在の利益は、當來の往生に隨伴ふ自然の法德である。『持名鈔』の中に、『藥幹喩經』を引いて喩を擧て此意が示されてある。米を求めて耕作せば米を得る處に藁は自ら具るが、藁を求るものには、米は必ずしも得られない。それと同じく、當來の往生を求めて之を得るに定まりなば、現世の利益は必ず相具るべきも、主として現在の利益を望むものには、當來の果實は必ず得らるゝとは云へないのである。

嗚呼、彌陀願力の攝取を信ずる行人は、たのむ一念の處に往生は必ず定まりぬ。往生の定まる身には、幾多の勝事が自然に相隨ふ。『信文類』には十種の益を列ね、『現世利益和讃』には十五首に讃述し、『歎異鈔』には四德が列ねてある。此等のことは、皆宗祖聖人の實驗を述べられたので、吾人も亦斯る佛恩に浴するのである。彌陀如來の恩德を知らざりし前時に比べて、今時佛恩を感荷せる消息を省れば、必ずや其大に異なれるものを了知すのである。

されば、千變萬化、一事として定まりなき世に處して、悠々として迫ることなく、權威もあり、興味もある、一條の白道を尋りて、少しも動亂の憂懼もなく、朝に、夕に、出るに、入るに、唯佛恩を念じ、專ら佛名を稱へつゝ、安んじて國家に盡し、社會に勉むることを得るものは、これ彌陀佛力をたのむ信心決定の生命ある生活である。之が眞個に徹底せる安心の力强さ淨土眞宗の念佛行者の幸福である。

南無阿彌陀佛、〳〵、〳〵。（大正八年一月）

# 八　佛法力の不思議

## 一

佛法力不思議の文字は、龍樹菩薩の撰せられた『智度論』より採る。彼に諸經に散在せる不思議說を統合して五種とせられた。五種といふは、一に衆生多少力、此は衆生が恒に五道に充滿して、計ることならぬ多數なるをいふ。二に業力、此は十惡の輕重によりて、三惡趣を感じ、五戒十善の功力で、人天の果を得、四禪八定は、色無色界の生を受く、乃至人類は横目竪鼻で、動物は四肢横行で、鷺は白く、烏の黑き、一として業力ならざるなきをいふ。三に龍力、此は欲界中に於て、勢力增上の者を擧げたもの、『華嚴經』の說によれば、竪に六天に遍く、横に四域に亙り、雲を作し雷を震ひ、一滴の水能く四天下に雨らす、施設自在なりといふ、是である。四に禪定力、此は四禪八定にも、既に種々の力用がある、況や出世無漏の定をや、瓦礫を變じて如意珠となし、地に入ること水の如く、水上を行くこと地を履むが如く、手に日月を握り、足で大地を動す等の神力あるをいふ。五に佛法力、此に通別の二あり、通じては十方諸佛、各々に種々の神通妙用あるを謂ひ別しては西方の彌陀の攝生、五乘をして齊く報土に入らしむる威神力を謂ふ。已上五種、皆是れ不思議なれども、初は淺く、後は深し、故に第五の佛法力が、最勝微妙で、實に是れ不思議中の不思議である。今はそれを述んとするのである。

已に佛法力不思議の言は、眞宗傳燈の初祖龍樹菩薩に出でゝ。之を第二祖の天親菩薩は、『淨土論』の中に、「安樂國土莊嚴功德は不可思議力を或就す」といふて、彼彌陀佛の國土に就て、不可思議力を說れた。それを第三祖の曇鸞大師が講述するに當りて、先づ龍樹の言ふ五種不思議力を擧げて、後に天親の言ふ佛土不思議に二種力ありとし、「一には法藏菩薩の大願業力の所成、二には正覺阿彌陀法王善住持力の所攝なり」といふて、國土莊嚴の一一に就て、大願業力と善住持力の不思議力の相を說れた。思ふに彼二種力といふは、法藏の願力と彌陀の果力で、唯是れ彌陀如來の願力である。宗祖聖人が、『和讃』に此意を、

いつゝの不思議をとくなかに　佛法不思議にしくぞなき
佛法不思議といふことは　彌陀の弘誓になづけたり

と讃述せられた。而して曇鸞大師は、生死罪濁の凡夫が、能く彼彌陀佛國に往生して、生死卽涅槃の妙果を得るは、阿彌陀如來の本弘誓願力が其增上緣となるからであるとて、慇懃に之を示された。『和讃』の

本願圓頓一乘は　逆惡攝すと信知して
煩惱菩提體無二と　すみやかとくさとらしむ

といふ已下の數首が、此意を讃述せられたもの。

## 二

眞宗の第四祖道綽禪師は、『安樂集』を撰して、中に特に一章を開いて廣く問答を設けて、煩惱成就の凡夫が、能く淨土に生まれて、生死の迷界を出で、法性常樂を證ることは、佛法力の不思議であることを明された。中に、初に七番の喩が擧げてある。丈夫百人が、百年の間苦勞して薪を聚めて、積みあげた高さ百仞なるが、しかれども豆許の火をて、之を焚んに、半日にて便ち盡す。辯者も他船に寄